神秘学ポエジー 風遊戯 mediopos 125

【神秘学ポエジー〜風遊戯 第 255集】media-poesieヴァージョン

mediopos 3101–3125

2023.5.15〜 2023.6.8

神秘学遊戯団

☆mediopos-3101　　2023.5.15

多和田葉子『パウル・ツェランと中国の天使』は
すでにmediopos-2982（2023.1.16）で
とりあげているが

「文學界」の2023年6月号に
「文学と文学研究の境界を越える
『パウル・ツェランと中国の天使』をめぐって」
という多和田葉子×関口裕昭×松永美穂よる
鼎談が掲載されている

mediopos-2982でも
パウル・ツェランの詩の翻訳における
「門構えの重要性」に関する
訳者の関口裕昭による示唆を紹介している

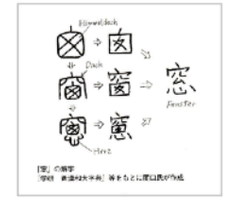
作者の多和田葉子が
「聞」と「閃」における「境界」に注目していること
そしてツェランの詩的言語の翻訳における
「穴冠」を用いた「穴」「空」「窓」という
三つの漢字によって
「新しい解釈の世界が見えてくる」という示唆である

訳者としても
「これが僕が今回一番この訳で力を入れた、
重要だと思った部分」なのだという

とくにツェランの詩や多和田葉子の作品とは
直接関係してはいないが
ちょうどその小説の訳が刊行された今年一月
ほぼ同時期に
『穴と境界／存在論的探究』という哲学論文の
「増補版」（初版は2008年）が刊行された

まさに「境界」であり「穴」

はたして「穴」とは何か
「境界」とは何か
について考える端緒となった興味深い論文である



■多和田葉子(関口裕昭訳)『パウル・ツェランと中国の天使』(文藝春秋 2023/1)
■【鼎談】多和田葉子×関口裕昭×松永美穂
「文学と文学研究の境界を越える――――『パウル・ツェランと中国の天使』をめぐって」
（文學界2023年6月号）
■加地大介『［増補版］穴と境界／存在論的探究』（春秋社 2023/1）

「穴」も「境界」も
だれにとっても身近にあるにもかかわらず
それは存在しているのか存在していないのか
それは具象なのか抽象なのか
それは物質なのか非物質なのか
というように
「もの」と「こと」のあいだにあって
きわめて不思議である

「穴冠」のついている
「穴」「空」「窓」という漢字も
それは「もの」と「こと」の「境界」にあって
それそのものが存在と非存在のあいだで
ゆれている現象であるともいえる

つまりたとえば「穴」は
「穴」という現象としては成立していたとしても
「穴」そのものが存在しているわけではないように

ツェランの詩を
そうした「境界」としての「穴」によって
「解釈」するということ
そこに「翻訳」の創造性が
まさに「窓」のようにひらかれていることは興味深い

▪多和田葉子(関口裕昭訳)『パウル・ツェランと中国の天使』(文藝春秋 2023/1)
▪【鼎談】多和田葉子×関口裕昭×松永美穂
「文学と文学研究の境界を越えるーーーー『パウル・ツェランと中国の天使』をめぐって」
（文學界2023年6月号）
▪加地大介『［増補版］穴と境界／存在論的探究』（春秋社 2023/1）

（多和田葉子『パウル・ツェランと中国の天使』〜関口裕昭「訳者解説」より）

「八二年にドイツにわたり、日本語とドイツ語の両方で創作を始めた多和田は、大学でドイツ文学の学業を続け、自分なりにツェランを読み続けていた。あるとき『テクストと批評』という定期刊行物から「ドイツ文学は外国でどう読まれているか」というテーマで原稿の依頼があり、テーマ設定に多少の疑問を感じながらも、執筆を引き受けた際に書いたのが門構えをめぐるツェラン論であった。これは「モンガマエのツェランとわたし」と題して『現代詩手帖』（一九九四年五月号）に日本語に訳して発表され、さらに「翻訳者の門ーーーーツェランが日本語を読む時」という題で『カタコトのうわごと』に収録された。
　そのきっかけとなったのは知人のクラウス＝リューティガー・ヴェアマンが、多和田がコピーを送った飯吉光夫の『閾から閾へ』の日本語訳に対して（ヴェアマンは日本語を学んでいた）、その翻訳における門構えの重要性を指摘したことに始まる。確かに『閾から閾へ』のその日本語訳には門構えの漢字ーーーー閾、闇、閃、開、間、門などーーーーが頻出する。ツェランの「ぼくは聞いた」は「ぼくは「聞いた、水の中には／石と波紋があると、」と始まる。これらを踏まえて、多和田は「聞」という字についてこう述べる。「「聞」という字では、門の下に耳がひとつ立っている。聞くというのは、全身を耳にして境界に立つということらしい」。また「閃」という字については、「門の下に人がひとり立っている。（･･･）もしかしたら、門の下、つまり境界に立っている人の目には、見えない世界から閃き現れてくるものが見えやすいのかもしれない」と述べている。
　注目したいのは多和田が双方の「境界」に注目していることだ。単にツェランの詩に「門」や「扉」と訳せるTorという形象が頻出するだけではなく、ツェランの詩的言語が境界そのものであることを暗示しており、そこに難解であるツェランの詩の「翻訳不可能性」ではなく「翻訳可能性」を多和田は読み取っている。多和田はこうしたことを計算したうえで、つまり日本語に訳された時にどうなるかを考えてこの小説もドイツで書いたと訳者には思われる。

　　彼は深夜の段数を数える。（･･･）彼が四十七を数えると、彼の鍵が鍵穴にぴったり会う。彼の住まいは毛むくじゃらの建物の屋根の真下にある。曇った小さな天窓だけが外に開かれており、空が賭けに加わると、その空間は薄暗い穴ではなくなる。（九四頁）」

（【鼎談】多和田葉子×関口裕昭×松永美穂「文学と文学研究の境界を越えるーーーー『パウル・ツェランと中国の天使』をめぐって」〜「空、窓、穴」より）

「関口／これが僕が今回一番この訳で力を入れた、重要だと思った部分です。

　　94頁「彼は深夜の段数を数える。登っては数え、その数が登り続けるモチベーションとなる。彼が四十七を数えると、彼の鍵が鍵穴にぴったり会う。彼の住まいは毛むくじゃらの建物の屋根の真下にある。曇った小さな天窓だけが外に開かれており、空が賭けに加わると、その空間は薄暗い穴ではなくなる（原文略）」。

　日本語の「空」には、英語のskyとかドイツ語のHimmelとちょっと違うニュアンスが含まれています。漢字の「空」は、穴冠なんですよね、空は一つの空洞で、穴の下に工という文字がある。工具でつらぬく、という意味です。ですから、漢字を見ると、普段見えていた空が、別のイメージになってくるわけです。「むなしい」とか「うわのそら」といった意味が導き出される。
　これに気づいたのは、実は学生向けに白雪姫を翻訳していたときでした。お妃が雪を見ているシーンに窓と空、指を突くという言葉が出てきて、偶然、穴冠が重なっているな、と。多和田さんがこの小説で、門構えや草冠の漢字について、ツェランの詩を通して書いていることを僕も使わせていただいて、穴、窓、空と穴冠の漢字を用いて訳しました。

松永／多和田さんの「翻訳者の門」というツェラン論に、ツェランの日本語の詩集に門構えの漢字たくさん出て来ることから、新しい解釈の世界が見えてくる、とありましたね。」

（加地大介『［増補版］穴と境界／存在論的探究』〜「第２章　穴」より）

「世界は穴で充ち満ちている。しかし他方、穴ほど「存在感」のいものも珍しい。穴など存在しない、少なくとも「実在」しない、と言いたくなる要因は山ほどある。穴を穴たらしめる一つの本質的要件は、そこに何もないということである。穴は無によって存在する、という逆説的構造がそこにはある。また、穴が存在するとすれば、それは時空間の中に存在する以上、「具体的な対象」であるはずである。しかし、それは「物理的な対象」すなわち、「物体」であると言えるだろうか？　むしろ物体の欠如によってこそ穴たり得るのだとすれば、やはり物体とは言えないのではないか。もしも言えないとすれば、穴の存在を承認することは、「非物理的な具体的対象」の存在を承認するということになる。現代に生きる多くの物理主義者にとって、そのような穴という存在者は容認しがたいものであるはずだ。
　もちろん、先に挙げたような穴たち（註：（自然的対象）洞穴、窪地、谷間、盆地、川、池、湖、海溝など／（人工物）ＣＤの中心の穴、フロッピードライブ・ＵＳＢプラグ・電気コンセントなどの差し込み口、スピーカーの細かな穴、引き出し、ゴミ箱、洗面台、コップ、バケツ、電線チューブ、水道管など）は、あくまでも私たちとその環境という、日常的・生物的レベル、いわゆる中間レベルでの話なので、量子論的なミクロレベルおよび宇宙論的なマクロレベルという物理学的（および化学的）レベルにおいては、穴のような非物質的存在者は必要ないと言えるかもしれない。しかし、物理学によって記述される世界にも穴はしばしば登場する。ディラックによって「負エネルギー粒子（negativ-energy particles）の海」の中の「穴（泡）」としてその存在を予言されたのが、その直後に発見された陽電子を代表とする反粒子である。またマクロレベルにおいても、例えばブラック「ホール」の理論は現行の宇宙論の要である。これらの点で、いわゆる「穴の実体化」の最良の例を提供しているのが実は最先端の物理学であるとさえ言える。自然科学においても、穴は決して「侮れない」のだ。」」

（加地大介『［増補版］穴と境界／存在論的探究』〜「第３章　境界」より）

「カサティとヴァルツィおよびスミスは、真正境界と規約的境界という区別と、ボルツァーノ的境界とブレンターノ的境界という区別とを連動させて捉えていた。しかしむしろ、両者は独立の区別と見なすべきではないだろうか。彼らによれば、真正境界はボルツァーノ的境界であり。規約的境界においてのみ、それをブレンターノ的境界として捉える余地があった。しかし、ボルツァーノ的・ブレンターノ的という区別は、非対称性・対称性という区別を中心とする抽象的・構造的対比であるという点において、そもそも真性的・規約的という具体的・内容的対比とは異質のものなのではないだろうか。
　また、真正的・規約的という区別は、当該の対象がどのような由来によって（広い意味での）「実在性（reality）」もしくは「客観性（objectivity）」を帯びているのかに関する区別であると考えられる。すなわち、それが物理的、自然的な要因によってもたらされているのか、それとも社会的、制度的な要因によってもたらされているのかという相違である。そしてその区別には色々な解釈や程度の余地があり、また、（例えば、地理的不連続性に基づいて定められた国境のように）必ずしも両者は排他的ではないようにも思われる。
　私はこれに対し、むしろ境界に関して重要な区別は、現実的（顕在的actual）：可能的（潜在的potential）という様相論的な区別ではないかと考える。したがって例えば、国境のような「規約的」境界であっても、それは制度的に定められたところの「現実的」な境界であり、また逆に、心臓とその周辺部分の身体的境界は、少なくとも生理学的な機能に裏打ちされた自然的境界であるという点で「真正的」であるが、少なくともそこに顕在的な不連続性は存在しないという点で、「可能的」な境界であることになる。（･･･）
　もしも以上のような二種類の基準を採用すると、境界には、表のような四種類が存在することになる。」

※以下、「表」も文字部分のみ記載

	現実的（顕在的）	可能的（潜在的）
非対象的（ボルツァーノ的）	非対症的現実的境界 例：物体とその補空間との境界	非対症的可能的境界 例：物体のある（真）部分とそれ以外の部分との境界

	現実的（顕在的）	可能的（潜在的）
対象的（ブレンターノ的）	対症的現実的境界 非対症的現実的境界 例：接触し合う物体間の境界	対症的可能的境界 非対症的可能的境界 例：物体の接触し合うある（真）部分間の境界

「そしてこのように分類してみると、結局のところ、非対症的境界と対象的境界との相違は、そこで問題とされている物体が一つであるか二つであるかという相違に他ならないことがわかる。」

☆mediopos-3102　　2023.5.16

Ｗｅｂマガジン「考える人」の
建築家・堀部安嗣の「建築の対岸から」の連載
2023年5月10日付の記事で
「若松英輔にきく、身体の内に建てる家とは？」
（前編・後編）が掲載されている

家は私たちの「外」に建てられる建築物だが
若松英輔はマイスター・エックハルトの
「人は心の中に神だけが住む場所を持たねばならない」
須賀敦子の「霊魂の中に秘密の小部屋をつくりなさい」
という言葉を紹介し
それらが「心の中に家を打ち建て、そこを大切にせよ」
ということを言っているのだという

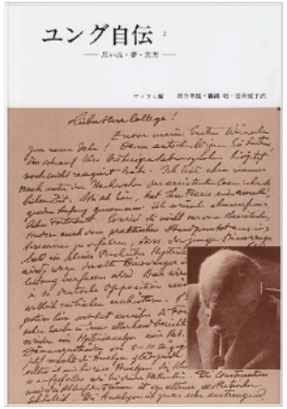
それにもかかわず
現代の建築の多くは〈消費〉するためのものとなり
「ステイホーム」も建築家にとっては
ただの「ビジネスチャンス」と化している（堀部安嗣）

そして「本当の自分自身とつながれるはずの家という場所で、
今日ではインターネットを通じて会社とつながってしま」い
家での自由で創造的な「孤独」の時間さえも
スポイルされるようになっている（若松英輔）

またいまでは「家に限らず、街や道路などの公共空間にも
孤独の置き場がなくなっていて」
かつてあった「『ドラえもん』のなかに出てくる
土管が置かれた空き地のような場所」も見当たらない
（堀部安嗣）

今の子どもたちはマンガで描かれる広場の土管をみても
それがいったいなにを意味しているのかさえ
わからなくなってしまっているだろう

現代の価値観は
〈消費〉され価格化できる「バリュー」の方向へと進み
「時間が経てば経つほどその価値が定まってくる」
そんな「古いからこそ古くならないモノ」
「古さの価値」がわからなくなってきている
つまり〈消費〉されるものは「古くなれない」
ただ〈劣化〉していくだけなのだ
（若松英輔）



▪堀部安嗣「建築の対岸から」～
　「若松英輔にきく、身体の内に建てる家とは？　前編・後編」
　（Ｗｅｂマガジン「考える人」2023年5月10日）
▪カール・グスタフ・ユング（アニエラ・ヤッフェ編／河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳)
　『ユング自伝 2―思い出・夢・思想』（みすず書房 1973/5）

現代のもっとも典型的なシーンは
「孤独」を恐れ自分自身にさえ
つながれなくなっていることを象徴的に表している

かつてユングはボーリンゲンに石で「塔」を建て
隔離された部屋で独りになり
「自分の本来的な生をいき、もっとも深く私自身」に
なろうとしたことを自伝に記している

ユングが必要とした錬金術的な意味での
「個性化」のための場所である
「塔」のような場所・建物を実際に造り
そこで孤独な時間を持つことは今では難しいだろうが

なんらかのしかたで
じぶんのなかに「塔」をつくり
そこで創造的で自由な「孤独」な時間を過ごす
そんな経験から遠ざかり続けていると
わたしたちの魂は
〈消費〉によって〈劣化〉していくばかりだろう

▪堀部安嗣「建築の対岸から」〜
「若松英輔にきく、身体の内に建てる家とは？　前編・後編」
（Ｗｅｂマガジン「考える人」2023年5月10日）
▪カール・グスタフ・ユング（アニエラ・ヤッフェ編／河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳)
『ユング自伝 2―思い出・夢・思想』（みすず書房 1973/5）

（「若松英輔にきく、身体の内に建てる家とは？　前編」〜「家とは魂の神殿である」より）

堀部／私は柱を建てたり、屋根を架けたり、いわば人間の身体の外部にあるものをつくってきたんですけれど、若松さんの本を読み、その言葉に触れると、自分の身体の内側に部屋が用意されるような、建築がつくられていくような思いがしたのです。良い言葉に出会い、自分の身体内側にある部屋が開かれていくとでもいうか……。

若松／ありがとうございます。そのお話で思い出すのが、私たちの魂はもう一つの神殿である、という言葉です。

堀部／どういう意味ですか？

若松／私たちは、心の内側に神と向き合う場所を、つまり祈りの家をもたなくてはならない、ということです。私はカトリックなのですが、これは、カトリック思想に、そしてユングに至るまでのドイツ神秘主義に多大なる影響を与えた、中世ドイツの司祭で神学者の、マイスター・エックハルトの言葉です。彼はまた、人は心の中に神だけが住む場所を持たねばならない。しかし人々はそこを神との取引や商いの場所にしてしまっている、とも言っている。

堀部／なるほど、とてもよくわかります。

若松／もうひとつ、作家の須賀敦子さんが若いころに書いた「シエナの聖女」というエッセイには、聖女カタリナの「霊魂の中に秘密の小部屋をつくりなさい。（中略）そこに入って、おはじめなさい。自己の探求を、ひいては、神の探求を」という言葉があります。二人とも心の内なる場所――そこはいわゆる「真善美」を認識できる場所でもあると思うのですが――の存在を指摘し、私たちがそこをどのように守っていくか、あるいはどのように用いるかを問うているのでしょう。

堀部／二人とも心の中に家を打ち建て、そこを大切にせよ、と言っているのですね。

若松／ええ、堀部さんの作品集を眺めつつ、物理的な建築物も、この魂の神殿のように、ヒトが〈人〉になっていくための場所であり、また本当の自分自身と出会える場所だったのではないか……などといったことを考えていました。

堀部／私はときに建築をつくることの意味が見出せなくなることがあるのですが、そんなときにはある一つの情景を思いだすようにしています。
　二人で雪山を歩いている。寒くて、空腹で、睡魔にも襲われ、同伴者とは会話もなく、心が閉ざされてゆく。そんな中で小さな小屋に出会う。窓から漏れる暖かい光や暖炉からの煙を見て、安堵感や安心感がもたらされる。そして小屋の中に入ると、暖をとったり、食事をしたり、眠ったり、同伴者と会話をしたり、外の雪山ではできなかった人間らしい営みができるようになる。ほんの小さな小屋だけれど、これこそが私が建築に求めるもの、建築の力なんだ、と感じるのです。この小屋においては、人の心の中の情景と身体の外の環境が無理なくつながっており、人の営みは、国籍や人種や思想の違いを問わないもので、ここには建築がもたらす理想的な状況があるように思うのです。

若松　なるほど、それは、私たちの中で本当の意味での〈用〉がはじまるときの姿だと思うんです。〈用いる〉とは、その対象を育てていくということで、たとえば本は書店に並んでいるときは、まっさらな存在だけれど、読者に読まれることによってはじめていのちを帯びる。そんなふうに、家や建築も用いられることによって生き生きとした本来の姿になってくるのではないでしょうか。」

「堀部／〈住む〉という言葉はもともと〈澄む〉という言葉からきているそうなんですね。つまり家なり建築なりに〈住む〉と、生活が安定して、心が澄み渡っていくということが語源にあるのでしょう。先ほどの雪山の小屋の話もそうなんですが、私は建築というのは、もともと他の動物に比べ身体的に弱い人間をまもるために生まれてきたものだと考えているんです。ですから、建築を建てるときには、若松さんもよく書かれているように、その〈人間の弱さ〉を認めるところから始めなくてはならないと思うのです。

若松／おっしゃるとおりですね。私たちが家にいるときって基本弱い状態にあるときですよね。たとえば寝ているとき。

堀部／いちばん無防備ですよね。

若松／家は、無防備になれる場所だっていうことですよね。別な言い方をすれば、人は一度無防備にならなくては、もう一度立ち上がることはできないともいえる。弱さを全身で受け取れるということは、私たちが日々新生していくことにつながっているわけです。しかし現代では、こういった〈弱さ〉が持つ創造性が見失われていますね。

堀部／そうなんです。そこを見つめることをせず、強きもののための、強い建築ばかりをつくるようになってしまった。その反転した建築行為が、建築や住まいを〈消費〉することにもつながっているのでしょう。」

（「若松英輔にきく、身体の内に建てる家とは？　前編」〜「会社に侵食される家」より）

「若松／さきほど住むの語源のお話がありましたが、〈住〉という漢字はまた、人偏に主（あるじ）と書き、主は〈つかさどる〉とも読みますよね。つまり〈住む〉とは、自らをつかさどるということで、だから家とは、自らをつかさどる場所で、自らに由（よ）る、〈自由〉な場所であるといえるでしょう。そうして本当の自分自身とつながれるはずの家という場所で、今日ではインターネットを通じて会社とつながってしまっている。

若松／会社が家に入ってくることの最大の弊害は孤独の時間が侵害されることではないでしょうか。孤独であるということの創造性、あるいは孤独であることの生の深まりは、家が担保してくれていたと思うんです。本を読んだり書いたり、設計もそうなのではないでしょうか。一人であるからできることがたくさんあって、そういう時間が奪われていくと自由や創造、安らぎが私たちの生活から消えていってしまう。

堀部　いまは、家に限らず、街や道路などの公共空間にも孤独の置き場がなくなっていますよね。若松さんと私はほぼ同い年ですが、子供の頃は『ドラえもん』のなかに出てくる土管が置かれた空き地のような場所がその辺にもっとたくさんありませんでしたか？

若松　ええ、ええ。

堀部　ああいった場所が、気づいたらいつのまにか駐車場とか有料のテニスコートとか、お金を生み出す場所に変貌していっている。おもしろいことに、お金を生み出す場所には孤独を受け入れるゆとりがないのです。時間制限もありますから（笑）。孤独は世の中の金銭や時間の感覚から最も遠いところに置かれなくてはなりませんね。」

（「若松英輔にきく、身体の内に建てる家とは？　後編」〜「古い本と古い建築」より）

「若松／たとえば「古い」という言葉も、大事にされたものと、単に古びたものが混同され、見分けがつかなくなっているんでしょうね。それこそ建築においても、いまあるものに新しい息を吹き込むのもとても大切なお仕事だと思うのですが、近代日本というのは、とにかく経済効果を優先して、壊す。つまり新築する。でも古くなるということは、悪いことばかりでなくて、本当にそのものらしくなっていくということでもある。私たちが、いわゆる消費しているものは、〈古く〉なる前に壊れてしまったわけですね。

堀部／〈消費〉され、風化ではなく、〈劣化〉するんですよね。

若松　逆にいうと消費されるものは、古くなれないものともいえるかもしれません。古くなるということは、育っていくということで、つまり時間が経てば経つほどその価値が定まってくるともいえる。その価値というのも、バリュー（value）、つまり価格化できるものでなく、英語でいえば、あの人は信頼できるというときに使うトラストワージー（trustworthy）、またはワース（worth）という言葉の方で、こちらは消費されない、量化できない価値です。

堀部／しかし私たちは全てをバリュー化してゆく方向に進んでいますね。たとえば〈ヴィンテージ（vintage）〉という語は、本来、古さの価値を示すとてもすてきな言葉だと思うのですが、これすらバリュー化されてしまっている。

若松　残念ながらそうですね。でも最近、あらためて古い本っていいなと思い直していて、たとえば武者小路実篤の戦前に出版された本なんかを、わざわざ古本屋で見つけては買って読んでいるんです。全集を持っているにもかかわらず。ほんの数百円なのですが、その金銭的価値とは無関係の、格別な味わいがあります。書き手だけでなくて、その本に携わった人たちの気持ちがあらためて伝わってくるような、古いからこそ古くならないモノが伝わってくるような感じがあるんです。」

（『ユング自伝 2―思い出・夢・思想』〜「VIII　塔」より）

「学問的研究をつづけているうちに、私はしだいに自分の空想とか無意識の内容を、確実な基礎の上に立てることができるようになった。しかし、言葉や論文では本当に十分ではないと思われ、なにかもっと他のものを必要とした。私は自分の内奥の想いとか、私のえた知識を、石に何らかの表現をしなければならない、いいかれば、石の信仰告白をしなければならなくなっていた。このような事情が「塔」の、つまりボーリンゲンに私自身のために建てた家屋のはじまりである。」

「この隔離された部屋のなかで、私は独りになれる、部屋の鍵は常時手放さなかったので、だれも私の許可なしに、その部屋に入ることはできない。数年の間に、私は周りの壁に絵を描き、そうすることによって、私を時間から隔絶し、現在から無時間のなかに運び去ってくれたすべてのものを表現した。このようにして第二の塔は、私の霊的集中の場になったのである。」

「ボーリンゲンでは、私は自分の本来的な生をいき、もっとも深く私自身であった。ここでは、いわば私は、「母の太古の息子」であった。これは錬金術の巧みな表現である。というのは、私が子どものときに経験した「故老」、「太古の人」は、これまでも常に存在しこれからも存在しつづけるであろうNo.2の人格だからである。それは時間の外に存在し、母性的無意識の子なのである。私の空想では、それはフィレモンの形をとって、ボーリンゲンに再びその生を得たのである。」

「ボーリンゲンでは、私は静寂にとりかこまれて『自然とのおだやかな調和』のなかで生活した。幾世紀かの過去をさかのぼった考えが浮かんできては、それがまた遠い将来を先き取りしていた。ここでは創造の苦しみは影をひそめて、創造と喜びが一体となっていた。」

◎堀部安嗣
建築家、京都芸術大学大学院教授、放送大学教授。1967年、神奈川県横浜市生まれ。筑波大学芸術専門学群環境デザインコース卒業。益子アトリエにて益子義弘に師事した後、1994年、堀部安嗣建築設計事務所を設立。2002年、〈牛久のギャラリー〉で吉岡賞を受賞。2016年、〈竹林寺納骨堂〉で日本建築学会賞（作品）を受賞。2021年、「立ち去りがたい建築」として2020毎日デザイン賞受賞。主な著書に、『堀部安嗣の建築 form and imagination』（TOTO出版）、『堀部安嗣作品集 1994-2014 全建築と設計図集』（平凡社）、『建築を気持ちで考える』（TOTO出版）、『住まいの基本を考える』、共著に『書庫を建てる　1万冊の本を収める狭小住宅プロジェクト』（ともに新潮社）など。

◎若松英輔
批評家、随筆家。1968年、新潟県生れ。慶應義塾大学文学部仏文科卒業。2007年、「越知保夫とその時代 求道の文学」にて第14回三田文学新人賞評論部門当選。2016年、『叡知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦』（慶應義塾大学出版会）にて第2回西脇順三郎学術賞受賞。2018年、『詩集 見えない涙』（亜紀書房）にて第33回詩歌文学館賞詩部門受賞。同年、『小林秀雄 美しい花』（文藝春秋）にて第16回角川財団学芸賞、2019年、第16回蓮如賞受賞。2021年、『いのちの政治学』（集英社インターナショナル、対談　若松英輔　中島岳志）が弩堂ブックオブザイヤー2021に選出。その他の著書に、『霧の彼方　須賀敦子』（集英社）、『悲しみの秘義』（文春文庫）、『イエス伝』（中公文庫）、『言葉を植えた人』（亜紀書房）、最新刊『藍色の福音』（講談社）など。

☆mediopos-3103　　2023.5.17

「ネガティヴ・ケイパビリティ」は
詩人のジョン・キーツの示唆した言葉で
「事実や理由に決して拙速に手を伸ばさず、
不確実さ、謎、疑いの中にいることができるとき」に
見出せる能力のこと

現代はその逆に
なんにでも即断即決し
答えを急いで出すことが求められ
わかりやすい答えを与えてくれるひとが
注目されやすくなっているけれど

だからこそ「ネガティヴ・ケイパビリティ」が
なにより求められるようになっているのだろう

「パーンと即座に短く断言する一問一答は、
クールで格好よく見え」
たとえそれがほんとうは
不確実でわからないものであったとしても
それに飛びついて
「みんなが同じ方へとずんずん歩いていく」
ことにもなってしまう

とくにネット検索やＡＩによって
まるでそこに「答え」があるかのように錯覚され
メディア等で与えられる情報も
問いなおすことなく受容されがちだが

「ネガティヴ・ケイパビリティ」は
「わからなさ」を抱えながら
「答え」の見出せないまま
「問い」つづけることが求められる

とはいえ
「わからなさ」を抱えて生きることは
与えられた「答え」を生きることにくらべ
多くのひとにとってはむずかしい

むずかしいけれど
一問一答即断のような生き方は
ひとをどんどん袋小路へと追いやってしまうから
「答え」を強要されない生き方のほうが
じつのところ生きやすいはずなのではないだろうか

▪谷川嘉浩・朱喜哲・杉谷和哉
『ネガティヴ・ケイパビリティで生きる―答えを急がず立ち止まる力』
（さくら舎　2023/2）

しかしこの対話のなかで
とくに考えさせられたのは
第３章の「「アイヒマンにならないように自分の頭で考えよう」
という言葉に乗れない理由」である

ここで示唆されているのは
インテンションエコノミー
インテンション民主主義は
「顧客はちゃんと考えて選んでください」
「自分で意図を形成しよう」
「自分で調べて考えて選択」しよう
ということがもっている「答え」の出し方の問題で
それは「現実的ではない」（杉谷和哉）という

じぶんでちゃんと考える必要があるというとき
それはすぐに答えをだす「一問一答」ではなく
「ネガティヴ・ケイパビリティ」的ではあるのだが
そこでもまた明確な「意図」が求められることに対する
大きな負荷がかかるというのはたしかである

ほんとうは可能なすべてのひとが
じぶんなりに問いを持ち
それについて調べ
それにもとづいて考えることができるのが理想だが
たしかにそれは「現実的ではない」かもしれない

けれどそれとは対極にあるような
権威や教育や常識によって
自動化された「一問一答」を求める方向は
まさに私たちのまわりにある「現実」にほかならない

ではどうすればいいのか
その問いについても
「答えを急がず立ち止まる」
ということがいまは必要なのだろう

▪谷川嘉浩・朱喜哲・杉谷和哉
『ネガティヴ・ケイパビリティで生きる―答えを急がず立ち止まる力』
（さくら舎　2023/2）

（「はじめに」より）

「ジョン・キーツによると、ネガティヴ・ケイパビリティとは、「事実や理由に決して拙速に手を伸ばさず、不確実さ、謎、疑いの中にいることができるとき」に見出せる能力です。」

「リスクや不確実性に満ちた社会を渡り歩くために、大半の人は余計な時間やコストをかけることを避け、身軽で即断即決のスッキリした生き方、悩みや疑いなどないスピード感ある生き方を追い求めています。そういう流れに抗して、私たちはこの本で「ネガティヴ・ケイパビリティ」の価値を訴えようとしています。
（･･･）
　本書の試みは、濁流の中に「よどみ」を作るような仕事だと言えるかもしれません。
（･･･）
　激しすぎる流れの中で、魚やその他の水生生物は暮らしを営むことができません。魚などが暮らしやすい環境には、「よどみ」があります。
（･･･）
　同じことが、人間の生態系にも言えるはずです。何事も変化し続ける社会において「よどみ」は、時代遅れで、回りくどく、無駄なものに見えますが、そういうものがなければ、私たちは自分の生活を紡ぐことに難しさを感じるものです。逆に言えば、この社会に「よどみ」が増えれば、前よりも少し過ごしやすくなります。」

「ネガティヴ・ケイパビリティは、みんなが同じ方へとずんずん歩いていく中で、それとは別の道のことを考えることです。話が付いたはずのことから、わざわざ疑問や問いを読み取り続けようとすることです。自分が得ていたはずの「正解」を喜んで手放すことです。立ち止まるべきタイミングで動いたり、動くべきタイミングで立ち止まったりすることです。すらすら話すことが期待されるときに、「でも･････」と口ごもることです。世間的には結論扱いされている議論の先を考えることです。つまりは、ああでもなければこうでもないと探索的に思考することです。」

（「第１章　「一問一答」的世界観から逃れる方法」より）

「ーーーーもう事実も何もない、議論もしようがないというのが、ある意味今の世の中ということなんですか？　「普通」という言葉も言わない方がいい。とか。
朱／さすがにそれは極端ですね。「普通」という言葉も、日常的な意味ではもちろん使っていいと思うんです。ただ、それについて確固たる一線を引けるような基準をジャーナリストや学者は引ける見通しはないということです。「善い陰謀論」よ「悪い陰謀論」は明確には分けづらい。」

「谷川／「単純な線引きや基準で、陰謀論を一掃しよう」ということそのものが、実は怪しいということは言っておくに値するかもしれませんね。」

「谷川／陰謀論も陰謀論を批判する側も、実はどちらも手短な議論ですべての片を付けようとしていて、「マスターアーギュメント」（「これでも何でも説明できます」と謳う理論や規準のこと）になっているということなんです。陰謀論やデマ、オカルトを信じる人は、それだけで森羅万象を説明しようとしているけれど、陰謀論を批判しようとする人もまた、ごく単純な基準で、あらゆる陰謀論を退けようとしている。これって実はどちらも同じように、面倒な手順をすっとばして、単純に処理していますよね。」

「杉谷／谷川さんは「愚かさの批判」について話してましたよね。その連鎖からどう降りるのか。
谷川／ですめ。「愚かさの批判」というのは、誰かを批判するとき、その人が「愚かだ」「浅ましい」「馬鹿だ」というところに帰着させながら語ることを指す言葉です。」

「杉谷／スパーンと即座に短く断言する一問一答は、クールで格好よく見えるわけですよね。（･･･）
　一問一答の世界観、その中で魅力を持つズバッと断言する語り方を超えていくものを考えるとき、ネガティヴィ・ケイパビリティが大切になってくる。つまり不確実なもの、不確定なもの、わからないものがない世界を、やっぱり人は望みがちだけれども、一問一答では救いきれない世界があることをどう認識してもらうか。そして、その認識をどう共有していくか。最近そんなことを考えています。」

（「第３章　「アイヒマンにならないように自分の頭で考えよう」という言葉に乗れない理由」より）

「谷川／「アテンションエコノミーはやばいから、インテンションエコノミーで行こう！」という単純な話にもできないですよね。意図を形成する（＝判断や選択をする）コストがかかるので。
朱／それは本当にその通りで、言うほど簡単じゃないんでよね。インテンションエコノミーって、「顧客はちゃんと考えて選んでください」って前提がある。これって、めっちゃ認知的なコストを顧客に強いる行為なんですよ。「直感的に選んでください」じゃなくて、「考えた上で選んでください」というわけだから、これはこれですごくハードルが高いものにまってしまったりもする。」

「谷川／市民に熟議し反省し続けることを要求するか（＝インテンション）、印象的な言葉で盛り上げて人気をとるポピュリズムか（＝アテンション）という論点としても聞けますね。
杉谷／うん。世間的に言う「リベラル」は、インテンション民主主義ですよね。
谷川／熟議民主主義を尊重するというのは、「自分で意図を形成しよう」（＝調べて考えて選ぼう）ということですからね。」

「杉谷／アドルフ・アイヒマンという、ナチスドイツでかつて大量虐殺に加担した幹部がいました。今ちょうど、アイヒマンに関する本を読んでいて、いろいろと思うところがありました。
谷川／事務方のね。ユダヤ人を強制収容所に効率的に輸送する、いわゆるロジスティクスを担当していたんですよね。そのためのシステム作り、部門ごとの縦割り体制を突破して、目的を効率的に遂行するための核心的な枠組みを作った人。
杉谷／彼は戦後南米に逃亡していたけど捕まって、一九六〇年にイスラエルで裁判を受けた。裁判の場で、アイヒマンに対して「なぜあなたはあんな虐殺をしたのか」と聞くと、彼は「いや、あれは命令されただけだ」「自分の仕事のことしか知らない」と言い逃れをして、当時の人たちはすごく大きな衝撃を受けるわけですね。ナチスの大幹部の生き残りなのだから、残念な反ユダヤ主義者、冷徹なレイシストを想像していたけれども、出てきたアイヒマンというのはいかにもみすぼらしい、どこにでもいるような小役人に見えた。裁判を傍聴していたハンナ・アーレントは、「悪の陳腐さ」と呼ばれる議論を展開していく。
　ただ、捕捉しておくと、実際にはアイヒマンは、根っからの反ユダヤ主義、レイスストで、かなり常軌を逸した人物だったということが最近の研究では明らかになっています。だから、イスラエルの法廷でのアイヒマンは、完全な芝居ですね。
（･･･）
杉谷／この話はいったん置いておくとして、もともとの論法に話を戻すと、ここにはインテンション派が好きな語り方がある。アイヒマンの答弁を引き合いに出しながら、「命令に従うばかりではだめだ」「言われたことに従順で、何も考えていないなんて･････」と警鐘を鳴らす。政治学者もやりがちで、「自分の頭で考えている、ちゃんとした市民になりましょう」と行ってしまう。
谷川／（･･･）ネガティヴィ・ケイパビリティという観点を持っていると、「アイヒマンにならないように考え続けよう」というオチの付け方が別の装いをした思考停止に見えてくるんですよね。
杉谷／朱さんの言葉を借りれば。インテンショナルデモクラシーとでも呼べるのでしょうが、「自分で調べて考えて選択するちゃんとした市民になろう」という構想を全面化するのは、どうも現実的ではないのではと思っています。そこで、いわゆる、ちゃんとした民主主義が提示する理想像に見合っていない日本社会を「前近代的だ」とせせら笑う議論を戦前の民主主義論以来ずっと繰り返してきた。」

（「第８章　イベントとしての日常から、エピソードとしての日常へ」より）

「朱／今回の話で一番大事にしたかったところが、借り物の言葉じゃなくって、自分の言葉を持つということでし。谷川さんの“You have to own your narrative.”（自分のナラティヴを持ちなさい）という話を聞いて、オウンってどういうことなのかと思っていたんだけど、後から振り返ると、私たちはずっとそのことを考えていたなという感じがします。」

「杉谷／イベント化した社会という話がありましたが、その背後にも能力主義があります。「自分というのは能力があって、魅力的な存在なんだ」とアピールしないといけない社会だということですね。しかも、一部の有名人だけでなく、万人がそうならないといけないという話になっている。
谷川／インフルエンサーって言葉が象徴的かもしれない。セレブリティと違って、万人が自分の魅力をアピールしている社会を前提とした言葉ですから。」

「杉谷／「反原則」「アンチ原則」がポイントですよね。つまり、何か型が決まっていて、「こういうふうにすればいい」という話はちょっと違うだろうという論点をめぐって、私たちは政治とか倫理とか言葉の話をしていた気がするんですよね。イベントとエピソードの話もそうだし、原則的なものを当てはめていくような思考に、私たちは慣れているけれども。型にはまることだけではないような、何かよくわからないもの、割り切れないものを掬い取っていく技術を高めていくことが、たぶん私たちに求められていることだし、ネガティヴィ・ケイパビリティがこの社会で必要とされている理由なのかもしれない。
谷川／そうか。エピソードはどこからどうなっていくかわからないけれど、イベントって型にはまってますもんね。
朱／まさにそうですね。確かにイベントですもんね。
杉谷／広告も「型にはまるな」みたいなメッセージを発するくらい、ありふれたものですけど、実際には成功者って相当型にはまった語りをしていますよね。挫折したけれど奮起して仲間の助けがあって成功した、というような。（･･･）私たちは「型にはまるな」という教訓を知っているのに、よく似た語りをして、原則通りの関係を作って、型通りのイベントを楽しんでしまう。そういう社会からのメッセージをはねのけて、自分の身の回りに注意深くなれるかどうか、プライベートな関係をしっかり作っていけるかということが試されているんですね。」

○目次

第１章　「一問一答」的世界観から逃れる方法
ーー陰謀論、対人論証、ファシリテーション
第２章　自分に都合のいいナラティヴを離れる方法
ーーフィクション、言葉遣い、疲労の意味
第３章　「アイヒマンにならないように自分の頭で考えよう」という言葉に乗れない理由
ーーコンサンプション（消費）、アテンション（注目）、インテンション（意図）
第４章　信頼のためには関係が壊れるリスクを負わねばならない
ーーマーケティング、トラスト、脱常識
第５章　「言葉に乗っ取られない」ために必要なこと
ーーＳＮＳ、プライバシー、言葉の複数性
第６章　自分のナラティヴ／言葉を持つこと
ーー倫理、相対化、ナッジ
第７章　公と私を再接続するコーポラティヴ・ヴェンチャー
ーー関心、実験、中間集団
第８章　イベントとしての日常から、エピソードとしての日常へ
ーー観察、対話、ナラティヴ

☆mediopos-3104　　2023.5.18

「投壜通信」は「承認」を求めない

「承認」とはたとえばＳＮＳの「いいね」
あるいは「推し」で表されるような
「あてこんだ言葉」であり「約」である

現代はある意味で
「承認欲求」という病に深く侵されている

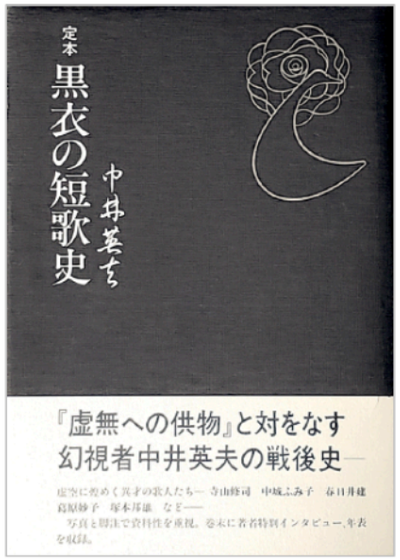
ＳＮＳで投稿される言葉は
「いいね」を「あてこんだ」ものであり
それに象徴されるように
さまざまな「評価」を求める言葉は
賞や試験などに合格するための
「推し」の目にとまるためのものとして発せられる

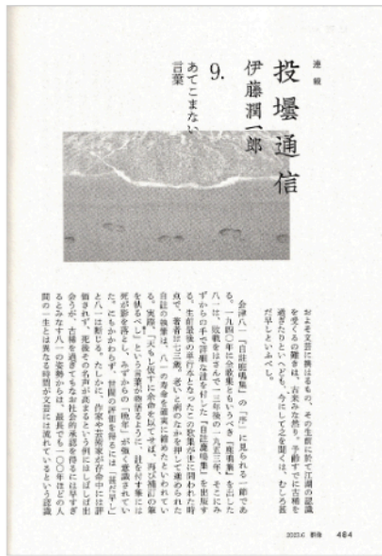
そしてひとはそのような「承認」
それによる「評価」が得られないことを
おそらくはなによりも恐れ不安に思ったりする

その意味で「投壜通信」は
「共有」されることを越えたコミュニケーション
あるいはコミュニケーションとさえ呼べないような
言葉を発した主体による所有から自由になった言葉を
「短期的な「あてこみ」の地平を越えて
可能なかぎり遠くまで」
だれでもない「あなた」へと届けようとする

もちろんその「あなた」は
想定された受け手ではない
それゆえにそこには「承認」は存在し得ず
届けられた「あなた」のなかで
意味の変容が引き起こされることになる

そしてそれは「投壜通信」が
「あてこまない言葉」であることによって可能となる





▪伊藤潤一郎「投壜通信 9.　あてこまない言葉」（群像 2023年 06 月号）
▪吉田隼人『霊体の蝶』（草思社 2023/3）
▪中井英夫『定本 黒衣の短歌史』（ワイズ出版 1992/12）

今回の記事のなかで
中井英夫『黒衣の短歌史』に収められ
吉井勇と釈迢空について触れた
「光の函」に言及する吉田隼人の歌が引かれているが

吉田隼人はそこで
「意味の追求から解放され、空虚ななかにただひたすら
光を湛えただけの函のような歌を称揚」している

そんな「光を湛えただけの函のような歌」であるためには
それが「あてこまない言葉」でなければならない
その意味でつねに「承認」をもとめるための言葉は
そんな歌から遠く隔てられたものでしかなくなってしまう

こうした記事を書くときも
常に「あてこまない言葉」で
だれでもない「あなた」へと宛てた
そんな「投壜通信」でありたいと切に願う

▪伊藤潤一郎「投壜通信 9．あてこまない言葉」
（群像 2023年 06 月号）
▪吉田隼人『霊体の蝶』（草思社 2023/3）
▪中井英夫『定本 黒衣の短歌史』（ワイズ出版 1992/12）

※吉田隼人『霊体の蝶』はmediopos-3063（2023.4.7）、中井 英夫『定本 黒衣の短歌史』はmediopos2633（2022.1.31）でもとりあげている。

（伊藤潤一郎「投壜通信 9．あてこまない言葉」より）

「もし、いま私たちが生きているこの時代が終わりを迎えつつあり、新たな時代の到来の兆しがあるとすれば、時代のとば口で語られるべきはいかなる言葉だろうか。なんとも大げさなこの問いに対して、まずは吉田隼人の歌を引いておこう。

　　梟の飛びたたむ刻（とき）めざめたり約をやぶりし悔いのさなかに

　中井英夫『黒衣の短歌史』に収められた「光の函」に言及する歌人自身の言葉にしたがえば、ここには意味を追い求めることから解放された内面の空虚こそが示されていると解釈すべきなのだろう。夕暮れ時に目覚めてしまった後悔、日中の「ふつうの」活動に歩調を合わせられなかった後ろめたさ、その後ろめたさの背後には意味を掘り下げるべき内面もなく、むしろ後ろめたさが示すのはみずからの内面が空虚であることのみなのだ、と。だが、フランス文学や西田幾多郎ら近代日本の哲学に関する知がいたるところにちりばめられた歌集のなかの一首として読むならば、やはり梟が飛びたつというところにヘーゲル的モチーフを見てとらないわけにはいかない。
　ミネルヴァの梟に仮託して語られる哲学とは、ひとつの時代を総括し、その意味を精神によって把握する営みだった。そのようにして、新たな時代が幕を開け、梟は海燕となる。ある意味でそれは、歴史を前へ前へと進める「進歩」の風に乗っている鳥ともいえる。しかし、吉田の歌の視線が、あたかもベンヤミンが描く、「歴史の天使」さながらに、過去へと向かっていることに注意したい。

（･･･）

　過去へと顔を向ける歴史の天使を押し流すほど、「進歩」の嵐は容赦ない。ベンヤミンから八〇年以上の時を隔てた現在、「進歩」という名がそれほどの力をもつか定かではないが、どのような名であるかはともかく、多くの人々をひとつの方向へと駆り立てる力はいつの時代にも存在しているはずだ。海燕となった梟に吹き寄せる風が一方向へと向かうものであるならばそれを拒否し、ベンヤミンとともに、その嵐によって破壊された瓦礫へと視線を注がなければならない。打ち捨てられた断片をつなぎ合わせ、ありえたかもしれない未来を救い出す必要があるだろう。ただひとつの意味に収まる過去も未来も存在しない以上、それは思考の責務である。

（･･･）

　「約」はすでに破られてしまった。そこにいかなる悔いがあろうとも、既存の「約」のなかに安住することはもはやできない。そのような閾に立って吉田の歌は詠まれている。だが、あらためて問えば、その「約」とはいったいいかなるものか。いいかえれば、過ぎ去りゆく時代の言葉とはいかなるののだったのか。私はそれを「あてこんだ言葉」と呼びたい。それゆえ、海燕が歌うのは「あてこんだ言葉」だ。」

「「あてこむ」とは、よい結果を期待することにほかならない。ある言葉を投げて期待したような反応が返ってきたとしたら、いうまでもなく、言葉はよい結果を生み出したことになるが、終わりゆく時代において、言葉に対するポジティヴな反応はきわめてわかりやすい。なぜなら、数量化されているからだ。各種ＳＮＳの「いいね」は、みずからが発した言葉に行為的な反応が返ってきたことを数量として明示し、その結果、一部の人々はより多くの「いいね」を求めて、「いいね」を多くもらえそうな言葉を語るようになる。
（･･･）
　現代は、かつてなくみずからの言葉が承認されていると実感しやすい時代なのだろう。しかし、数量化された承認においては、誰からのものであってもひとつのアカウントからの承認は「一いいね」でしかない。ほかでもないこのひとから承認されるのも、匿名の誰かから承認されるのも、数量という観点では重さのちがいはなく。単位としての「一」に還元されるやいなや、「いいね」という承認は交換かのうなものになる。」

「「推し」に強く光を当てた『ユリイカ』二〇二〇年九月号の特集「女オタクの現在ーーーー推しとわたし」のなかで、横田祐美子もまたひとり時代の「約」を破ろうとしていた。「嶽本野ばらとアウグスティヌスーーーー乙女と内に秘められた過剰の美学」と題された横田の論考は、嶽本とアウグスティヌスという時代もジャンルも遠く離れた二人の書き手の告白体の語りのうちに、「好き」を共有するコミュニティとは異なる人間の結びつき方を探っている。

（･･･）

と思っているがゆえに、海燕は現世的なあらゆる承認を拒むのだ。

（･･･）

　好きな対象を共有することもなければ、「好き」を介した共感のコミュニケーションもしない。（･･･）「あるある」「わかりみが深い」といった当世風な共感の言葉すべてを拒絶する。そのような態度で、横田は内面の奥深くへと降り立ってゆく。アウグスティヌスが「私のもっとも内なるところよりさらに内」と述べた神との出会いの場は、「好き」という感情の無根拠さが露わとなる内面の極北なのだ。そこには他人の共感が入り込む余地はいささかもなく、「わかる」という安易な言葉はすべてはねのけられる。「あてこんだ言葉」がけっして届かない領域こそ、私の内奥にほかならない。しかし、誰とも共有しえない内面の奥深くをひたすら突き詰めるとき、逆説的にも「共有するもののなさを共有する連帯」は生まれると横田は説く。
　おそらく、来るべき時代の「あてこまない言葉」が生み出すのも、たんなる「共有」を超えたコミュニケーションになるだろう（それをいまだ「コミュニケーション」と呼べるならばだが）。なぜなら、「あてこまない言葉」は意味の共有を求めないからだ。意味が歪みなく伝わるという日常的な期待は捨てられている。その代わりに、「あてこまない言葉」が期待しているのは、意味の変容という、言葉の意味が話し手からも受け手からも解放される瞬間である。発話者がひとつの意味を占有することなく、受け手における解釈や意味の揺らぎを積極的に待ち望み、かといってひとつの解釈だけが確固とした不動の地位に就くのも否定する。そのような果てしなき意味の変容を望むのが、海燕の歌なのだ。「あてこまない言葉」において、意味は誰のものでもなく、主体による所有から自由になっている。同じ意味を共同所有する人々はもはやいない。
　それゆる海燕は、「わかる」という理解の言葉に何よりも疑いの目を向ける。みずからの歌がそう簡単には理解されないと思っているがゆえに、海燕は現世的なあらゆる承認を拒むのだ。

（･･･）

　鏡を割って承認の閉域の外へと飛び立ち、海燕は大海原に壜を投げ込む。しかし、なぜそのようなことをするのか。はるか遠くの存在すら定かでない「あなた」を信じて投壜通信がおこなわれるのだとしたら、やはりそこでも何らかの承認が求められているのではないか。いや、ちがう。むしろ、歌うのが楽しいから海燕は歌うのだ。楽しいがゆえに発された言葉こそ、もっとも遠くまで届き、意味の変容を引き起こす。楽しいというある意味ではどこまでも自己中心的でありながら内奥から沸き起こる感情が宿るとき、言葉は短期的な「あてこみ」の地平を越えて可能なかぎり遠くまでたどり着く。もしそこで意味の変容が起これば、その受け手は「あなた」と呼ばれるだろう。「あなた」とは、意味が所有から解放されるきっかけなのであって、けっしてあらかじめ想定された存在ではないのである。」

（吉田隼人『霊体の蝶』〜「あとがき」より）

「中井英夫が『黒衣の短歌史』に採録した「光の函」という吉井勇と釈迢空について触れた文章で、意味の追求から解放され、空虚ななかにただひたすら光を湛えただけの函のような歌を称揚し、また別の箇所でそうした歌の詠み手として浜田到を挙げていたことがこのような集を編む気持ちにさせたようなところがあります。」

（中井 英夫『定本 黒衣の短歌史』〜「光の函」（153-154頁）より）

「いったい文学の上で〝働く〟とは何の謂だろう。石工に似た努力を重ねる工房の姿をそのまま作品の性格とする慣わしはいつからのことか。
　　夜ふかくよべの酒の香なほ残るわれの小床をうつみやまずも
　　夜ふかく釈迢空の歌一種おもひ出づれば誦しもこそすれ
　氏（吉井勇）が釈迢空と共通するのは、その歌の〝何もない美しさ〟であろう。現代短歌にはあまりに意味がありすぎるのだ。文学的にはほとんど無価値の、ただの意味が。
　従って逆に勇・迢空ともに現代短歌の必死の努力を根底から崩壊せしめるていの、人によっては麻薬のごとくにも思われるであろう〝何もなさ〟が、しばしば主要なモチーフになっているは不思議ではない。
　一見、本当に何もないごとく見えるそこには、ただ光だけが充ちている、そのような歌こそ、実は短歌の枠を超え文壇の枠を超えて、真に人々の愛唱してやまぬ歌となり得る筈である。現代短歌のすべてが〝光の函〟として民衆の胸中に蔵される日は、けだし遠い先のことであろうが･･････」

☆mediopos-3105　　2023.5.19

ウイルス
ワクチン
戦争
管理社会
格差社会
同調圧力
メディアの国家広報化
ＡＩによる人間の思考停止
生態環境の破壊
人口増大
民族対立
イデオロギー対立
政治の停滞
宗教の無力
倫理なき科学技術の暴走

そんなこんなが満載の現代だが
ただ危機感ばかりふくらませても
生きづらくなるばかり

そんななかで
ヤマザキマリの『三千年の幸福論』は
なかなかにたくましく
そしてたのもしい

大英博物館の「マンガ展」担当キュレーターで美術史家の
ニコル・クーリッジ・ルマニエールとの対話は
こんな時代を生き抜くためのヒントが
歴史をひもときながら示唆されている

決してただポジティヴに明るく語られるというのではなく
「過去に人類がどのような試行錯誤を繰り返してきたか」を
「冷静に振り返」ることで見えてくるクールな視点である

親切かつユーモアあふれる仕方で
「人類を救う（かもしれない）」
こんな「七つのヒント」のエッセイもある

▪ヤマザキマリ
『人類三千年の幸福論／ニコル・クーリッジ・ルマニエールとの対話』
（集英社 2023/5）
▪E.モラン／アンヌ・ブリジット・ケルン（菊地昌実訳）
『祖国地球〈新装版〉：人類はどこへ向かうのか』
（叢書・ウニベルシタス 422　法政大学出版局 2022/12　※初版 1993/12）

「風呂ーーーー自分の中の「渇き」がクリエートする力になる」
「鳥瞰ーーーーユーモアは鳥瞰的知性に宿る」
「虫ーーーーわかり合えないものとの共生はとても大事」
「ノマド気質ーーーー自分の居場所は自分で決める」
「水木しげるーーーー生き物としての感覚を生涯持ち続けた心の師匠」
「壁ーーーー人生の不条理をたらふく味わうと、見えてくるもの」
「カラスの利他行動ーーーー文明が存続するか否かは「利他性」にあり」

「Prologue 人類三千年の旅への招待状」でも名前が挙げられていた
mediopos-309（2023.5.7）でとりあげている
哲学者のエドガール・モランには
『祖国地球／人類はどこへ向かうのか』という著書があり
そのなかで「抵抗するための原理」
「絶望の中にもっている」「希望の原理」として
「六つの原理」が示唆されているが
上記の「七つのヒント」と合わせて参考にすれば
危機感のなかでも「幸福」に生き抜く指針となりそうだ

その「六つの原理」とは
生命原理
想定不能の原理
非蓋然性の原理
モグラの原理
危険の自覚による救助の原理
人類学的原理
である

それぞれについては引用を参照されたいが
それらの原理は
希望のなかでもまた絶望のなかでも
可能性を生き抜くための処方箋ともなる

▪ヤマザキマリ
『人類三千年の幸福論／ニコル・クーリッジ・ルマニエールとの対話』
（集英社 2023/5）
▪E.モラン／アンヌ・ブリジット・ケルン（菊地昌実訳）
『祖国地球〈新装版〉：人類はどこへ向かうのか』
（叢書・ウニベルシタス 422　法政大学出版局 2022/12　※初版 1993/12）

（ヤマザキマリ『人類三千年の幸福論』〜ヤマザキマリ「Prologue 人類三千年の旅への招待状」より）

「本書で私と対談を交わしているニコル・クーリッジ・ルマニエールさんは（･･･）、表現という人類が用いる行動に対して特異な好奇心を抱き、日本が生んだ漫画文化に着目し続けてきた人物である。二〇一九年にはロンドンの大英博物館で開催された大規模な日本の漫画の展覧会にキュレーターとして携わった。」

「ホモ・サピエンスという生態が世界のいかなる環境にも適応し、想像力や知恵を駆使しながら繁殖し続ける中でどういった社会を築き、そのためにどのような代償を払ってきたのか。博物館とく施設は人間という種族の特性や性質をあらゆる角度から顧みるための塚のようなものであり、良質の群生であるための示唆の宝庫なのである。そして文明は、他の静物のように本能のみで生きることを許されなかった人類が、様々な苦悩や困難に挫けず生きていくために奮闘してきた証であり、今を生きる我々の知性にとって欠かせない大切な栄養素なのである。
　思想家エドガール・モランは地球を「生命圏の胎盤」とあらわし、パスカルは「人間は考える葦である」という言葉を残した。それを合体させて人間を「地球という胎盤につながった考える葦」と捉えると、普段は嫌気がさすだけの人間や人間社会に対してたちまち肯定的な好奇心が呼び覚まされる。ニコルさんと会話をしていると、いつも無条件でそんな気持ちに満たされるのである。」

（ヤマザキマリ『人類三千年の幸福論』〜「第三章　人類の歴史で普遍的なのは、笑いの精神」より）

「ヤマザキ／人類には負の歴史もたくさんあるけれど、先が見えない辛い時代であっても、それを滑稽なものとして捉える知恵が人類にはあります。喜劇や道化という文化は紀元前のはるか昔からありましたし、古代ローマ時代の壁の落書きなんかにも、洒落の効いた言葉がたくさん書かれている。戦争が終わるや否や日本の新聞には『サザエさん』という、憔悴した日本をユーモアに転換できる漫画が現れた。ユーモアや笑いの精神は、人間が生き延びるために生み出した知恵でもあるので、その必要がなくなってくるということは社会が本当に危機に瀕しているということを意味するのかもしれません。

ヤマザキ／ところでニコルさん、テックス・アヴェリー（一九〇八〜一九八〇年　アメリカ・テキサス州出身のアニメーター、アニメ監督、ハリウッドにおけるカートゥーン黄金時代を築いた）っていうアメリカのアニメーターを知っていますか。「トムとジェリー」のいくつかの作品や「ドルービー」シリーズを作った人なんですけど。

ニコル／あ、アニメに革命を起こしたという･･････。

ヤマザキ／そうです。彼はそれまでのアニメの実写映画の亜流のような善良な表現としての枠を壊し、皮肉な作品を作って社会批判も受けた人です。あらゆる物理的法則を無視して、最初に見た人には、さぞかりびっくりしただろうと思います。アヴェリーはある意味、その当時のアメリカの豊かさや傲慢さを揶揄したり皮肉っているアニメーターでもある。（･･･）
　私はアヴェリーのアニメが子どもの時から大好きでしや。そのせいで自分の性格やものの見方も影響を受けたかもしれないんですけど、こういう人が活躍できていた時代というのはいいなあと感じるんです。ああいうアニメが一世を風靡したのは、一九四〇年代半ばから五〇年代くらいですかね。
（･･･）

ニコル／その時代でいえば、「トムとジェリー」とは作り方が全く違うけれど、ディズニーの最初の頃は、本当に面白かった。

ヤマザキ／私も最初の頃のディズニーは好きだったんですが、途中で見るのをやめてしまった。情緒をコントロールされているような気がして、好き勝手に見られない。一方的な道徳観の共生を強いられているような。

ニコル／ああ、その感じわかります。人気が出るにしたがって、だんだんストーリーが説教臭くなるとか。

ヤマザキ／なんて言うんでしょうね、あの感覚は。その点では、シュールなテックス・アヴェリーや「トムとジェリー」のほうが圧倒的に面白かった。作者にはそもそも意図なんかないし、社会を揶揄するお笑い作品であってもどこか切なくなったり、感動したり、受け取り方はとにかく自由だった。視聴者に媚びない唯我独尊的なものがあった。そういう要素がディズニーにはないんですよ。」

（ヤマザキマリ『人類三千年の幸福論』〜「第四章　想像力をすり減らす同調圧力」より）

「ニコル／日本の同調圧力とはちょっと違うかもしれませんが、似たような現象がヨーロッパにもあるんですよ。（･･･）
　そうやって自らの行動を決める基準が自分の外にあると、どんどん自分自身を見失っていくというか、アイデンティティを侵害されていきます。そのためヨーロッパでも、このような価値観の共通が、ソーシャルメディアの弊害として問題視され始めているんです。

ヤマザキ／こうしたソーシャルメディアも今やエンタメなわけですけど、エンタメの持つ力というのは絶大ですからね。宗教家や政治家よりも影響力があるわけすからね。インフルエンサーと呼ばれる人物が発信する「こら今のトレンド」というメッセージにも、簡単に抗えない圧力がありますよね。
　日本は様々な理由によって価値観の共有が必須の社会性みたいなところがあるわけですけど、個人主義をベースにしているはずのヨーロッパでもそういう傾向が始まっているとなると、考えさせられます。言論統制のある独裁国家みたいなところでの話ならまだしも、そもそもソーシャルメディアに国境はないし、二十四時間更新されていますからね。

ニコル／みんな見ているので影響力はすごいです。そして無意識のうちの取り込まれ、みんな一緒に動く、価値観が同じになる。これって結構怖いことだと思いますね。」

（ヤマザキマリ『人類三千年の幸福論』〜「第五章　失敗や破綻はすべて過去にある」より）

「ヤマザキ／これを言うとまたヤマザキの貧乏自慢が始まったと言われそうですが、私は父親が早くに亡くなり、音楽家の母は留守ばかりしていましたから、早いうちから孤独に慣らされてきましたし、イタリアに留学してからは本当に一生分の辛酸を舐めました。あらゆる裏切りと失望の連続でしたが、現実世界との対峙による容赦ない体験が、漫画の創作や今の自分の思考の原動力になっていると感じています。苦しさは乗り越えさえすればメンタルという土壌への良い肥やしにはなってくれる。逆に不条理を避けていくと人間が脆弱になる。自分を弁解するような言い方になりますが、人間も他の生き物と同様に、生きる過酷さを知ることを避けてはいけないようにできていると思うんですけどね。」

「ヤマザキ／人間は自分を過保護にし過ぎてますね。社会的静物であることに精神性が加わってしまったことが、他の動物より生きることを厄介にしてしまっている。だから、ほんとうに些末な次元で自分が阻害されていやしないかという詮索を必死でするようになったりするんです。」

「ヤマザキ／戦争が起こると私たちがメディアで知らされるのは、その動機のごく一部分だけです。そこにさらに力が加わって、なんとなくどっちがいい、どっちが悪いという判断を操作されるようになる。でも歴史を勉強していれば、どんな戦争もきっとここには公にならない様々なファクターが絡んでいるんだろうな、なんて推察は自然にしてしまいます。今回のロシアとウクライナもしかり、私がダマスカスに暮らしていた頃に勃発したイラク戦争しかり。十字軍の時代から何も変わっていないんだなあと感慨深くなりました。」

「ヤマザキ／パンデミックを経て経済のパワーが衰え、憔悴した社会がどうやって再起していくのか。百年前のスペイン風邪パンデミックの後に発生した第二次大戦のような戦争が再び勃発するのか、はたまたルネサンスのような人間性を成熟させる時代が訪れるのか、メンタル省エネか、またはダイナミックな躍動か、過去に人類がどのような試行錯誤を繰り返してきたかは、冷静に振り返ればすべて過去に書いてある。未来の歴史書に「人類はコロナ禍の後に思考力が劣化し徐々に野蛮化する」なんて記録されなくなかったら、面倒だとか言ってないで、今こそそれをなぞり直すべきなんじゃないでしょうかね。

ニコル／常に歴史の種火は点いている。おっしゃるとおりだと思います。その種火が人類史に大きな物語を作っていくんですね。」

（ヤマザキマリ『人類三千年の幸福論』〜「Essay　人類を救う（かもしれない）ヤマザキマリの七つのヒント」より）

「風呂ーーーー自分の中の「渇き」がクリエートする力になる」
「鳥瞰ーーーーユーモアは鳥瞰的知性に宿る」
「虫ーーーーわかり合えないものとの共生はとても大事」
「ノマド気質ーーーー自分の居場所は自分で決める」
「水木しげるーーーー生き物としての感覚を生涯持ち続けた心の師匠」
「壁ーーーー人生の不条理をたらふく味わうと、見えてくるもの」
「カラスの利他行動ーーーー文明が存続するか否かは「利他性」にあり」

（E.モラン『祖国地球』より）

「いずれにせよ、私たちは抵抗するための原理をふたたび引き受けなければならない。結局、私たちは希望の原理を絶望の中にもっているのだ。

　第一は、生命原理である。生きているものすべてが未来へ向かうやみがたい動きの中で自己再生するのと同様に、人間にかかわるすべてのものが、人間の生を再生させることによって希望を再生させる。希望が生きさせてくれるのではなく、生きることが希望を生む。あるいはこう言うべきか。生きることが、生きさせてくれる希望を生むのだ。

　第二は、想定不能の原理である。これまでの大きな転換、創造はすべて、起きる前には考えも及ばぬものだった。

　第三は、非蓋然性の原理である。これまで歴史上生じた幸運な事件がすべて、アプリオリに（先験的に）、ありそうにないことだった。

　第四は、モグラの原理である。モグラは地表にその影響が現れる以前に、地下道を掘り、地下の状況を変える。

　第五は、危険の自覚による救助の原理である。ヘルダーリンの言葉によれば、「危険が増すところでは、救いも増す。

　第六は、人類学的原理である。ホモ・サピエンスはこれまで自分の精神・頭脳の可能性のごくわずかな部分しか利用してこなかったことを、私たちは知っている。だから、私たちは知的、情緒的、文化的、文明的、社会的、社会的可能性、つまり人類の可能性を汲み尽くすはるか手前にいる。ということは、私たちの現在の文明は人間精神の先史時代にとどまったままであり、現在の文明は地球の鉄器時代に今もとどまったままであり、したがって、またとりわけ、あるいは起こるかもしれない災厄の場合を除いて、私たちは人間の頭脳的・精神的可能性、社会の歴史的可能性、人間の進化の人類学的可能性を残したままだということになる。現在に幻滅しても、ヒト科の新たな段階を考えることは許される。それは同時に、文化と文明の新たな段階ともなるはずだ。

　これら六つの原理は、最悪の事態にも同じようにあてはまる。これらの原理は何も保証してはくれない。生きることは偶然の死に出会うかもしれない。想定不能なことはかならず起こるとはかぎらない。ありそうもないことはかならず幸運な形で訪れるとはかぎらない。モグラは私たちが守ろうとしたものを壊すかもしれない。救助の可能性は危険の高さに釣り合うものではないかもしれない。

　冒険は未知のままである。地球時代は花開くことなく、闇の中に沈むかもしれない。人類の最期の苦しみは死と滅亡しかもたらさないかもしれない。だが、最悪の事態もまだ確かではない。まだすべてが決まったわけではない。確実だとも、ありそうだとも言えないにしても、より良い未来への可能性は残されているのだ。

　この仕事は大変であり、しかも不確かである。私たちは絶望からも、希望からも逃れるわけにはいかない。使命を引き受けることも、辞退することも、ともに不可能なのだ。私たちは「新しい忍耐」を身につけるしかない。私たちは決戦ではなく、緒戦の前夜にいるのだ。」

◎ヤマザキマリ『人類三千年の幸福論』
【目次】
Prologue 人類三千年の旅への招待状 ヤマザキマリ
Dialogue 失敗や破綻はすべて過去に書いてある ヤマザキマリ×ニコル・クーリッジ・ルマニエール
第一章 困難なときほど人類三千年の知性に刮目せよ
第二章 時代の先駆者は、いつの世も孤高にして不遇
第三章 人類の歴史で普遍的なのは、笑いの精神
第四章 想像力をすり減らす同調圧力
第五章 失敗や破綻はすべて過去に書いてある
Manga 美術館のパルミラ
Essay 人類を救う(かもしれない)ヤマザキマリの七つのヒント
Epilogue ヤマザキマリさんは右脳と左脳の間に立つ人 ニコル・クーリッジ・ルマニエール

☆mediopos-3106　　2023.5.20

「人間のふるさと」は
どこにあるのだろう

ここでいう「ふるさと」は
ふつうイメージされるような
わたしたちを抱擁してくれるような
大地性のそれではない

坂口安吾が「堕落論」で説くような
むしろ「堕ちること」で
そこに根を下ろすような
モラルや社会性から離れたそれである

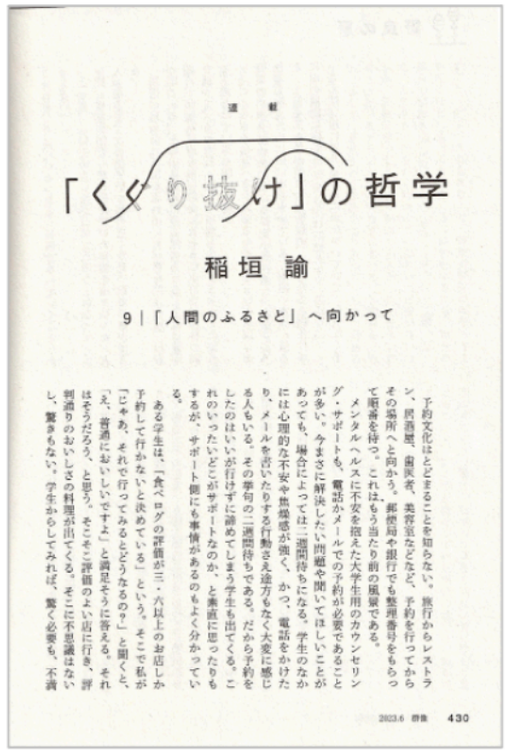
私たちはそうした「ふるさと」へと
帰ることを怖れるがゆえに
モラルや社会性そして規則に「安心」
いってみれば「救い」を求めるようになる

ある意味で必然的ともいえる
現代の「管理社会化」も
そうした「安心」「救い」を
求めることの極北にあるといえる

それは「プレイ」を怖れるがゆえに
「ゲーム」を求めることである

「ゲーム」には「規則」が必須であるが
「プレイ」にそれが必要ではないということではない
「プレイは、規則や社会的な有意義から外れたところで
「何かが起こる」という出来事性からな」り
「究極なまでの自己目的的行動」であり
「規則を翻弄しながら新しい規則を生みだすことさえ
プレイの特性」でもあるが
「その規則がプレイを縛るようになるとゲームに近くなる」

本論考ではそうした「プレイ」に関わるものとして
ヴァレリーの「踊るクラゲ」
バタイユの「至高性が生じる場所」
そして安吾の「ふるさと」が示唆されている


連載

「くぐり抜け」の哲学

稲垣　諭

9｜「人間のふるさと」へ向かって

予約文化はとどまることを知らない。旅行からレストラン、民泊風、歯医者、美容室などなど、予約を行ってからその場所へと向かう。郵便局や銀行でも整理番号をもらって順番を待つ。これはもう当たり前の風景である。

メンタルヘルスに不安を抱えた大学生用のカウンセリング・サポートも、電話かメールでの予約が必要であることが多い。今まさに解決したい問題や聞いてほしいことがあっても、場合によっては二週間待ちになる。学生のなかには心理的な不安や焦燥感が強く、かつ、電話をかけたり、メールを書いたりする行動さえ途方もなく大変に感じる人もいる。その事情の二週間待ちである。だから予約をしたのはいいが行けずに諦めてしまう学生も出てくる。これのいったいどこがサポートなのか、と素直に思ったりもするが、サポート側にも事情があるのもよく分かっている。

ある学生は、「食べログの評価が三・六以上のお店しか予約して行かないと決めている」という。そこで私が「じゃあ、それで行ってみるとどうなるの？」と聞くと、「え、普通においしいですよ」と満足そうに答える。それはそうだろう、と思う。そこそこ評価のよい店に行き、評判通りのおいしさの料理が出てくる。そこに不思議はないし、驚きもない。学生からしてみれば、驚く必要も、不満

2023.6 群像　430

▪稲垣諭「連載「くぐり抜け」の哲学 9.「人間のふるさと」へ向かって」（群像 2023年 06 月号）
▪坂口安吾『堕落論』（角川文庫 昭和五十六年七月）

安吾の示唆している「ふるさと」は
「常人には受け入れがたい残酷な「ふるさと」であり
それは「常人には受け入れがたい
残酷な」ものであるがゆえに
ひとは「あまりにも簡単にそこから目を逸らし、
忘れてしまう」「弱さ」へと逃れてしまう

その「弱さ」ゆえに
「安心」「救い」を求めるからである
そしてそのためにさまざまな「規則」がつくられ
それに従うことを
モラルや社会性として受容するようになる

昨日とりあげたヤマザキマリの
『人類三千年の幸福論』においても
「想像力をすり減らす同調圧力」が
日本だけではなく
ヨーロッパにもそういう現象が
見られるようになっているという話があったが

本論で稲垣諭が苦手としてきている「予約文化」も
そうした与えられた「安心」のもとで生きるための
「モラル」であり「社会性」だといえる

そうした「安心」から
解き放たれてしまうという「怖れ」ゆえに
そうした「管理社会化」へと
わたしたちは歩んでいかざるをえないところがある

ある特定のテーマにおいて
「管理社会化」に批判的であったとしても
その批判的であるそのことそのものが
さらなる「管理社会化」を
促進してしまうことにもなってしまう

そんななかで大切なのは
ゲーム化へと向かいすぎることに意識的になり
「プレイ」という「ふるさとを忘れないこと、
ふるさとから目を離さず」にいることだろう

そうでなければ
規則は規則のための規則
モラルはモラルのためのモラル
社会性は社会性のための社会性となり
私たちの「生」は
ただ「ゲーム」を演じるだけのものとなってしまう

▪稲垣諭「連載「くぐり抜け」の哲学 9.「人間のふるさと」へ向かって」
（群像 2023年 06 月号）
▪坂口安吾『堕落論』（角川文庫 昭和五十六年七月）

（稲垣諭「連載「くぐり抜け」の哲学 9.「人間のふるさと」へ向かって」より）

「予約文化はとどまることを知らない。旅行からレストラン、居酒屋、歯医者、美容室などなど、予約を行ってからその場所へと向かう。郵便局や銀行でも整理番号をもらって順番を待つ。これはもう当たり前の風景である。」

「私はこの予約というのが、物心ついてからずっと苦手である。予約という行為も、予約をしてしまった後の心持ちもすこぶる苦手である。心がギュッとしぼられる感じがする。どうして予約なんかしてしまったのだろう、と後悔し、落ち込むこともよくある。これとは逆に、スケジュールが予定で埋まらないほうが不安だという話はしばしば聞く。これも分からなくはない、暇が怖いからである。しかし、では、自分の場合のこのメンタリティ、これがいったい何に由来するのか、いまだによく分からない。」

「むしろ人々は自ら進んで、規則や未来の時間に積極的に縛られようとする。理由は明白である。「遊び＝プレイ」が怖いからである。」

（稲垣諭「連載「くぐり抜け」の哲学 9.「人間のふるさと」へ向かって」〜「1．プレイは定義できるか」より）

「前回は、人類学者のD・グレーバーによる「ゲーム」の定義を用いて、人々がどうして「ゲーム」を愛するのか、その誘惑がどこにあるのかを論じた。今回は、その裏にある「プレイ」の側かえあ思考を進めてみる。グレーバーが指摘していたように、そもそも人はなぜプレイを怖れるのか。むしろ多くの人々が同意するのは、たとえば子どもにとって遊びの経験は発達的に重要だし、遊びには「創造性」の鍵も含まれているということだろう。プレイの恐ろしさはどこにあるのか。
「プレイ」をそれ自体として定義してみようとすると、非常に困難であることが分かってくる。その理由のひとつは「ゲーム」との差異が不明瞭だからである。したがって「ゲーム」との対比を際立てながらプレイの実像を押さえていく方法がベターとなる。
　まずプレイには、ゲームにとって必須の規則が存在しなくてもよい。「プレイには原則、規則は必要ではない」というメタ規則があるわけでもない。むしろプレイは、規則や社会的な有意義から外れたところで「何かが起こる」という出来事性からなる。そしてそこから人は快楽を積極的に得るのだ。
　そもそも人は遊びたくなるから遊ぶのであって、もし何か別のことを目的として遊んだり、遊びが規則的になったりする場合、その純粋さ、本義は失われる。プレイは究極なまでの自己目的的行動である。規則を翻弄しながら新しい規則を生みだすことさえプレイの特性であり、逆にその規則がプレイを縛るようになるとゲームに近くなる。」

「この恣意性と、いつ、そして、何が起こるか分からない不確定性から、遊びを自由や自律、主体性へと結び付けることもできる。遊びは偶然の「余白（play）」から生じ、遊動空間の「余地（pkay）」に糧を与え、生真面目で融通の利かないお堅い世界とは異なる、ゆるんだ現実があることを私たちに垣間見せる。
　本連載において、このプレイにかかわる議論に私たちはすでに何度か出会っている。それは、詩人のヴァレリーが見た「踊るクラゲ」としてであり、哲学者のバタイユによって至高性が生じる場所のひとつとしてである。
　プレイは芸術性や創造性の溢れる場所であり、ヴァレリーにとってそれは、「それ自体が目的となるダンスの生成」であったし、バタイユにとってそれは「未来から私たちを搾取してくる労働からの離脱」であった。どちらもそのような至高な体験に貫かれ、それを夢見ていた。その体験とは、後先を考えることから切り離された、現在の瞬間に特化した特別なものである。」

（稲垣諭「連載「くぐり抜け」の哲学 9.「人間のふるさと」へ向かって」〜「2．自然はプレイする」より）

「どうして私たちがプレイを怖れるのか、その理由は、プレイのこうした恣意的な暴力性とその暴走を、プレイそのものによって抑制することが困難であることを私たちが深く自覚しているからである。
　だから私たちはゲームを愛することでプレイを囲い込み、プレイをゲームへと吸収する。それは、獰猛なオオカミが長い時間を経て豆柴になったように、プレイを家畜や伴侶動物のように飼い慣らすことでもある（プレイの家畜化）。ゲームを壊さない範囲でのプレイ、つまり「ゲーム内プレイ」だけを許容していくような社会の方向性である。予約文化も含め、私たちは間違いなく、そうした世界に向かっている。
　しかしそれはどこまで可能で、そこに別種の問題はないのだろうか（いずれ私たちは、プレイ的暴力とゲーム的暴力の差異を見つめなければならなくなるだろう）。

（稲垣諭「連載「くぐり抜け」の哲学 9.「人間のふるさと」へ向かって」〜「4．これが人間のふるさとなのか」より）

「大地から根が離れ、くらげのように浮遊した生は、突き放されることで再度、「大地に根の降りた生活」となる。このことはそのまま、「堕落論」における「堕ちること」のプロセスとも重なり合っている。大地を離れて浮遊した生活を送る人間は、堕ちることでふるさとを知るのである。安吾は、プレイの大地に根を下ろすことなしには、どのようなモラルも社会も信用に値しない、そう考えている。

　　モラルがないこと、突き放すこと、私はこれを文学の否定的な態度だとは思いません。むしろ、文学の建設的なもの、モラルとか社会性というようなものは、この「ふるさと」の上に立たなければならないものだと思うものです。

　安吾はこの「ふるさと」を「宝石の冷たさのようなもの」であり、「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」であるとも述べる。私たちが突き放されてしまうとき、この「私たち」という連帯はほどけ、一個の世界とそこに居合わせる「私」の二つしかなくなってしまう。言葉も行為も失って個であることが、ナイフの切っ先のような鋭さで突き付けられる。（･･･）どのような救いも、モラルも、規則もないまま、プレイに翻弄された実存の孤独である。
　そこに身を浸しきったときに私たちは、自らの「ふるさと」に触れるのだと安吾はいう。このふるさとは明らかに一般的に理解されるふるさとではなく、異様なほど非–ふるさと的な何かである。にもかかわらず、この「非–ふるさと」こそが「ふるさと」であると、安吾はアクロバティックに矛盾するレトリックを用いて主張する。

（･･･）

　モラルがないことがモラルであり、救いがないことが救いであるとの表現を安吾は何度も用いている。このふるさとは予約をしてから帰るような場所ではありえない。それは「宿命などというものよりも、もっと重たい感じのする、のっぴきならぬもの」であり、「我々の生きる道にはどうしてもそのようでなければならぬ崖があって、そこでは、モラルがない、ということ自体が、モラル」なのだから。」

「ふるさとに戻ること、帰ることは大人がすべき仕事ではない。大切なのは、このふるさとを忘れないこと、ふるさとから目を離さず、ふるさとの紐帯を手放さないことである。その逆に、安吾が恐れるのは、人間があまりにも簡単にそこから目を逸らし、忘れてしまうことにあるのかもしれない。いや、恐れというのとは違う。そうではなく、常人には受け入れがたい残酷な「ふるさと」を「氷を抱きしめたような、切ない悲しさ、美しさ」として回収できてしまう安吾の「強さ」に対置される人間全般の「弱さ」の冷徹な眼差しである。」

「ここから問われるべきものは、二つである。
　バタイユや安吾には具わっているように見える至高な体験に耐える「強さ」が何に由来していたのかと、それに対して堕ちぬくことのできない「弱さ」をかかえた人々がどこに向かうのかである。この二つの問いが指し示しているのはやはり、ゲームがプレイを凌駕していく社会に他ならない。」

☆mediopos-3107　　2023.5.21

「脳科学」は
記憶の働きも
すべてを物質的な「脳」に還元して
説明しようとするので
ある種の保留は必要になるが

その最新の研究成果における現象面を
ＰＣのハードとソフトによる作動といったイメージで
脳の働きと関連して理解するとき
いろいろと参考になることが多いので
こうしてコンパクトに参照できるものに
目を通してみるのは興味深い

私たちはじぶんの意思であると思っていても
「脳」がどのように働いているか
じぶんの「記憶」にしても
そのほとんどを意識化することができずにいる

けれどそうした「記憶」こそが
著者の言葉でいえば「マインドセット」を作り
私たちの「人格」を形成している

本書では「脳」の働きのなかでも
「頭の中には「ある」のに、なぜ出てこない」のか
そのとき「脳内」では何が起きているのかを中心に
「記憶」のさまざまなメカニズムについて
わかりやすく説明されている

思い出せないとき
以下の５つのことが
組み合わさって起きているのだという

①そもそも記憶を作ることができなかった
②情動が動かず、重要な記憶と見なされなかった
③睡眠不足で記憶が整理されなかった
④抑制が働いて記憶を引き出せなかった
⑤長い間使わなかったために、記憶が劣化した

ほとんどの場合「記憶」は
失われてしまっているのではなく
「思い出せない」
つまり引き出せなくなっているだけなので
重要なのは引き出せるような仕方で
記憶するということが重要である

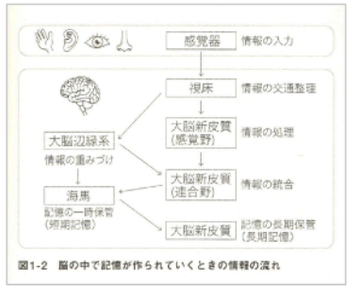


図1-2　脳の中で記憶が作られていくときの情報の流れ

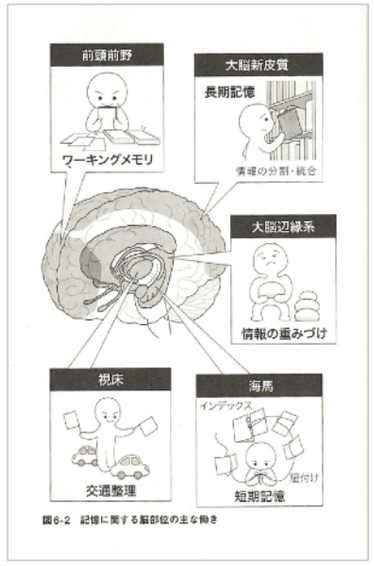


図6-2　記憶に関する脳部位の主な働き

▪澤田誠『思い出せない脳』 (講談社現代新書　講談社 2023/5）

年をとるともの覚えが悪くなるともいわれるが
それは新しいことを「覚える力」ではなく
「引き出す力」が衰えるからだともいう

記憶は神経細胞のなかにただ保管されているのではなく
ネットワーク的なかたちで保管されているので
重要なのはそのネットワーク的な記憶を
いかに積極的に働かせるかということである

若い頃は経験の量そのものが少ないので
新たな経験や体験に対して
それを積極的に記憶として受容しようとするが
年を経るにつれて
いわば「好奇心」が衰えることで
脳の神経細胞のネットワークが積極的に働かなくなり
しかも過去の経験や体験が蓄積することで
それらを引き出すプロセスも複雑になるために
記憶する力が衰えるような現象となって現れるようだ

ちなみに「喉元まで出ているのに思い出せない」のは
「思い出そうと頑張る」ために
「間違った神経細胞が活動」することで
周辺の抑制性の細胞が刺激されることで起こるようである

そうした「周辺抑制」が解けたとき
「探すのをやめたときに出てくる探し物」のように
「しばらく経てば、ふっと湧き上がるように
記憶がよみがえ」ることがあるのだという

さて「記憶する」ということについて
こうして脳科学の視点から見ていくことは参考になるが
本書でも示唆されているように
「何を記憶するかを選ぶことは、
何を忘れるかを選ぶこと」でもあるという

映画の『レインマン』で有名になった
サヴァン症候群の人たちは並外れた記憶力を持っているが
その脳では左脳の機能が損なわれていて
それを補うために
右脳の能力が発達したという仮説があるそうだが
その能力は決して幸せな能力とは言いがたい
その「脳」は忘れることができないからだ

私たちは（とくにぼくはだけれど）
忘れることが得意なおかげで
幸せに生きられる能力を得ているのかもしれない

▪澤田誠『思い出せない脳』 (講談社現代新書　講談社 2023/5）

（「序章」より）

「自分の意思で決めていると思う人もいるかもしれませんが、意思が関与できる部分はほんのわずかです。ヒトが意識できる情報量は脳内で処理されている情報の１００万分の１以下だという説もあるくらいです。
　記憶というのはただの情報の集積ではありません。脳は記憶を形成し、活用するために、情報の抽出、再編集、関連付けを常に行っています。脳の中の記憶はあなた専用にカスタマイズされた唯一無二の情報源なのです。
　もっといえば、私たちは、それぞれの脳の中に外界を解釈するための、記憶をもとに作られた自分だけの世界を持っているのです。
　このような脳の中に作られた世界のことを、私は「マインドセット」と呼んでいます。
　（･･･）
　私たちが何かを経験し、記憶すると、このマインドセットが変化していきます。育っていくと言ってもいいかもしれません。マインドセットが豊かで健全な状態であれば、自分の望む未来に進みやすくなります。逆に、マインドセットが乏しく偏ると、その人の判断や行動は決まったパターンから抜け出せなくなり、自分にとって本当に利益になる合理的な選択ができなくなります。
　マインドセットが私たちの未来を左右します。そしてそのマインドセットを形成する基礎になるのが記憶なのです。」

「記憶というと、知識を詰め込むというイメージが強いかもしれません。この本では、そのイメージを変えたいと考えています。そうすることで、豊かなマインドセットを育て、記憶を自在に活用する方法が見えてくるからです。
　特にこの本では記憶の中でも「思い出せない脳」の仕組みに焦点をあてていきます。なぜなら、記憶は自在に引き出せて初めて活かすことができるからです。「覚えられない」もしくは「忘れてしまった」とあなたが嘆いているとき、脳の中にその記憶は存在しています。覚えたし、忘れてはいないけれど、「思い出せない」だけの場合が多いのです。ふとした瞬間に、ふっと思い出すのが、脳の中からなくなっていない証拠です。」

「実は、年を取って衰えるのは新しいことを「覚える力」ではなく、「引き出す力」だという研究結果があります。
（･･･）
　年を重ねて経験が多くなったこよも、記憶の引き出しにくさに関係してきます。脳に貯蔵される記憶が増えるほど、神経細胞のネットワークは複雑になってきます。記憶の引き出しには、脳の複数の機能が関わっているため、間違えやすくなったり、引き出しにくくなったりするのです。」

「この本では、思い出せないときに脳の中で起こっていることを、大胆に５つに分類してみました（実際にはこんなふうにきれいに分けることはできず、５つのパターンの組み合わせになります）。

　①そもそも記憶を作ることができなかった（→第１章）
　②情動が動かず、重要な記憶と見なされなかった（→第２章）
　③睡眠不足で記憶が整理されなかった（→第３章）
　④抑制が働いて記憶を引き出せなかった（→第４章）
　⑤長い間使わなかったために、記憶が劣化した（→第５章）

（「１章　記憶を作れないと、どうなるか」より）

「記憶が作られていくときの情報の流れを、簡単に図１–２に示しました。」

「しっかりと取っておきたい記憶は、情報を長期的に保管する保管室である「大脳新皮質」に送られますが、その前に、必要な記憶を取捨選択し、整理しておく必要があります。その役割を担うのも海馬です。大脳辺縁系で行われた重みづけをもとに、どの記憶を保管室にしまうのかを判断します。」

「神経細胞が記憶を保管しているのだとしたら、保管できる記憶の数は有限です。ある記憶を保管した神経細胞が死んでしまったら、その記憶は永遠に失われてしまうことになり、記憶のシステムとしてはあまりにも不安定です。
　科学者たちは、このような矛盾を解消するために、１つの仮説を立てました。
　記憶は神経細胞の中や特定の分子に保管されているのではなくて、神経細胞同士のネットワークとして保管されているのではないかという仮説です。」

「記憶がネットワークで保管されえているおかげで、神経細胞が減っても、すぐに特定の記憶はなくなるわけではありません。しかし、減れば減るほど、記憶力は落ちていきます。」

（「第２章　情動が記憶を選別する」より）

「名前や、数字の公式、歴史の年号など、現代社会で知識と呼ばれているようなものの記憶のことを「意味記憶」と呼びます。長期記憶の一種で、恐らく太古の人類には必要がなかった種類の記憶でしょう。
　意味記憶と対を成すのが「エピソード記憶」です。経験や体験に基づいた記憶で、時間や場所や感情などを伴う記憶です。
　意味記憶は簡単に説明でき、恐らく誰が説明しても同じような答えになるはずです。しかし、エピソード記憶は人によって違います。説明しようとすると、もやもやと映画の一場面のようにそのときの情景が浮かびます。」

「記憶が残るか残らないかは、情動の動きに関係しています。情動が動くポイントは人によって異なります。
（･･･）
　好奇心を持っていろいろなことに心を動かすことは、記憶力を強化する有効な手段です。
　しかし、強すぎる情動は、記憶を必要以上に強化してしまいます。
　恐怖などの強い情動のせいで、記憶が強化されて、日常生活に支障をきたしてしまう病気がＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）です。
（･･･）
　私たちが何か記憶を思い出すとき、単にデータとして読みだすのではなく、そのときに湧いた情動も同時によみがえります。良い思い出ならいいのですが、つらい記憶の場合、思い出すだけで、嫌な情動に支配されてしまいます。」

「強い情動が記憶を強化するという点では、ネガティブな情動もポジティブな情動も同じですが、記憶のされ方が違うようです。たとえば強う恐怖の感情は、記憶を断片化してしまいます。」

「年を取ると、月日が経つのが早く感じるのは、関心を向けるものが少なくなって記憶がしっかりと作られていないからかもしれません。」

（「第４章　抑制が働いて思い出せない」より）

「脳は記憶を整理するときに、「類型化」を行っています。
　類型化とは、複数の物事の中から共通の項目をとりだしてまとめることです。タイプ分け、カテゴリー分け、パターン分けはすべて類型化です。脳は、似たようなものをグループにして記憶を作っているのです。
　類型化をしておくと、後で必要な時に使いやすくなります。そのために脳は常に情報の類似性を探し、カテゴリー分けをしているのです。
　しかし、この類型化のせいで関連する記憶が想起されて周辺抑制が起こってしまう、記憶を思い出すのが困難になるときがあります。
　特に名前は思い出しにくいのです。エピソード記憶に分類される記憶は、その人独自の固有の経験ですが、名前の文字列には独自性がそれほどありません。
　（･･･）
　喉元まで出ているのに思い出せない場合は、記憶がなくなったわけではありません。しばらく経てば、ふっと湧き上がるように記憶がよみがえります。これは思い出そうと頑張るのをやめたので、間違った神経細胞が活動をやめて、周辺の抑制性の細胞も刺激されなくなり。周辺抑制が解けたおかげです。探すのをやめたときに出てくる探し物と同じですね。」

（「第５章　使わない記憶は変容し、劣化する」より）

「記憶の劣化は、大きく２種類に分けることができます。保管している記憶そのものの劣化と、それらを呼び出すインデックスの劣化です。どちらにしても思い出すことができないので、脳の持ち主にしては同じことです。また、どちらかだけが起こるというわけではなく、多くの場合は両方が起きているはずです。」

「劣化が起こりにくい記憶はエピソード記憶で、起こりやすい記憶は、意味記憶です。」

「記憶は失われるだけではありません。記憶同士が干渉し合い、変容するのです。」

「人間の記憶は正確ではありません。いとも簡単に偽の記憶を植え付けることができる研究も知られています。
（･･･）
　問題なのは、いったん記憶が変容してしまうと、何が本物なのか分からなくなることです。」

「サヴァンの人たちに比べて、私たちは忘れることが得意です。本を読んでいるときは、目という感覚器を通して、本の一字一句が脳の中に入ってきています。しかし、それをそのまま記憶したりはしません。何が書いてあるのかを理解し、その理解した内容を自分なりに要約し、すでに頭の中にある記憶と結び付けて編集して、脳の中に保存し、それ以外の情報は忘却しているのです。
　何を記憶するかを選ぶことは、何を忘れるかを選ぶことでもあります。私たちの脳が、何を思い出せないのかを知ることは、私たちが生き延びるために必要なものを知ることにつながります。
　忘れるというのは、私たちが長い人生を生きていくために不可欠な働きです。」

（「第６章　記憶という能力の本当の意味」より）

「脳の情報処理は、ある意味、とてもいい加減です。ざっくり概要をつかんで、細かいことは気にしません。少々足りない情報があっても、勝手に自分で判断推測して補って解釈してしまいます。新しい情報が入ってきたら、過去の記憶と照らし合わせ、よく似ていたら過去の記憶を基準に判断して、分かった気になってしまいます。エピソードを伴わない記憶だけの記憶も苦手です。」

「マインドセットを広げるのは、自分を分析することが有効です。自分がどういうことに興味を持っているのかを知って、それらのことに意識的に関心を持って、心を動かして活動してみてください。」

◎澤田 誠
1958年香川県生まれ。東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程生命化学専攻修了。理学博士。専門は神経化学、神経薬理学。米国国立衛生研究所ポストドクトラルフェロー、科学技術振興事業団「さきがけ研究21」研究員、藤田保健衛生大学(現 藤田医科大学)総合医科学研究所教授等を経て、2005年名古屋大学環境医学研究所教授に。2012年同所所長に就任。脳の免疫機能を担うグリア細胞の一種ミクログリアの研究を20年以上にわたり行っている。趣味はテニス、映画鑑賞。出身高校は神奈川県立横浜翠嵐高等学校。

☆mediopos-3108　　2023.5.22

かつての社会（伝承社会／前近代社会）においては
子どもから大人への移行や
秘儀集団などへの加入
神秘的な召命に際して
通過儀礼（イニシエーション」が存在していたが
近代以降それらは実質的に消滅してしまっている

それぞれの共同体においては
現在においてもなんらかの儀式は存在しているが
エリアーデも『生と再生』において示唆しているように
それらの儀式はかつての意義を持っているとはいえない

ラディカルなユング派のギーゲリッヒは
「現代において社会的機構としての
イニシエーションはもはや存在せず、
現代文化は根本的にイニシエーションに対して
敵対的であろうとする」とさえ言っている

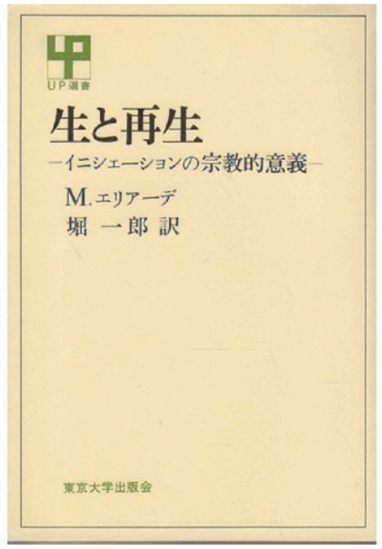
「われわれはイニシエーションを教育によって置き換え、
それはさらにメディア、「情報」、
プロパガンダによって取って代わられている」のだと

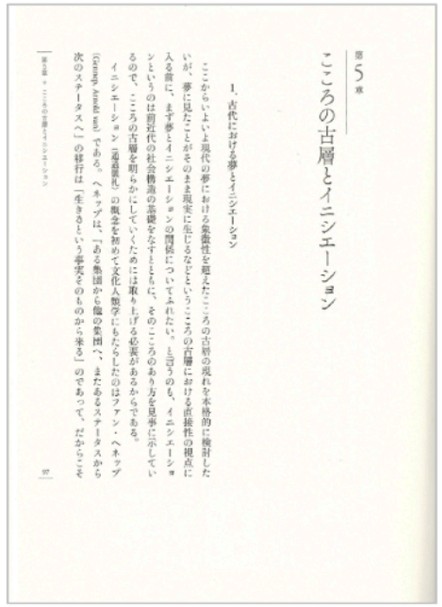
しかしかつてのような「イニシエーション」が
失われてしまったとしても
それを必要としていた「こころの古層」においては
それに代わるものが求められているともいえる

河合俊雄はそうした視点から
「現代においてどのようなイニシエーションが可能なのか、
そもそも可能なのか」を心理学的課題として問いかけている

その示唆のなかで興味深いのは
「境界を超える」ということである

エリアーデの著書のタイトルでいえば
『生と再生』であり
それは「（象徴的な意味での）死と再生」
といってもいいかもしれない





▪河合俊雄『夢とこころの古層』（創元社 2023/4）
▪ミルチャ・エリアーデ『生と再生—イニシェーションの宗教的意義』
（東京大学出版会 1995/3）

「イニシエーション」とは
「境界を超える」ための通過儀礼であり
現代を生きる私たちにとって
超えなければならない「境界」とはなにかが問題となる

ギーゲリッヒの言うように
それが教育・メディア・情報・プロパガンダであるとしたら
わたしたちはほとんど洗脳状態へと移行するしかなくなる

逆説的にいえば
それれこそはいってみれば「悪の秘儀」として
私たちに「死」をもたらすものであり
それらから解放されあらたな認識態度を持ちうることこそが
「通過儀礼」であるということもできるかもしれない

ある意味でその「通過儀礼」は
もっとも困難な道であるともいえるが
いままさに「自由」への創造的な覚醒として
その道を歩んでいく必要があるといえる

▪河合俊雄『夢とこころの古層』
（創元社 2023/4）
▪ミルチャ・エリアーデ『生と再生―イニシェーションの宗教的意義』
（東京大学出版会 1995/3）

（河合俊雄『夢とこころの古層』～「第５章　こころの古層とイニシエーション」より）

「「近代世界の特色の一つは、深い意義を持つイニシエーション儀礼が消滅し去ったことだとよくいわれる。伝承社会では第一義的な重要性を持つこの儀礼も、近代の西欧社会ではめぼしいものは実際上存在していない」。このようにエリアーデは、『生と再生』の冒頭において述べている。近代西欧社会、さらにはグローバル化された現代の世界の特徴はイニシエーションの否定と消滅なのである。」

「エリアーデは西洋社会におけるイニシエーションの喪失を指摘していた。ユングは、期待していたにもかかわらず、自らの聖餐式での失望を通じて、イニシエーションが儀式として失われてしまっているのを痛感した。しかしユングはそれを共同体で共有される儀式としてではなくて、個人がイメージとして象徴的に体験するものに、その復活の可能性があると信じていた。
　しかしユング派分析家でラディカルに西洋近代の意味を追求しているギーゲリッヒは、これに対して否定的である。ギーゲリッヒは、現代において社会的機構としてのイニシエーションはもはや存在せず、現代文化は根本的にイニシエーションに対して敵対的であろうとする。そしてわれわれはイニシエーションを教育によって置き換え、それはさらにメディア、「情報」、プロパガンダによって取って代わられているとする。だからたとえイニシエーションを思い起こさせるようなモチーフの夢があっても、今日の夢におけるイニシエーションのモチーフと伝統的社会で実際に行われていたイニシエーションとを区別する必要があるとする。」

「現代の心理療法において、イニシエーションのイメージは生じてこないのでろうか。あるいはたとえ生じたとしても、それは全人格に対する実存的変容をもはやもたらさないものなのであろうか。
　しかしこころの古層においてイニシエーションのイメージや意味が生きていると思われるので、現代の心理療法においても、イニシエーションのイメージが生じてくることがある。」

「イニシエーションにおいて、境界を超え、死を後にするということが決定的な意味を持つ。しかし近代意識というのは、そのようなイニシエーションを否定することによって成立している。」

「イニシエーションにおいて、境界を超えることは決定的な意味を持つ。しかし境界を超えないこと、否定によるイニシエーションというのがあることを見てきた。さらには、二〇〇〇年以降に増えているＡＳＤ（Austin Spectrum Disorder:自閉症スペクトラム障害）傾向や発達障害のことを検討してみると、境界の喪失ということが生じてきているようである。笠原嘉は、統合失調症の発病の特徴として、「出立の病」ということを指摘した。つまり思春期に好発する統合失調症においては、海外に行ったり、修学旅行に行ったり、就職したり、恋愛をしたりなどをきっかけとして発症することがしばしばある。これは、現実での変化が、全然レベルの異なるものへと境界を超していくこととして受けとめられることによって発症に到ると考えられる。
　田中康裕は、妄想型統合失調症のクライエントが語った異常体験を紹介している。二〇代後半の男性は、「あちら側の世界の異変を確かめるために佐渡島へ渡り」、その後本州に戻ったものの、「別の世界に来てしまったように感じていた」。そのために何度も佐渡島に渡って本州に戻ることを試みたが、「二度と元の世界には戻れなかった」という。ここには、境界を超えることの絶対性が示されている。
　しかしそれに対して、発達障害と思われるクライエントにおいては、グルグルと循環してしまって、境界や超えることの不可逆性がない。田中康裕が挙げている発達障害のクライエントの例では「異世界・異次元に行ってしまう恐怖」があるが、晩酌している父親の周りを単にぐるぐる廻ってしまったりする。発達障害の人の夢として、「橋を渡って向こう側に行き、もう一度別の橋を渡り、さらにもう一度別の橋を渡ると、元の場所に戻っていた」というのを同僚から聞いたことがある。つまり橋は三角形のように架かっていて、元に戻り、向こう側がない。このように境界がないと、否定としてのイニシエーションもなくなってしまっているのである。現代においてどのようなイニシエーションが可能なのか、そもそも可能なのかは、重要な心理学的課題であると思われる。」

（ミルチャ・エリアーデ『生と再生―イニシェーションの宗教的意義』より）

「伝承社会人は、じつにイニシエーション儀礼を通してのみこの人間像を知り、それをみずからのものとなり得る。もちろん、いろいろと違った社会構造と文化水準に応じて、多数のイニシエーションの型と無限の変化型があるが、重要なことは、すべての前近代社会（すなわち西欧では中世末に終焉し、そのほかの世界では第一世界大戦をもって終焉した）は。イニシエーションの理論と技術に第一義的な重要性を与えているという事実である。」

「近代人はもはや伝統的な型のいかなる加入例も持っていない。何ほどかの加入礼的テーマはキリスト教にも残っているが、いろいろのキリスト教派はもはやこれを加入礼的価値を持つものとは認めていない。古代後期の密儀宗教から借用した儀礼や影像や術語は、その加入礼的雰囲気を失ってしまっている。」

「たしかに、こんにちも多数の秘儀派、秘密結社、擬制的加入礼集団、錬金術的、すなわち、新心霊主義運動といったものがある。米国の神知協会（The Theosophical Society）、知人学（Anthroposophy）、新ヴェーダ教（Neo-Vedantism）、新仏教（Neo-Buddhism）の運動などは、西欧社会のほぼどこにも見られる文化現象のほんの二、三のよく知られた例にすぎない。これも新しい現象ではなく、秘密教への関心は、多少とも秘密結社的な形をともなって、ヨーロッパでは一六世紀にあらわれ、一八世紀には頂点に達した。ある種のイデオロギー的一貫性を持ち、すでに歴史を持ち、社会的政治的特権を享受している唯一の秘密運動はフリーメーソンリー(Freemasonry）である。それ以外の自称加入礼的組織は、その大部分は最近の、しかも混淆的即興物である。これらの関心は主に社会学的、心理学的なものであり、現代社会の一部の認識混乱と宗教信仰の代償物を発見しようとっする欲求をあらわしている。これらはまた、秘儀、秘教、来世への不屈の精神的偏向性をしめしている、ーーーーそしてこの偏向とは人間の不可欠の部分であり、あらゆる文化段階のあらゆる時代、とくに危機の時期に見出されるものである。」

「さて、ずっと前にふれた問題に立ちもどろう。それは、加入礼のテーマが主として近代人の無意識のなかに生き残っているとの問題である。この点はいくつかの芸術創作ーーーー詩、小説、造形美術、映画ーーーーの加入礼的シンボリズムだけでなく。これらが大衆にうけいれられている点からも確認される。こうした大衆の、自然の受容こそは、近代人がその存在の最深部において、いぜんとして加入礼的筋書きとか福音に影響されうるものだということを証拠立てているように思われる。」

「加入礼は正しく人生の核に横たわっている。そして二つの理由から、この見方は正しい。第一は正しい人生とは深刻な危機、責苦、苦悩、自我の喪失と再確立、「死と復活」を含意するからである。第二の理由は、ある程度仕事を成就したにしても、ある時点では万人がその人生を失敗と見るという点である。この幻想はその人の過去に対してなされる倫理的判断からではなくて、その召命（天職）をとりにがしたとの漠然たる感情からおこるのである。つまり、その人はみずからのうちにある最善なるものを裏切ったという感情である。こうした全面的な危機の時点で、ただひとつの希望、人生をこう一度始めからやり直すという希望だけが、ある成果をもたらすように思われる。要するに、このことは、こうした危機に見舞われている人は、新しい、再生された生活を充分に意義あるものにしようとの夢を持つことなのである。それは宇宙が更新されるように、万人の魂が季節的にみずから更新されるといった漠然たる希求以外のもの、それをはるかに越えたものである。こうした八方塞がりの危機に際する希求や夢は決定的で、全体的なレノヴァティオ（renovatio）＝生命の変革できる更新を獲得することである。
　しかし、真の決定的回心は近代社会では比較的稀れである。非宗教的人間もどきとして、その存在の最深部にこの種の精神的変革への希求を感じるという事実こそ、もっとも重要なものと考えられるのだ。これは、ほかの文化圏ではまさしく加入礼の目的とするところなのである。（･･･）加入礼が人間存在の特殊次元を形づくっているといい得るとすれば、それは何よりも「死」に積極的意義を与えたからである。「死」は「時間」の破壊的行為に従わない存在様式にいたる、新しい純粋に礼的な誕生を用意するものなのであり。」

☆mediopos-3109　　2023.5.23

詩人の野村喜和夫は
「河津聖恵は光の詩人である」と評しているが

河津聖恵にとって
昨年（2022年）刊行された詩集『綵歌（さいか）』は
まさに闇を湛えているように見える現代において
「闇と背中合わせの輝き、
あるいは闇そのものの輝き」である伊藤若冲の闇と
詩人の「闇が一瞬切り結んで生まれた光」であるという

『綵歌』の「綵（さい）」という言葉は
若冲が一七五八年（43歳）頃から十年ほどかけて描いた
「動植綵絵（どうしょくさいえ）」三〇幅からのもの

詩集は序章・第一章〜第四章・終章で構成され
若冲の生涯に起こった出来事も絡めた
詳細な「解説」編も加えられている

若冲は一七一六年に生まれ一八〇〇年に85歳で亡くなっているが
序章から第三章までは一部（果蔬涅槃図／64〜76歳頃）を除けば
40歳代から50歳代までの絵が取り上げられている
（引用で紹介しているのは「序章」の最初にある「霏霏ー芦雁図」）

続く第四章では73歳のときの天明の大火（一七八八年）以降の
絵がとりあげられていて
「動植綵絵」は奇跡的に無事だったものの
大火で住まいを焼かれ窮乏のなか
生計を立てるためにも絵を描くようになった時代である

若冲の作品といえば
以前は代表作である「動植綵絵」のほうばかりに注目していたが
この詩集を手にその生涯をみていくうち
第四章でとりあげられている時代に興味をひかれるようになった
ある意味でその時代の若冲は
「動植綵絵」にみられる表現力豊かな「絵」を超えて
見えない「無」を照らしているようにさえ感じられてくる

- 『河津聖恵詩集 綵歌』（ふらんす堂 2022/2）
- 『河津聖恵詩集』（現代詩文庫　思潮社 2006/2）
- 『図録 若冲展 ―開基足利義満600年忌記念』（日本経済新聞社 2007/1）

若冲はその生年が
尾形光琳の没した享保元（一七一六）年である

光琳は禄文化を代表する画家・御用絵師で
「金銀の王朝的なきらびやかさ」のなかにあったのに対し
若冲は「経済の発展がすでに矛盾をもたらし
社会不安も高まり始めた時代」を生きた「町絵師」

その二人の絵を対照させることで
ある意味で若冲の生きた時代を
危機の時代ともいえる現代と照らし合わせることもできる

詩集の「あとがき」には
「若冲の生きた十八世紀と私の生きる二十一世紀が
浸透し合うような、不思議な時空の感覚」を覚えながら
それを「詩の言葉によって生捕りにしたい」
そしてそのことで闇を湛えているように見える未来に
「光」を「希望」を見出そうとしていると記されている

詩集『綵歌』をきっかけに
ここしばらく久しぶりに若冲の絵と生涯を
そしてそれに照らされた詩の言葉を逍遙してきたが
ぼくという闇のなかでも灯された
その「火種」の行方を見つめてゆくことにしたい

- 『河津聖恵詩集 綵歌』（ふらんす堂 2022/2）
- 『河津聖恵詩集』（現代詩文庫　思潮社 2006/2）
- 『図録 若冲展 ー開基足利義満600年忌記念』（日本経済新聞社 2007/1）

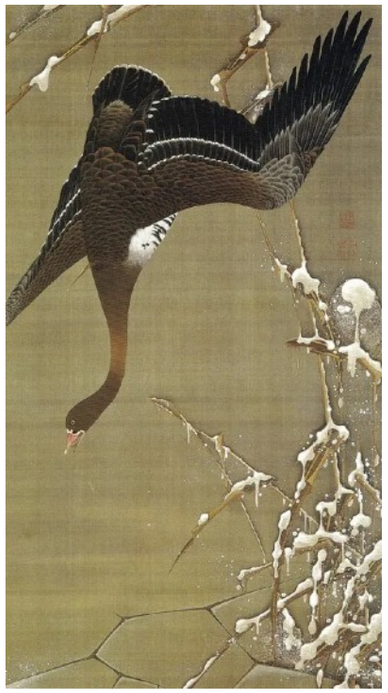
（『河津聖恵詩集 綵歌』〜「序章」より）

「1　霏霏ー芦雁図

霏霏ひひ）といううつくしい無音を
とらえうるガラスの耳が
多くのひとから喪われつつあった時代
ひとひらふたひら
空が溶けるように　今また春の雪は降りだし
この世の底から物憂く絵師は見上げる
見知らぬ鳥の影に襲われたかのように
煙管を落とし　片手をゆっくりかざしながら

雪片ははげしく耳をとおりすぎ
ことばの彼方に無数の廃星が落ちてゆく
ひとの力ではとどめえない冷たい落下に
絵師は優しく打ちのめされる
愛する者がはかなくなって間もない朝
この世を充たし始めた冷たい無力に
指先までゆだねてしまうと
庭の芦の葉が心のようにざわめき
この世はふいにかたむいた
雁がひとの大きさで墜落し
風切羽を漆黒に燃やして真白き死をえらんだ

笑うように眠りかけて指先はふるえる
乾いた筆が思わず
共振れする　霏霏
「見る」と「聴く」　「描きたい」と「書きたい」
ひえびえと裂かれてゆく深淵に雪はふりつむ
眠りに落ちた絵師は
ついに胡粉に触れた
骨白に燦めく微塵の生誕を見すごさなかった筆先」



（『河津聖恵詩集 綵歌』〜「解説」〜「連作の始まり」より）

「二〇一六年から五年半をかけて、江戸時代中期の絵師伊藤若冲の絵をモチーフに連作で詩を書きました。描かれてから二百数十年後あるいは生誕三百年ほど後に、若冲の絵をめぐって詩を書くこととはどういうことなのか、なぜ自分はそのような試みを続けてきたのかと今も考えます。最初から連作を意図していたわけではありません。一篇一篇、なぜ若冲なのかを考えつつ手探りで書きました。振り返ればそこにはつねに、鮮やかな「神気」あふれる絵に詩を触発されようとする自分がいました。この連作詩は、むしろそのような自分にひそむ欠如をめぐって書かれたものだと言ってもいいかもしれません。この今だから、この私だから若冲だった、と。」

「この詩集のタイトルは「綵歌（さいか）」です。「綵」の字にピンと来る方も少なくないと思いますが、これは若冲が一七五八年（43歳）頃から着手し、およそ十年をかけて完成した三〇幅の花鳥画の題名「動植綵絵（どうしょくさいえ）」から採っています。（･･･）ただ各篇のモチーフは「動植綵絵」の絵に限りません。他にも魅力的な作品がたくさんあるからですが、その時々の自分の気持ちに合う絵を選んでは、気ままに書いていきました。若冲の絵だけでなく、生涯に起こった出来事に想いを寄せて書いたものもあります。」

「覚えておきたいのは、「動植綵絵」は未来や当時の人間にというより、まずみ仏に捧げられたものだったということです。決して未来や現世の世評を獲得しようという野心によるものではなかったのです。そもそも若冲は近代の画家ではなく、あくまで近世の絵師、その絵は、近現代の自閉的なエゴイズムを乗り越えるものを秘めていると思います。」

「「動植綵絵」が描かれた十八世紀の京都は、経済力の発展に支えられ文化的には華やぎながら、世相は次第に暗く不安なものになっていきました。都市の繁栄のかげで貧窮者は増加し、放火による大火が頻発、洪水や台風や地震などの自然災害、疫病、飢饉、尊王論者が幕府に処罰された「宝暦事件」などが、若冲の心に引き起こした不安が、逆説的にも「綵絵」の美しさと生命力を生みだしていると言えるのではないでしょうか。またその逆説的な輝きこそが、現代に生きる者を、遙かな時を超えてつよく惹きつけるのではないでしょうか。闇と背中合わせの輝き、あるいは闇そのものの輝きが若冲の絵にはあります。「綵」とは若冲の闇と私の闇が一瞬切り結んで生まれた光であり、それこそが詩だったと思えてなりません。」

（『河津聖恵詩集 綵歌』〜「解説」〜第四章「23 贈与の刻・24 女たち鶏たちーーーー仙人掌群鶏図（一七八九年、74歳）」より）

「天明の大火（一七八八年）後に描かれた絵です。応仁の乱以来のこの大火によって、73歳の若冲は錦街の住まいを焼かれます。京都の町の大半は俳人に帰し相国寺も焼けますが、「動植綵絵」は奇跡的に無事でした。」

「絵の煌めく金地は尾形光琳を連想させますが、すでに「動植綵絵」後半期の絵に光琳の影響があるようです。若冲の生年と光琳の没年は奇しくも同じ一七一六年、享保元年という時代の大きな変わり目となった年です。元禄文化を代表する「画家」または「御用絵師」光琳は、まだ金銀の王朝的なきらびやかさを信じて描いていた。けれど「町絵師」若冲が生きたのは、経済の発展がすでに矛盾をもたらし社会不安も高まり始めた時代でした。（･･･）そのような時代の中で、若冲にとって絵を描くこと精神的な危機とは無関係でなかったはず。同じく金地に描かれたこの二人の絵を見比べると、根本的な違いを感じます。」

（『河津聖恵詩集 綵歌』〜「解説」〜第四章「29 石燈籠図屏風（一七八三年〜一七九四年、68歳〜78歳）」より）

「晩年に描かれたこの絵は、初めて見た時不思議な既視感を覚えました。何度見ても遠い記憶が呼び起こされる気分になります。
（･･･（
　石燈籠や石柵を点描で描いたのは、石の質感を「生写（しょううつし）」したかったからでしょう。つまり若冲にとって石もまた生きていた。点は形も濃淡も一つ一つ違っています。硬い石も無数の生きた点から出来ているのです。あるいは点はもしかすると「極微な穴」であり、点＝穴から出来ている世界は「無」の集合体であり、あらかじめ欠けたもの、ということになるのではないでしょうか。あたかもあの燈籠の穴のように、ふと見れば燈籠たちは笑っています。この世界がゆるぎなく実在すると今もかたくなに信じる、俗世の人間たちを。」

（『河津聖恵詩集 綵歌』〜「あとがき」より）

「あらためて三十篇を振り返ると、自分が若冲の絵から受けた感動がかけがえのないものだったと分かります。その感動を、言葉にならないものをも含め出来るだけ壊さずに捉えるのは、詩を書く以外ありませんでした。
　感動は複雑に入り混じり静かで透明なものでした。若冲の豊かな空虚とそこに響く命の色、何かを語ろうとあるいは歌おうとするような獣たちの身じろぎと、そこに惹きつけられる私自身の欠如。若冲の生きた十八世紀と私の生きる二十一世紀が浸透し合うような、不思議な時空の感覚。それらをそのまま詩の言葉によって生捕りにしたいーーーーその思いは絵に見入るほどに、そして若冲の生き方や時代を知るほどにつのりました。これまで知らなかった詩の欲望です。
　さて、いま未来は闇をたたえています。しかし過去を振り向き目を凝らせば、無数の灯火が見えてきます。未来がどんなに闇を深めても、過去には誰かが残した灯火が待っている。そして光を強めている。そのどれか一つでも頼りにすれば、どんな闇でも少しだけ進むことが出来るはずです。それこそは希望ではないでしょうか。
　若冲は「具眼（ぐがん）の士を千年待つ」と語ったと伝えられます。自分の絵の価値が分かる人が現れるまで千年でも待とう、という意味です。千年という未来を見据えて描いていたことになりますが、千年闇が深まってもその絵は錦の輝きをますはずです。その輝きから僅かに貰い受けた明かりを手に、私の言葉はどれだけ、どこへ向かって進めたでしょうか。」

☆mediopos-3110　　2023.5.24

ＳＦ小説家の北野勇作は
Twitterで毎日「ほぼ百字小説」を発表し
その数はすでに4000回を超えるという

北野勇作のことを知ったのは
ファンタジーノベル大賞（『昔、火星のあった場所』1992年）と
日本ＳＦ大賞（『かめくん』2001年）の受賞がきっかけだったが
それ以上のことは最近まで知らずにいた

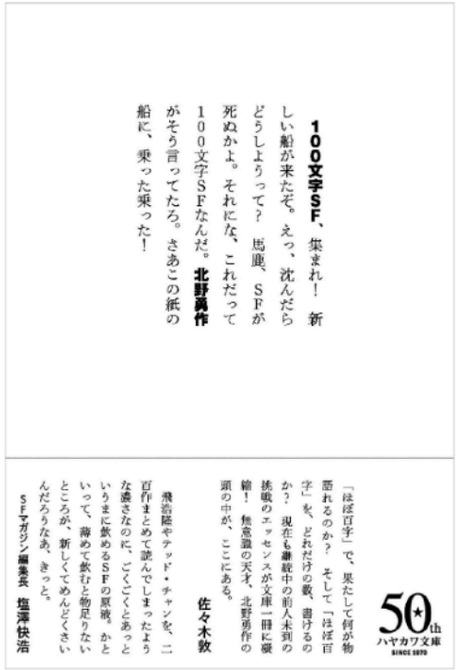
ネコノス文庫の「シリーズ百字劇場」で
久しぶりにその名を目にし
「百字で何が書けるのか？」という興味で
読み始めるとこれがなかなかイケている

氏は落語台本「天動説」で
第1回桂雀三郎新作落語〈やぐら杯〉の
最優秀賞も受賞しているそうだが
百字小説には落語的なオチも効果的に使われていたりする

『１００文字ＳＦ』が
すでにハヤカワ文庫で数年前に出ていたことに気づき
あわせて読んでみたが
たかが１００文字されど１００文字である

日本語には俳句・短歌などの定型詩が伝統的にあり
さすがに俳句の五七五・十七文字では難しくても
短歌の五七五七七・三十七文字のなかで
ある程度物語のエッセンスが表現されることもある

百文字あれば
俳句の三倍以上・短歌の三倍近くの文字数で
それなりの物語表現は可能なはずだ
じっさいに北野勇作の「ほぼ百字小説」を読むと
それはオチのついた物語詩として
充分に鑑賞可能な世界が展開されている
定型物語小説あるいは定型物語詩である


100文字SF、集まれ！　新しい船が来たぞ。えっ、沈んだら どうしようって？　馬鹿、ＳＦが死ぬかよ。それになんだって１００文字ＳＦなんだ。北野勇作がそう言ってたろ。さあこの紙の船に、乗った乗った！

「ほぼ百字」で、果たして何が物語れるのか？　そして「ほぼ百字」を、どれだけの数、書けるのか？　現在も継続中の前人未到の挑戦のエッセンスが文庫一冊に凝縮！　無意識の天才、北野勇作の頭の中が、ここにある。
佐々木敦

飛浩隆やテッド・チャンを、二百作まとめて読んでしまったような感さなのに、ごくごくとあっというまに飲めるＳＦの原液。かといって、薄めて飲むと物足りないところが、新しくてめんどくさいんだろうなあ、きっと。
ＳＦマガジン編集長　塩澤快浩

50th ハヤカワ文庫 SINCE 1970

▪北野勇作『100文字SF』（ハヤカワ文庫 2020/6）
▪北野勇作『ありふれた金庫』（ネコノス文庫 2023/3）

百文字は文庫一ページに
「視界の中に収まるほどの矩形に」
一作品が収められているが
その百文字世界には
高山羽根子の「解説」にもあるように
それなりのスケール感さえある

しかもなんといっても
それが数作品ではなく
すべて読んでいるわけではないが
じっさいは数千もつくられているのである

ちなみに『ありふれた金庫』に続き
『納戸のスナイパー』『ねこラジオ』も
ネコノス文庫で発売されるとのこと
楽しみである
（未読だが『納戸のスナイパー』はすでに刊行されている）

▪北野勇作『100文字SF』（ハヤカワ文庫 2020/6）
▪北野勇作『ありふれた金庫』（ネコノス文庫 2023/3）

（北野勇作『100文字SF』より）

「　鍵盤の上に風景を盛る。風景の底に数字を感じる。数字の歌う声を聞く。声を形として捉える。他にもいろんなことのできる人はここにはいて、いろんな能力を生かしていろんなことをする全体を人間模様として見る人も。」

「　ここは主語の大きな世界。主語を急激に膨らませて世界を記述することで、自分も大きくなったと感じることができるのですね。いわゆるインフレーション主語宇宙。もちろん大きくなった分、構造はすかすかになります。」

「　今も回転している。回転を止めると倒れてしまう。そして、倒れたら死ぬ。だから生まれたときからずっと回転し続けている。そういう生き物なのだ。ずいぶん長い間、自分を中心に世界が回っていると彼らは考えていた。」

「　なかなかうまくいかない日々だが、考えてみれば、すでに台本があって稽古を重ねても本番がうまくいくとは限らないのだ。台本も稽古もないぶっつけ本番がうまくいくはずがない。今生は本番だと思わないことにしよう。」

「　必要があって部屋の隅からＶＨＳのテープを発掘。その近くから再生装置も出てきたが、再生されたのは砂嵐とあの世からのようなかすかな声だけ。それでもこいつの脳内でなら再生できるかも、と私も再生されたらしい。」

「　限定された空間と時間内ではあるが、そう決めてそう思い込めばそうなることができる。つまり生きていると思い込めば生きていられる。もっとも、思い込むのにも技術は必要。これからの世界でいちばん必要まな技術かも。」

「　ほぼ、としたのか、数え方で字数が変わるからで、実際には百枡です。まあ細胞みたいなものかな。一枡目は空白。「、」にも「。」にも一枡使う。百枡目だけは文字といっしょに「。」も入る。私はそういう生き物です。」

「　失うものなど無い者だらけになったから、その対策として失うものなど無い者の間に上下を作る。失うものなど無い者を無くすための対策ではなく。失うものなど無い者たちから、さらにエネルギーを取り出すための対策。」

「　こちらからすればあれは穴であり、あちらからすればこちらは穴である。あちらとこちら、同時に存在することはできず、いずれかが存在できるとき、もう片方は穴なのだ。そういう関係性しか結べないものは以外に多い。」

（北野勇作『ありふれた金庫』より）

「　自分の身体を直接見るんじゃなくれ、鏡に映った自分を見ること。専制によく言われたな。自分の外から自分を観るのが学習にはいちばんいいんだ、って。なるほど、それでぼくは作られたのか。もうひとりの自分として。」

「　台本がついに最後まで出来た。さっそく覚える。なんだかんだ言っても、まず憶えなければ話にならない。なのに、どうやら誰も憶えていないようなのだ。世界に台本があることから教えなければいけないらしい。奴らに。」

「　この宇宙の本質が弦の振動であることは、ある種の学界の奏者にとっては当たり前すぎるほど当たり前のことだが。楽器の種類によってその捉え方はだいぶ違っていたりして、しかしもっと大きく捉えるとやはり同じか。」

「　急いで書き写す。消される前に書き写さねば。そんなふうに自分で自分を書き写すことで、我々は自分というものを継続してきた。それが当たり前のことなのだとずっと思っていたが、そうではない生き物もいるらしいな。」

「　同じ場面を何度も何度も繰り返している。これから起きることはもうわかっているから、次はもっとうまくいくようにと色々やってみる。そして、皆そうしているらしいと気がつく。なんだよ。全員で時をかけているのか。」

「　少しずつ入れ替えていき、最終的にまったく違う自分になれるらしい。だいぶ変わってしまっただろうな。昔のあなただった部品も保管してますが、持って帰られますか？　いや、それはいい。皆さん、そうおっしゃいます。」

「　来週から人類は長いお休みに入るので、やりたいことは今のうちにやっておくように。えっ、休みになってからやろうと思ってたんですけど。いや、そういうのじゃないから。そういうのじゃなければ、どういうのなのか。」

「　月は出たと聞いて外に出たら、なるほど本当に出ている。ずっと昔に壊したはずなのに、なぜかまだ人間には見えるのだ。でも機械には見えないそうだから、やはりあれは幽霊か。あるいは機械たちが嘘をついているのか。」

（北野勇作『ありふれた金庫』〜高山羽根子「解説」より）

「あらゆるテキスト表現で、文字数はとても大切な意味を持っている。俳句や短歌、五言絶句みたいな定型詩はずっと昔からあるし、なぜか現代の私たちも、四百字詰め原稿用紙換算でお仕事をもらっている。
　著者の北野氏は落語や芝居にかかわっていて、自身が俳優でもあるため、自作の朗読イベントを開催している。彼はあるイベントで「四百字詰め原稿用紙一枚は朗読するとだいたい一分くらいだから、そういうふうに巧くできているんじゃないか」と話していた。文字数と発話の身体性との関係は、彼の作品を語る上での大きなポイントのひとつかもしれない。
　もうひとつのポイントはＳＮＳという媒体だ。この本は、彼のツイッターカウントで発表されてきたもののち、彼自身が「ＳＦ」だと思った作品を掲載している。ツイッターは一記事が百四十文字以内に制限されている。これもきっと、なにかの身体的な約束ごとに関連しているのだろう。たとえばスマートフォンをスクロールしなくても視界にとらえることができる範囲の文字数だとか。
　一連の作品はこれまで、キノブックスから『じわじわ気になる（ほぼ）１００字の小説』シリーズ三冊、ハヤカワ文庫ＪＡから『１００文字ＳＦ』が刊行されている。どれも、一ページの中に一作、つまりぱっと見た範囲に書き出しからお終いまで物語が存在する。この「視界に最初から最後まである」ということが、きっとすごく重要なのだ、
　北野氏はショートショートの作家ではない、と私は思っている。第四回日本ファンタジーノベル大賞の優秀賞『昔、火星のあった場所』という長編作品でデビューしているし、第二十二回日本ＳＦ大賞受賞の『かめくん』など、長編の名作を何作も著している。ただその一方で、短編の作品もほんとうに嬉しくなるほど素晴らしいものがいっぱいある。その魅力はでも、やっぱり、長編作家の持つスケール感に由来しているのだと感じている。
　そのスケール感が、視界の中に収まるほどの矩形に詰まっているっていう種類の奇跡。どうぞ、ぞんぶんに楽しんでください。」

◎北野勇作
1962年、兵庫県生まれ。
1992年、デビュー作『昔、火星のあった場所』で第4回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞、『天動説』で第1回桂雀三郎新作落語〈やぐら杯〉最優秀賞を受賞。2001年には『かめくん』で第22回日本SF大賞を受賞。『どーなつ』『北野勇作どうぶつ図鑑』『どろんころんど』『きつねのつき』『カメリ』『レイコちゃんと蒲鉾工場』ほか著書多数。
ライフワークとも言える【ほぼ百字小説】は、Twitterで毎日発表され続けており、その数は4000を超える。

☆mediopos-3111　　2023.5.25

寺田寅彦に「珈琲哲学序説」という随筆がある

寺田寅彦はよくコーヒーを飲みに出かけるものの
「コーヒーに限らずあらゆる食味に対しても
いわゆる「通」」ではないのだという

ここで語られているのは
コーヒーをなぜ飲むのか
コーヒーにはどのような作用があるのか
その作用が芸術や哲学や宗教と
どいう点で類似しまた相違しているのか
といったことについての
「コーヒー漫筆」あるいは「コーヒー哲学序説」である

以下その論を追ってみる

寺田寅彦は研究が行き詰まったときなどに
コーヒーを飲むことで
「解決の手掛かりを思いつ」いたりもすることから
「もしやコーヒー中毒の症状ではないか」とも思うが
「飲まない時の精神機能が著しく減退」する
というほどではないので
「この興奮剤の正当な作用」であろうととらえている

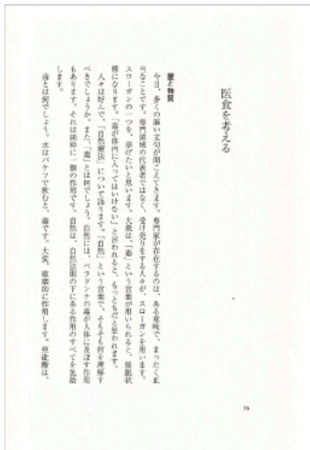
興奮剤として働いた体験も一度だけあるといい
そのことで「これは恐ろしい毒薬であると感心もし、
また人間というものが実にわずかな薬物によって
勝手に支配されるあわれな存在であるとも思った」と
冷静にコーヒーの作用を反省的に分析し

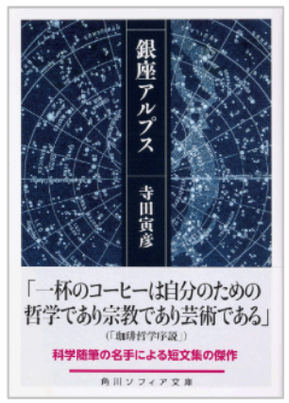
スポーツ好きが観戦中に興奮状態に入ったり
宗教に熱中した人が恍惚状態を経験したりするように
「禁欲主義者などの目から見れば
真に有害無益の長物かもしれない」としながら

「芸術でも哲学でも宗教でも
実はこれらの物質とよく似た効果を
人間の肉体と精神に及ぼすもののように見える」という

とはいえ宗教は酒に似て
「往々人を酩酊めいていさせ官能と理性を麻痺させ」
「人を殺す」ような犯罪にもつながるような
「信仰的主観的」なところがあるが

コーヒーや哲学で「犯罪をあえてするものはまれ」であり
「官能を鋭敏にし洞察と認識を透明に」し
「懐疑的客観的」なところがあり





▪寺田寅彦「珈琲哲学序説」（寺田寅彦『銀座アルプス』 角川ソフィア文庫　2020/5）
▪ルドルフ・シュタイナー「医食を考える」
（シュタイナー（西川隆範訳）『人智学から見た家庭の医学』（風濤社2003/9）

「これによって自分の本然の仕事が
いくぶんでも能率を上げることができれば、
少なくも自身にとっては
下手へたな芸術や半熟の哲学や生ぬるい宗教よりも
プラグマティックなものである」ともいう

また芸術的な側面との比較でいえば
「芸術という料理の美味も時に人を酔わす」が
「成分によって芸術の分類ができるかもしれない」といい
「コカイン芸術やモルフィン文学が
あまりに多きを悲しむ次第である」ともしている

この随筆の主な内容は以上の通りで
コーヒー好きの語る
その効用の「プラグマティックな」側面についての
「珈琲哲学」のさわりといったところ

とくに意外な観点もないけれど
これが語られたのは昭和八年で
この時代に日本で論じた人は稀だったのではないか

ちなみにコーヒーの作用について
ルドルフ・シュタイナーは一九〇六年頃の講演で
次のように語っていて
寺田寅彦が語ったことを裏づけていたりもする

「コーヒーが胃に引き起こすのと同じものを、
みなさんは論理的に思考するときに、
頭のなかに引き起こします。」

「コーヒーは首尾一貫した思考を促進しますが、
人間はコーヒーの作用に依存するようになります。
コーヒーは強制的に作用するのです。」

「コーヒーをたくさん飲むと、
首尾一貫した思考をしようとするとき、依存的になります。
自立して思考しようとするなら、
下部に作用するものから自由にならなくてはなりません。
自立のなかに、心魂から発する力を形成しなくてはなりません。
適切な訓練をすると、胃も順調になってくるでしょう。」

「考える」といっても
胃に作用させることで考えさせられるとき
そのことで胃は不調になってしまうということだろう
たしかにコーヒーを飲み過ぎると胃が不調和になる

寺田寅彦の語る通り
コーヒーには「首尾一貫した思考を促進」する働きがあるが
いわばコーヒーによって強制的に
思考させられるようになるため
それに依存しすぎないように
適切なバランスを保つ範囲で嗜むのがよさそうだ

▪寺田寅彦「珈琲哲学序説」
　（寺田寅彦『銀座アルプス』 角川ソフィア文庫　2020/5）
▪ルドルフ・シュタイナー「医食を考える」
　（シュタイナー（西川隆範訳）
　『人智学から見た家庭の医学』（風濤社2003/9）

（寺田寅彦「珈琲哲学序説」より）

「自分はコーヒーに限らずあらゆる食味に対してもいわゆる「通」というものには一つも持ち合わせがない。しかしこれらの店のおのおののコーヒーの味に皆区別があることだけは自然にわかる。クリームの香味にも店によって著しい相違があって、これがなかなかたいせつな味覚的要素であることもいくらかはわかるようである。コーヒーの出し方はたしかに一つの芸術である。

　しかし自分がコーヒーを飲むのは、どうもコーヒーを飲むためにコーヒーを飲むのではないように思われる。宅うちの台所で骨を折ってせいぜいうまく出したコーヒーを、引き散らかした居間の書卓の上で味わうのではどうも何か物足りなくて、コーヒーを飲んだ気になりかねる。やはり人造でもマーブルか、乳色ガラスのテーブルの上に銀器が光っていて、一輪のカーネーションでもにおっていて、そうしてビュッフェにも銀とガラスが星空のようにきらめき、夏なら電扇が頭上にうなり、冬ならストーヴがほのかにほてっていなければ正常のコーヒーの味は出ないものらしい。コーヒーの味はコーヒーによって呼び出される幻想曲の味であって、それを呼び出すためにはやはり適当な伴奏もしくは前奏が必要であるらしい。銀とクリスタルガラスとの閃光せんこうのアルペジオは確かにそういう管弦楽の一部員の役目をつとめるものであろう。

　研究している仕事が行き詰まってしまってどうにもならないような時に、前記の意味でのコーヒーを飲む。コーヒー茶わんの縁がまさにくちびると相触れようとする瞬間にぱっと頭の中に一道の光が流れ込むような気がすると同時に、やすやすと解決の手掛かりを思いつくことがしばしばあるようである。
　こういう現象はもしやコーヒー中毒の症状ではないかと思ってみたことがある。しかし中毒であれば、飲まない時の精神機能が著しく減退して、飲んだ時だけようやく正常に復するのであろうが、現在の場合はそれほどのことでないらしい。やはりこの興奮剤の正当な作用でありきき目であるに相違ない。

　コーヒーが興奮剤であるとは知ってはいたがほんとうにその意味を体験したことはただ一度ある。ぎんざへ行ってそのただ一杯を味わった。そうしてぶらぶら歩いて日比谷へんまで来るとなんだかそのへんの様子が平時とはちがうような気がした。公園の木立ちも行きかう電車もすべての常住的なものがひどく美しく明るく愉快なもののように思われ、歩いている人間がみんな頼もしく見え、要するにこの世の中全体がすべて祝福と希望に満ち輝いているように思われた。気がついてみると両方の手のひらにあぶら汗のようなものがいっぱいににじんでいた。なるほどこれは恐ろしい毒薬であると感心もし、また人間というものが実にわずかな薬物によって勝手に支配されるあわれな存在であるとも思ったことである。

　スポーツの好きな人がスポーツを見ているとやはり同様な興奮状態に入るものらしい。宗教に熱中した人がこれと似よった恍惚状態を経験することもあるのではないか。これが何々術と称する心理的療法などに利用されるのではないかと思われる。

　酒やコーヒーのようなものはいわゆる禁欲主義者などの目から見れば真に有害無益の長物かもしれない。しかし、芸術でも哲学でも宗教でも実はこれらの物質とよく似た効果を人間の肉体と精神に及ぼすもののように見える。禁欲主義者自身の中でさえその禁欲主義哲学に陶酔の結果年の若いに自殺したローマの詩人哲学者もあるくらいである。映画や小説の芸術に酔うて盗賊や放火をする少年もあれば、外来哲学思想に酩酊して世を騒がせ生命を捨てるものも少なくない。宗教類似の信仰に夢中になって家族を泣かせるおやじもあれば、あるいは干戈を動かして悔いない王者もあったようである。

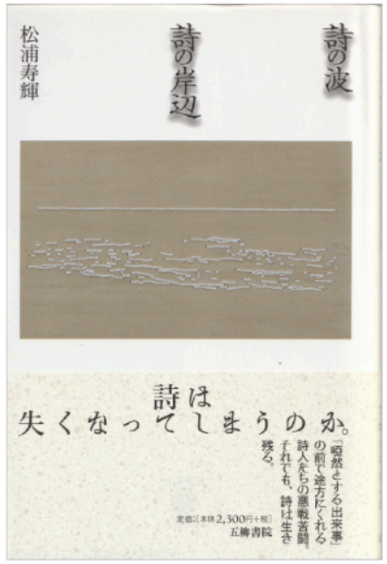
　芸術でも哲学でも宗教でも、それが人間の人間としての顕在的実践的な活動の原動力としてはたらくときにはじめて現実的の意義があり価値があるのではないかと思うが、そういう意味から言えば自分にとってはマーブルの卓上におかれた一杯のコーヒーは自分のための哲学であり宗教であり芸術であると言ってもいいかもしれない。これによって自分の本然の仕事がいくぶんでも能率を上げることができれば、少なくも自身にとっては下手へたな芸術や半熟の哲学や生ぬるい宗教よりもプラグマティックなものである。ただあまりに安価で外聞の悪い意地のきたない原動力ではないかと言われればそのとおりである。しかしこういうものもあってもいいかもしれないというまでなのである。

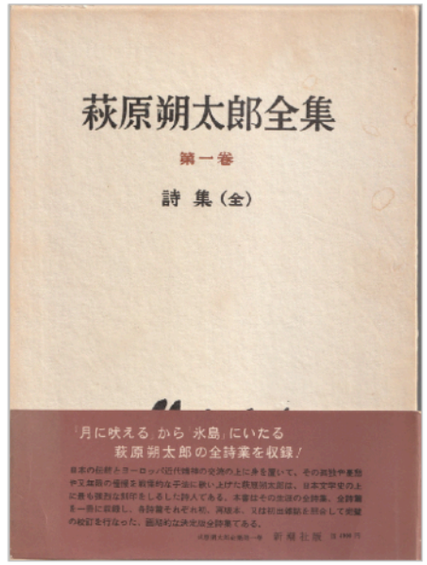
　宗教は往々人を酩酊させ官能と理性を麻痺させる点で酒に似ている。そうして、コーヒーの効果は官能を鋭敏にし洞察と認識を透明にする点でいくらか哲学に似ているとも考えられる。酒や宗教で人を殺すものは多いがコーヒーや哲学に酔うて犯罪をあえてするものはまれである。前者は信仰的主観的であるが、後者は懐疑的客観的だからかもしれない。

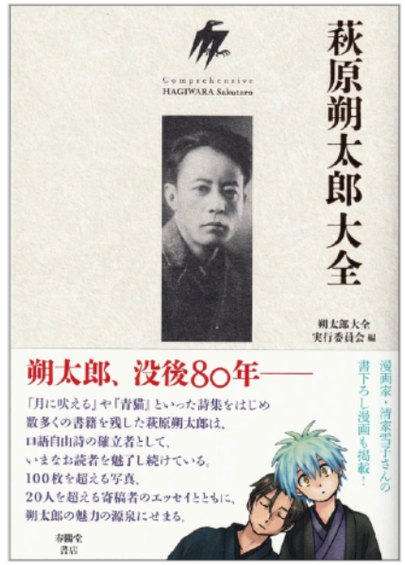
　芸術という料理の美味も時に人を酔わす、その酔わせる成分には前記の酒もあり、ニコチン、アトロピン、コカイン、モルフィンいろいろのものがあるようである。この成分によって芸術の分類ができるかもしれない。コカイン芸術やモルフィン文学があまりに多きを悲しむ次第である。

　コーヒー漫筆がついついコーヒー哲学序説のようなものになってしまった。これも今しがた飲んだ一杯のコーヒーの酔いの効果であるかもしれない。」

☆mediopos-3112　　2023.5.26







▪朔太郎大全実行委員会 (編)『萩原朔太郎大全』（春陽堂書店 2022/11）
▪松浦寿輝『詩の波 詩の岸辺』（五柳叢書　五柳書院　2013/11）
▪『萩原朔太郎全集〈第1巻〉』（新潮社　昭和五〇年二月　八刷）

二〇二二年は
口語自由詩の確立者であり
『月に吠える』や『青猫』といった詩集などで知られる
萩原朔太郎没後八〇年ということで
（一八八六年生誕／一九四二年没する）
『萩原朔太郎大全』なるものが編集されている

「朔太郎と出会う」「朔太郎を読む」
「朔太郎を知る」「テーマで読む朔太郎」
「朔太郎を深く知る」「資料編」からなり
萩原朔太郎について概観ができるものとなっているが

そのなかで「はじめに」を詩人・作家の松浦寿輝が
朔太郎大全実行委員会の編者の一人として書いている

松浦寿輝は一〇年ほど前に
『詩の波 詩の岸辺』という
現代詩に関する講演や講義を刊行しているが
そのなかにも「萩原朔太郎の天才」という章があり

そこで「萩原朔太郎こそまさに、
わたしがほとんど最初に出会った詩人」であり、
萩原朔太郎との出会いがあり。そこから
近代詩・現代詩というものに目が開かれた」
そんな重要な詩人として位置づけている

「重要な詩人」であるというのは
松浦寿輝個人としてだけではない
まさに近代詩・現代詩を開いた最重要な詩人としてである

没後八〇年ということもたしかにあるのだろうが
松浦寿輝が萩原朔太郎をクローズアップしようとしたのは

『詩の波 詩の岸辺』の帯に
「詩はなくなってしまうのか」
という危機感が表現されているように
短歌や俳句がそれなりの仕方で
定着している現状とは異なり
孤立状態にあるともいえる
「現代詩」を「啓蒙」する必要がある
という切なる思いからでもあるだろう

なぜ現代詩は読まれないのか
あるいは現代詩は理解されずにいるのか

現代詩の歴史は百年そこそこしかないというのもあるが
五・七の定型にとらわれない
伝統的な抒情の意識にもレトリックにも寄りかからない
という「「ない」で定義される」ような
「否定的・消極的な徴」しかもたない
ということがあり
それが「現代詩というジャンルそれ自体に根ざした
「業」みたいなもの」ともなっている

「自由律、自由詩で、形式から解放され」はするものの
「何でもやっていいんだよというふうに言われると、
じゃあ何をやっていいのかわからない、
あるいは何をやってみても、単なる言葉の切れ端の
無秩序な垂れ流しみたいなことでしかない
というようなことになったりもする」

そして「詩が詩であること」を保証するものが
「行分けという形式的指標」しかなくなってしまう

しかも行分け形式をもたない詩もあるわけで
詩か詩じゃないかという明確な差異はなく
「詩を読む」ということそのものが
よくわからないというのが現実であり
そのためにますます
現代詩は読まれなくなってしまっているのだろう

現代詩に限らず
俳句や短歌そして小説さらには古文や漢文など
教育上「文学国語」とされ
「論理国語」とに分けられてしまった
日本語という現状があるが

おそらくそのように分けられたのは
「役に立つ」という実用的な日本語か
「役に立たない」といういわば美的機能をもった日本語か
ということだったのではないかと思われる

「役に立つ」言葉がＡＩに代替され得るのだとしたら
それしか学ばない日本語話者は
美的機能を持った言葉を理解できない存在と化してしまう

その意味では
現代詩というのは
そんな美的機能の可能性を最大限駆使し得るジャンルであり
日本語がますます貧困になりつつある今
それを阻止するためにはまず
現代詩のはじまりをつくったとさえいえる
萩原朔太郎へと目を向けることがきっかけになるのではないか

でき得ればそこからさらに現代詩の困難な営為へと
理解が深まっていくよう方向づけられれば･･･

▪朔太郎大全実行委員会 (編)『萩原朔太郎大全』（春陽堂書店 2022/11）
▪松浦寿輝『詩の波 詩の岸辺』（五柳叢書　五柳書院　2013/11）
▪『萩原朔太郎全集〈第1巻〉』（新潮社　昭和五〇年二月　八刷）

（『萩原朔太郎大全』〜松浦寿輝「はじめに　宿命の詩人」より）

「　　そうだ！　宿命からの闘争だ！　（「絶望の逃走」）

　萩原朔太郎の宿命とは何だったのか。近代と伝統のはざま、「都会」と「田舎」のはざま、西欧と日本のはざま、無意識と理性のはざま、魂と身体の、聖性と賤性の、美徳と悪徳のはざま、そうしたあまたの二元論のはざまで引き裂かれ、そのどちらの項にも与することができないまま、飢餓に耐えかねて自分自身の足を食べずにはいられない蛸のように、それらのディレンマじたいを糧として詩を書きつづけなければならなかったことだ。

　みずから選んだ途ではなかった。それは悲運によって、あるいは恩寵によって、わが国の近代史の、そして近代詩史の、ある決定的な一点に立つことになった朔太郎が、否応なしに引き受けなければならなかった宿命である。もちろん彼はそこから「逃走」したかった。そんな宿命をやすやすと担いきることのできるような膂力の持ち主など、誰一人いりはずもないからだ。しかし、この逃走はむろん挫折せざるをえない。

　　日はすでに暮れようとし
　　非常線は張られてしまった
　　・・・
　　ああ逃げ道はどこにもない
　　おれらは絶望の逃走人だ

　宿命を逆らいようのない天命と思い定め、懼れも疑いもなく唯々諾々とそれに従おうとする者に、宿命を完遂する力はじつはない。宿命を厭悪し恐怖し呪詛し、それから逃れようとする必死の試みに生涯を捧げる者のみが、かえってその宿命の途を果ての果てまで歩き通せる。藝術家の仕事において、宿命はそんな異様な逆説のかたちで立ち現れる。『月に吠える』から『青猫』へ、さらに『氷島』へ、変貌に次ぐ変貌を重ねつづけた朔太郎の詩は、この逆接の、そのつど新しくまためざましい具現の連鎖にほかならない。絶えずよろめきつつ、行き当たりばったりのように遂行された彼の決死の遁走は、後代のわれわれの目に、ただこのひと筋しかなかったとしか思われない。必然的にして宿命的な軌跡を描いていると映る。

　朔太郎からこの宿命のバトンを受け取って走り出す、二一世紀の詩人の出現を言祝ぐ日が、遠からず訪れるに違いない。わたしは密かにそう信じている。」

（松浦寿輝『詩の波 詩の岸辺』〜「I　現代詩ーーーーその自由と困難」（講演）より）

「日本では俳句、短歌という非常に有力な詩の器が、ずっとまだ生き延びていて、たくさんの愛好者がおり、またご存じのように新聞などでも毎週のように、俳句や短歌の投稿欄というものがあって、賑わっているわけです。さらに天皇も短歌を詠むというような古来の慣習もあり、伝統的な詩型としての五七五、あるいは五七五七七という形が今日でもなお広く愛好され、隆盛を極めているという状況があるわけです。

　実は現代詩という場合の「現代」とは何かと言いますと、とりあえず短歌でも俳句でもない詩を指しているというふうにご理解いただければいいと思います。つまり五七五のリズムに囚われずに詩を書こうという意識を、日本の詩人が、歴史上のある時点で持ち始めたわけです。これはかなり新しい出来事であって、ほんのここ一世紀ほどのことにすぎません。だいたいのところ一八八〇年代ぐらいからというふうに言っていいかもしれません。では五七五でなく、どういう詩なのかと言いますと、これはわたし自身の書いてきた詩もそうなんですけれども、「ひさかたのひかりのどけきはるのひに」というような。日本語を母語とする者であれば誰の耳にも快く響く五七のリズムを使わずに、「別の」リズム、「別の」メロディー、「別の」音楽を日本語で作ることはできないのかと、そういう模索から始まったものが現代詩であるわけです。」

「これはほんのまだ百年ぐらいの歴史しか経っていないわけです。つまり、現代詩というのは非常に新しい詩のジャンルなんですね。万葉集以来の日本の定型詩の歴史から考えると、ほんの生まれたばかりの詩のジャンルと言っていい。ともあれ、この詩のジャンルが生まれたことで、わたしも詩を書くので、われわれという言いかたをさせていただきますけれども、われわれ日本の詩人が非常な自由を獲得したということは間違いのない事実です。では、この「自由」とはいったいどのようなものなのか。

　まず、形式の桎梏からの自由ですね。五七五という音律に言葉をいちいち当て嵌めなくてもいいんだ、と。
（・・・）
　しかし、もっと重要なのは、こうした音律の自由というものが、精神の解放と結びついていたということです。」

「というわけで、伝統の桎梏から解放されて何でも自由に語れるようになった、五七の音律の規範から解放され封建的なしがらみからも解放されて、何でも書けるようになったとしても、しかしそれがはたして良いことなのか悪いことなのか、これは一概には言えないことでもあるわけです。実はそのあたりに、今この現代詩というジャンルが陥っている困難と言いますか、袋小路みたいな状況がある。五七から離れた詩というのはなかなかやはりうまく逝かないのかなあというようなペシミズム、あるいは絶望感みたいなものが、自由律の詩を書いている詩人たちの間にそこはかとなく漂ったりしているというのが、実は現在の状況なんですね。

　ここには一首の逆接があるわけで、自由律、自由詩で、形式から解放されるのだと言うけれど、自由になるということは、今まで書けなかったことが何でも書けるようになり、旺盛な文学生産が可能になったかというと、実はそうではない、あまりそうは言えないところがある。これは文学のパラドックスみたいなもので、何でもやっていいんだよというふうに言われると、じゃあ何をやっていいのかわからない、あるいは何をやってみても、単なる言葉の切れ端の無秩序な垂れ流しみたいなことでしかないというようなことになったりもするわけです。そこに非常な困難がある。」

「詩が詩であることを何によって保証されるかというと、これは行分けという形式的指標だけになってくるわけです。

　何でも自由に書いても良いという自由な詩が、かえって一種の閉そく感に追いやられるという逆接があるというお話を、先ほどしたわけですけれども、自由に何でも書いて良いということになると、じゃあ、それが詩であるということは何によって証明されるのか。単に形式的に、ぽきぽきと行が分けられてゆくということしかないんじゃないか。そういうペシミスティックな認識が生まれることにもなるわけです。

（・・・）

　現代詩が生まれた直後から、現代詩を詩として認識するための徴というのは、実は何もなかったわけです。五・七の定型にとらわれない、これがいちばん大きい徴ですね。それから伝統的な抒情の意識にもレトリックにも寄りかからないということもある。しかしこういうのはみんな「ない」で定義される。つまり否定的・消極的な徴でしかない。ポジティヴには現代詩はどう定義されうるのか。単に行分けの言葉で成り立っているという、それだけのことしか言えないのかもしれないーーーーそういうアイロニカルな自嘲というか、徒労感ないし疲労感が、現代詩には、その誕生以来、ずっとまとわりついてきたわけでし。現代詩というジャンルそれ自体に根ざした「業」みたいなものと言ってもいい。」

「ここ百年ほどの日本の現代詩の歴史とは、そういう「引き裂かれ」の歴史だったと言ってもいい。その「引き裂かれ」の中に日本の現代詩人の戦いはあり、その熾烈な闘いは今もって現在進行形で継続しているわけです。」

（松浦寿輝『詩の波 詩の岸辺』〜「II　詩をどう読むか」（特別授業）より）

「詩の中でも特に、「日本の現代詩は難しい」という通念のようなものがあります。皆さんの中にも、おそらく詩になじみのある方は少ないのではないでしょうか。しかし、わたしが思うに、詩は難解だとかわかりやすいだとか、そんなことは別に何でもないんで、単にそてを読み、読者一人ひとりの好みや感性に基づいてそこから何かを受け取ればいいだけのことなのです。「わかる」必要などないのです。詩の読み方に正解・不正解なんてありません。」

「詩の言葉はなんの役に立つのでしょうか。実用的な視点でいえば、なんの役にも立ちません。言葉の最も大きな実用的機能は、いうまでもなくコミュニケーションです。なんらかのメッセージを伝達し、それが意味を伴って相手に届けばそれで言葉の役割は終わります。ただし、言葉の機能はそれだけではない。

　役に立つ、立たないということとは別に、人間に喜びをもたらす、あるいは悲しみや怒り、複雑な感情をかき立てるための言葉というものがあります。意味を伝達するだけではなく、言葉が人間の鑑賞に堪え得る、ある「美しい形態」をとってそこに存在し、紙の上に、記憶の中に、心のひだの間にとどまり続けるということがあるわけです。繰り返し眺めたり、読んだり、口ずさんだりすることで、そのときの年齢に応じて読者の心にさまざまなエモーションをかき立てる。そういう言葉こそが詩なのだと思います。

　日本の場合、詩といえば江戸時代までは短歌と俳句でした。ただし、五・七・五でつくり出された日本の詩歌は、十七文字や三十一文字で完結するほんの短い詩型でしかない。ですから、そこに盛り込める内容には限界があります。微妙なニュアンスを持つ思いや高度に抽象的な思考を表現することも不可能です。しかし、近代に入って社会が複雑化し、人々の心にさまざまな陰影を伴った思考や感情が生まれるようになったとき、五・七・五の形式にとらわれない自由律が書かれはじめるようになったのです。」

「現在、情報空間はめまぐるしい勢いで進化しています。そういった意味では、詩は大変古風な、いわば次代に乗り遅れたジャンルかもしれません。しかし、やはり紙とペンの触覚的な触れ合いこそが、詩の持つ最終的な魅力であり、日本語の一つ一つの言葉が持つ色や匂いにじかに触れるという体験を可能にしてくれるものが詩だと思うのです。その体験がなくなってしまうと、日本語という言語自体がどんどんやせ細り、貧しいものになっていってしまうのではないか。そういう意味で、若い皆さんにも、ちょっと縁遠い感じがするかもしれませんが、何十年も前に書かれた近代詩・現代詩の名作にぜひ親しんでいただきたいと思います。」

☆mediopos-3113　　2023.5.27

初夏になると
鳥や虫そして樹木や花などを観察しようと
野山へ河口へと出かける機会が増える

適度に歩きながら
深呼吸できるのがなによりなのだが
観察するものが多岐に渡ると
それなりに集中力も必要で忙しくもある

とはいえしばらく見られなかったものたちに再会できたり
はじめて出会えるものなどがあると心がはずむ

そんななかでもこれまで
ほとんど見つけられずいにいたのが
『身近な鳥のすごい巣』でも書かれているように
「鳥の巣」である

じっさい「過去の書物をひも解いてみても、
その重要性、かつ面白さを表記したものは
ほとんどないといっても過言ではない」のだという

これまでいろいろな鳥を観察し
写真などもそれなりに撮るなどもしてきたが
「巣」を観察できたことはほとんどない

けれども本書によれば
「鳥の巣を知ることは、鳥やヒナのことを知るだけでなく、
その鳥の住む環境を知ること、周囲の生物との関係、
さらに人が生きるうえで欠かすことができない家や服など、
人の暮らしとの関係を知ることにもつながるだけでなく、
本能とは何なのかという哲学的なことまで教えてくれる」という

本書ではとても見つけにくく観察の難しい鳥の巣について
「鳥の巣とはなにか？」からはじまり
「なぜ、鳥は「鳥の巣」をつくるようになったのか？」
「どうやって鳥は「鳥の巣」をつくるのか？」
「なぜ「鳥の巣」は今まで人に知られていなかったのか？」
といったことについてわかりやすく説明してくれているほか

「家につくる巣」「木につくる巣」
「穴の中や隙間につくる巣」「やぶの中や地上につくる」
「水辺につくる巣」などについて
それぞれの鳥の生態を含め興味深く
コンパクトにまとめられている

新書一冊にこれだけの内容が収められているのはうれしい

ちなみに先日河口に鳥の観察にでかけたとき
「コチドリ」をみつけた

人もわりと通っていくような河口にできている土砂道に
まさにチドリ特有のジグザグ走りをする
小さなコチドリを見つけたので撮影していたところ
警戒音を発していた

おそらくその近くに営巣しているのだろうと思い
巣を確かめたりするようなことはしないで
あまり近づかないようにしていたのだが

本書の「コチドリ」のところを参照すると
「コチドリの巣は小石を集めただけの巣だが、
よく見るととてもきれいにできている」
「転がっていかないよう、外的に見つからないよう、
小さな米粒くらいの石をくちばしで、
一つ一つ自分の周りに集めて置いていく」とのこと

できれば今度コチドリを見つけたときには
その巣をそっと見つけられたらとも思うが
巣に近づきすぎると
営巣を放棄したりすることもあるようなので
無理な観察は避けるようにしたい
巣の観察はいろいろと難しい

ところで巣の観察というと
ここ数年来楽しみにしているのが
オトシブミとその揺籃づくりの観察である

オトシブミは１ｃｍもないような虫にもかかわらず
とても不思議な形態をしていて
色や光沢なども多種多様である

しかも「森の葉巻職人」ともいわれるように
葉を器用に切りとりまるめて揺籃を作りその中に産卵する
今年はようやく念願だった
そのプロセスの一部の観察などもできたりした

鳥の巣づくりもそうだが
オトシブミの巣作りもまた
だれにも教わらずに本能的に
それぞれの種のスタイルで行われる

『身近な鳥のすごい巣』でも
「本能の力でつくる鳥の巣。その生成の秘密を知ることは、
人も持っているであろう本能の力を
再発見することにもつながる」というが

▪鈴木まもる『身近な鳥のすごい巣』
（イースト新書Q　イースト・プレス 2023/5）
▪沢田佳久(著)・安田守(写真)『オトシブミハンドブック』
（文一総合出版 2009/5）

鳥や虫たちの本能というのは
個体のなかにその働きが内蔵されているというだけではなく
いわば「集合魂」的な見えない働きがそこにある
ということでもあるのだろうが
それがどういう働きななのかはやはりよくわからない

人間は鳥や虫たちのような本能的なありようは
もはや個体としては希薄なのだろうが
それらとは異なった別の位相で
個体ごとの多様なかたちで
なんらかの本能を有しているということはできそうである

「自由」について考えていく際にも
そうした「本能」とその発現のありようについて
考察してみるのも面白いのではないか

▪鈴木まもる『身近な鳥のすごい巣』
（イースト新書Q　イースト・プレス 2023/5）
▪沢田佳久(著)・安田守(写真)『オトシブミハンドブック』
（文一総合出版 2009/5）

（鈴木まもる『身近な鳥のすごい巣』～「はじめに」より）

「鳥の巣は、一番大切な卵とヒナが襲われないよう、発見されにくい場所につくると同時に、小さな生命を守るという任務を課せられた、鳥にとってなくてはならない重要な物だ。

　しかし、過去の書物をひも解いてみても、その重要性、かつ面白さを表記したものはほとんどないといっても過言ではない。したがって、世界中の人が鳥や鳥の巣という言葉が知っていても、本当の鳥の巣を知る人はほとんどいないというのが実状だ。」

「鳥の巣を知ることは、鳥やヒナのことを知るだけでなく、その鳥の住む環境を知ること、周囲の生物との関係、さらに人が生きるうえで欠かすことができない家や服など、人の暮らしとの関係を知ることにもつながるだけでなく、本能とは何なのかという哲学的なことまで教えてくれるものなのだ。
　恐竜が鳥へ進化したこと、恐竜が絶滅し、鳥が今の世界に生きていることなど、今までの科学では解明できていなかったことも、鳥の巣から知ることができるのである。

　よく「鳥が先か、卵が先か」と言われるが、鳥の巣が先なのである。

　親にも学校の先生にも教わることなく本能の力でつくる鳥の巣。その生成の秘密を知ることは、人も持っているであろう本能の力を再発見することにもつながることだ。」

（鈴木まもる『身近な鳥のすごい巣』～「おわりに」より）

「今回この本で大事なことは何かというと、鳥は誰にも教わらず、それぞれの鳥の巣をつくっているということだ。親に教わるわけでも、学校で指導されるわけでも、本で読んだ知識なわけでもない。ある時期になると、自然に体が動き出し、南の国へ向かったり、巣材集めを始めたり、異性を求めて行動を始めるのだ。生きようとする本能の力が鳥の巣をつくらせるのだ。何が流行っているからとか、高く売って金を儲けようとか、そんな雑念は微塵もない。めんどうくさいから他の人にやらせるということもない。何日間もの時間をかけた、これから生まれる卵とヒナの安全のための純粋無垢な行動なのだ。そんな力は同じ生命体として人間も持っている力なのだ。

　今まで見てきたように、多様な環境に適応して暮らしているため、鳥によって居心地の良い場所も形も違い、巣の形は色々になる。そのような鳥の巣を人の世界にあてはめると、それぞれの職業にあたるのだと思う。人それぞれの個性や体質などから、それぞれにあった仕事を職業にしているのだ。（･･･）

　鳥が多様な環境に適応して、それぞれの巣をつくるように、人それぞれ生きる場も違うし、やることも違って当然だ。そして、それぞれやっていることが、生命を育てることにつながっているのだ。」

（鈴木まもる『身近な鳥のすごい巣』～「六章　水辺につくる　すごい巣／コチドリ」より）

「コチドリは目の周りの黄色いアイリングが目立つ、日本最小のチドリ科の鳥である。
（･･･）
　コチドリの巣は小石を集めただけの巣だが、よく見るととてもきれいにできている。白い石やグレーの石、枯草なども混ざっている。まるで京都の石庭のような巣だ。転がっていかないよう、外的に見つからないよう、小さな米粒くらいの石をくちばしで、一つ一つ自分の周りに集めて置いていく姿はなんともかわいらしい。」

「簡単な巣に見えるが、コチドリにとっては意味のある巣だ。それは、卵のヒナの模様が関係している。

　卵やヒナだけを単独で見ると別に何でもないのだが、巣のそばにいると途端に見えなくなる。まさに、だまし絵のような配色だ。卵の形も先端がとがって中心を向くので、四つの卵がぴったりひとまとまりになることや、巣に外敵が接近し親が警告の泣き声をあげると、ヒナはじっと動かなくなるため、さらに見つかりづらい。」

「石を集めただけの巣だから、めんどうくさがりとか、頭が悪いのではない。コチドリが住むこの環境では。回りながら小石を集めるということが一番安心できる空間になるから小石を集めた巣になるのだ。」

（『オトシブミハンドブック』より）

「初夏、すべてが輝いて見える新緑の季節に雑木林の縁を歩いていると、円筒型の葉の巻物が落ちていることがある。運がよければ、近くの張り出した枝先に巻物のつくり主である、体長１ｃｍほどの小さな甲虫オトシブミを見つけるかもしれない。

　オトシブミは、ひたすら実直な仕事を長時間積み重ねることでようやく１つの葉巻物をつくりあげる。完成した巻物は切断され、地面へと、最初に見つけた巻物のすぐ近くにポトリと落ちる。なるほどと思わずうなる。」

※「オトシブミの揺籃づくり」の説明より（ヒゲナガオトシブミの例）

①葉を調べ、選び、歩いてサイズを計る
②葉の根元近くを裁断する
③主脈を中心にかみ傷を入れる
④折り線をつけ、２つ折りにする
⑤先端から少し巻く
⑥口吻で穴をあけ産卵器を差し込んで産卵する
⑦葉の縁を折り込みながら円筒形に巻いていく
⑧折り返してとめ完成
⑨切り落とす

○鈴木まもる『身近な鳥のすごい巣』【目次】

はじめに

一章　鳥の巣とはなにか？
一　なぜ、鳥は「鳥の巣」をつくるようになったのか？
二　どうやって鳥は「鳥の巣」をつくるのか？
三　なぜ「鳥の巣」は今まで人に知られていなかったのか？

二章　家につくる　すごい巣
スズメ/ツバメ/コシアカツバメ/ムクドリ/セグロセキレイ

三章　木につくる　すごい巣
メジロ/ヒヨドリ/キジバト/カワラヒワ/エナガ/サンコウチョウ/サンショウクイ/ハシブトガラス

四章　穴の中や隙間につくる　すごい巣
アオゲラ/フクロウ/カワセミ/ヤマガラ・シジュウカラ・巣箱/キセキレイ/オオルリ/キビタキ

五章　やぶの中や地上につくる　すごい巣
ウグイス/ホオジロ/セッカ/オオヨシキリ/モズ/コジュケイ/カルガモ

六章　水辺につくる　すごい巣
カイツブリ/カワガラス/カルガモ/オオハクチョウ/コチドリ

番外編　海外のすごい巣
セアカカマドドリ/オオツリスドリ/アフリカツリスガラ/キムネコウヨウジャク

おわりに
索引

☆mediopos-3114　　2023.5.28

川端康成の小説は
妖しい「只ならなさ」をもっている

ノーベル文学賞を受けたのは
「美しい日本の私」を描いた川端康成であって
グロテスクなまでの美しさを表現した川端康成ではない

最近になるまで
『伊豆の踊子』的な先入観が邪魔して
『掌の小説』くらいしか
しかもそれを読み飛ばすように
（偏見をもって）しか読んだことはなかったのだが
ようやく映画『眠れる美女』でその妖しさに気づき

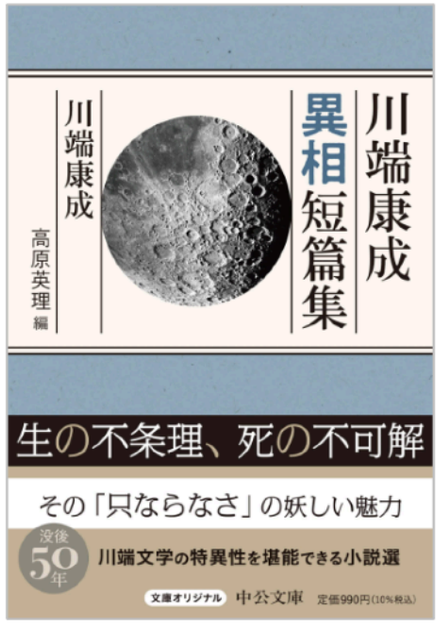
昨年高原英理編による
『川端康成異相短篇集』を読み始め
「只ならな」い川端康成の
異相の言葉に魅了されていたところ

「五十一回目の命日」にあたって刊行されたという
佐伯一麦と小川洋子の対話
『川端康成の話をしようじゃないか』で
ようやくその一端に近づけた気がしている

その異界への入口は
『川端康成異相短篇集』の最初に置かれている
「心中」という掌編（超短編）だろう
この作品は二十五歳頃に書かれた作品で
ある意味川端康成の小説世界は
ここから開示されはじめたと言えるのかもしれない

かつて梶井基次郎は「心中」にショックを受け
自身その「心中」のバリエーションを書き
比較的最近では星新一も
「あれを読んだら、睡眠薬を飲んでも、寝れなくなって、
それほど魅入られた」と絶賛しているくらいだが

なぜ川端康成がこうした
現実が異なった様相を帯びてしまうような作品を
いわば「幻視者」的に書いていったかが
佐伯一麦と小川洋子の対話を通じて垣間見えてくる



▪小川洋子×佐伯一麦『川端康成の話をしようじゃないか』（田畑書店 2023/4）
▪川端康成（高原英理編）『川端康成異相短篇集』（中央公論新社 2022/6）

両者とも『みずうみ』という作品を
「とてつもない小説」として賛を送っているが
（三島由紀夫は発表当時この作品に反撥し
中村真一郎は高く評価してたという）

川端康成もみずから引用していたことのある
一休宗純の「仏界入り易く、魔界入り難し」
という言葉に象徴されているように

「川端の魔界とは、外側にある概念なのではなくて、
インザワールド、この世の底が抜けてしまっている」
ということが腑に落ちる（佐伯一麦）

生から死の世界でもある異相の世界を
幻視していたというのではなく
むしろ生と死が通底したところから
ことばを紡いでいたということでもあるだろう

それゆえに芥川龍之介や三島由紀夫の死とは異なり
川端康成の自死には
生と死が断絶しているという印象は希薄だ

そしてその作品世界も
結末の明らかな物語世界というのではなく
たとえば未完のままの作品『たんぽぽ』も
未完でありながら未完であることを感じさせない

それは生が死によって完結するのではない
ということを象徴しているともいえそうだ

▪小川洋子×佐伯一麦『川端康成の話をしようじゃないか』
（田畑書店 2023/4）
▪川端康成（高原英理編）『川端康成異相短篇集』
（中央公論新社 2022/6）

（『川端康成の話をしようじゃないか』〜「対話I」より）

「佐伯／川端の没後二十年の時に、小川さんが「新潮」で『たんぽぽ』のことを書いていて、それを読んだ時に、この『たんぽぽ』の系譜を引き継いでいるのは小川さんじゃないかな、とすごく印象に残ったんです。『たんぽぽ』には「人体失視症」っていう、愛しているいると姿が見えないという架空の病が出てくるんだけど、小川さんの文学の中にある、ある種の欠損感覚であったりとか、そういうところが確かに川端に繋がっているような気がしました。（･･･）

小川／（･･･）欠損、つまり無い、ものの奥から何か生々しい手触りを引きずり出す。そういう点で『たんぽぽ』には特別な魅力を感じます。しかし、私の小説とどうつながっているか、簡単には説明しきればい渾とんが川端文学には内包されています。今回、まとめて集中的に川端を読んでみて、改めて捉えどころのない人だなという印象を持ちました。」

「佐伯／「非常」のできごとがあった当時は、川端は二十二歳くらいかな。自分の婚約者があろうこちょか寺の住職に犯されるとは、これは川端にとっては、世界が一変してしまうくらいのとてつもない事件だったと思う。それでいちばん頭に浮かぶのが、『掌の小説』の中の「心中」っていう作品なんです。あれはその時の川端の内面を絶対にあらわしていると思う。つまり「神からのひとつの神託」、この世に対する恐怖のようなものが川端の頭の中で花火のようにスパークして、「･････するな」「･････するな」「･････するな」というリフレインになる。あの三音は神託のリズムだと思うんだけど、最後に「呼吸もするな」という四音目が加わった時に死ぬ。この「心中」は僕は重要な作品だと思うんです。川端はあの時のことを書いているんじゃないかと思っている。あれは事が起こった二年後くらいに書いたものかな。大正十四、五年あたりの作で、おそらく二十五歳くらいで書いているんですけど、まあすごい作品ですね。

小川／妻子を捨てた夫が、手紙によって徐々に彼女たちを追いつめてゆく。日常生活のさまざまなことを一つずつ禁止していって、死に至らしめる。」

「小川／やはり川端は短編の人でしょうあ。あの『掌の小説』の異様なきらめきは、掌編小説と言われるものでも、もちろん星新一とも違うし、もしかしたらほかの誰も、書いてないものではないでしょうか。あれは「落ち」がある面白さと全然違うんですよね。

佐伯／ええ。ただ、星新一があの「心中」に関しては、あんな恐ろしい小説を自分は読んだことがない、って絶賛しているんですね。あれを読んだら、睡眠薬を飲んでも、寝れなくなって、それほど魅入られたって書いてたなあ。」

「佐伯／川端は日本美を描いたというところもあるけれど、結局のところグロテスクだよね。

小川／そうですよ！　まさにそうです！

佐伯／『みずうみ』でも銀平が道路の側溝の身を隠して少女を待ち伏せしながらすみれを囓っている、というような場面。あれ、川端は囓って見たんじゃないかなと思うな、実際。

小川／いやあ、やりかねませんね。」

「佐伯／やはり異界のようなものに触れる時に、必ず何か出て来る。だからあれがこの世のことなのか、あの世のことなのか･････。

小川／魔界の案内人というか妖精みたいなこの世ならざる者。

佐伯／まあ、魔界の一つの川端なりの描き方なのかなあ、と。

小川／「仏界入り易く、魔界入り難し」という言葉。あれはどう解釈されますか？　一休の言葉ですけれど。

佐伯／ある時期からの川端の作品は「魔界」というのが一つのキーワードにはなっているんだろうけど、僕はそれは「戦争」だと思うんです。「戦争」であり「原爆」あるいは「災厄」と言ってもいいかもしれないけれど。
（･･･）
東日本大震災があってから『みずうみ』をあらためて読んでみると、あれば「アウト・オブ・ザ・ワールド」じゃなくて、もっとこの世の底が抜け落ちてしまったような、身も蓋もない世界を書いているんじゃないかと思うようになった。

（･･･）

小川／確かに仏界にしろ魔界にしろ、私たちが生きている現実と別個に世界があるわけじゃなくて、この現実の底が抜けたところに魔界がある。現実とひと続きの中にあって、そこまで降りてみないと書けない、そういうことなんでしょうね。

佐伯／やっぱり川端は幻視者というか、現実が違った様相を帯びているところを見てしまう人だったのかもしれない。「非常」の一件もそうだったんじゃないか。梶井基次郎も川端の「心中」にショックを受けた人の一人で、まだ川端に会ってもいない頃から自分なりの解釈として「心中」のバリエーションを書いたりしたけれど、彼もまた幻視者、「見る人」だったと思うんだよね。梶井が『伊豆の踊子』の校正を引き受けたというのも大好きなエピソードたんだけど。」

（『川端康成の話をしようじゃないか』〜附　小川洋子「見えないものを見るーーーーたんぽぽ」より）

「『たんぽぽ』は未完の小説と言われている。昭和三十九年から四十三年にかけ「新潮」に連載され、ノーベル文学賞という出来事のために中断を余儀なくされたまま、結局川端の死によって、書きつがれることなく終わってしまった。
　そういう意味では確かに未完なのだが、『たんぽぽ』には、中途半端な所で放り出されるような物足りなさは感じない。形式的には未完かもしれないが、本質的には十分に完結した小説であり、小説にとっての本当の終わりとは何なのかを、考えさせてくれる。」

「未完のおかげで、見えないものを見せてもらえた。これは、終わる必要のない小説なのかもしれない。」

（『川端康成の話をしようじゃないか』〜「対話II　『掌の小説』を読む」より）

「佐伯／川端は関東大震災を千駄木の下宿の二階で受けるんだけど、すぐに上野や浅草に被害状況を見に出かけるんだよね。そして、大火災を目の当たりしたして、恐怖や不安よりも生命力をかき立てられる。芥川龍之介も興味本位で出かけて遺体をたくさん見てしまい、それが自殺に原因になったという話もある。だけど、川端は生き生きとした思いで歩いていた。「これで俺は書ける」って思ったんだね。それが川端なんだな。遺体がゴロゴロ転がっている、それを見てかえって元気が出た、というようなことを書いてるんだよ。そして、そういうことをヌケヌケと書ける人なんだな、川端は。それで戦争の後には。今度は原爆が落ちた平折魔と長崎に行って、それでまた元気を得て、前回話題にした「凍雲篩雪図」を高額な金を払って買おうと思ったりして、そういうものに出会うと、元気が出てくるんだな。（笑）

小川／自分の住んでるこの世界と地続きに死があることを実感した時に「書ける」というエネルギーを得るんでしょうか。普通、遠ざけたり見ないようなふりをしておきたいんだけど、死は手を伸ばせば届く場所にあるじゃないか、という感覚が川端文学の世界を作り上げていくんですね。
　それで思い出したんですけど、以前河合隼雄先生がおっしゃっていたことなんですが、うつの人はエネルギーがないんじゃなくて、負のエネルギーがある人なんですって。それになぞらえて言えば、川端康成という人は負のエネルギーで書いた作家かもしれません。死体が転がっているのを見れば、普通言葉を失う状態になるはずが、それで「書ける」と思うんですから。でも十六歳で最後の身内のおじいさんと分かれて、結婚しようと思って熱烈に愛した人とも別れて、というふうに、いろいろな別れと死を背負わざるを得なかった人だとすれば、死も別に大騒ぎするものでもないという、ある種達観した心境にないと耐えていけなかったのだろうとも思います。

佐伯／その「負のエネルギー」が造り出すブラックホールを自分の文学空間として、そこにこの世の現実的なものを全部引き摺り込むみたいな、そんな引力がある人だったかもしれませんね。

小川／そうか、そこもまた谷崎と対照的ですよね。好きな人ができたら奪ってでも結婚して、美味しいものをたくさん食べて、という生の塊のような谷崎と。（･･･）

佐伯／その谷崎の熱量からすると、やっぱり川端の文学っていうのはひんやりしているよ。

小川／どんなにグロテスクであっても、それはひんやりとしたグロテスクです。」

（『川端康成の話をしようじゃないか』〜「対話III　世界はまだ本当の川端康成を知らない」より）

「佐伯／川端の文学の魅力っていうのは、捕まえどこがないところだと思うんでし。だから何度でも読み返してしまう。

小川／そうですね。今回改めて読み返してみて、他に似た人は案外いないな、と思ったんです。今、川端的な作家って誰かいるのかというと、思いつかない。唯一無二の人ですよね。（･･･）

佐伯／「美しい日本の私」の中で「源氏に始まって源氏で終わり」というようなこよを言っていたけれど、川端の小説も川端で終わりだよね。」

「佐伯／川端の書いているものは、いわゆる普通に言われている小説とは全然違う、異形のものだよね。

小川／確かに。にもかかわらずノーベル文学賞を取ってしまったのか、だからこそノーベル賞をとったのか、その辺り、翻訳者のサイデンステッカーはどう考えていたんでしょうね。

佐伯／どうだろうな。でもノ–ベル賞の対象は『古都』と『雪国』とだよね。あとは『黒子の手紙』とか。だからそこには『みずうみ』のような小説は入っていない。もし『みずうみ』が訳されていたらダメだったかもしれないな。（笑）

小川／いやあ、いい小説ですけどね、『みずうみ』。

佐伯／『みずうみ』はいいなあ。

小川／とてつもない小説ですよ。」

「佐伯／川端の小説の中では、あれがノーベル賞の対象作品として評価されたのは、「川端が日本の伝統美を書いた」というような分かりやすさがあったからじゃないかな。映画化も何回かされているし。

小川／清水寺の場面で始まったりして･････もしかしたら海外では誤解されているかもしれないですね。本当の川端のことは。

佐伯／本当の川端の怖さは知らない。（笑）

小川／その怖さがまた谷崎なんかの怖さとはちょっと違うんですよね。」

「小川／川端と谷崎は対比したくなりますけど、三島と川端って対比してあまり面白いことが出てきそうにないのは不思議ですね。なぜでしょう。

佐伯／まあ三島と川端だと、三島は結末が見えたところから書き始めるっていうのに対して、川端は絶体絶命の境地から書き始めるっていう対象的なところがあるから、三島みたいに、小説を構築するというのと、川端の場合は、小説を書くという行為自体の意味が違ったんじゃないかな。小説を書いている時だけ、身も蓋もないこの世に対峙するっていう･････。

小川／自分とこの世を繋ぐ細い糸が小説だった。とにかく書いていることが紙に字を書いていることが、カウンセリングみたいな。

（･･･）

小川／紙って無ですもんね。真っ白です。真っ白い無に向き合っているということです。小説を書くということは。

佐伯／そこしか川端の世界はない、っていうことかな。無を表すっていう。

小川／そうか、無を表すために字を書いていたんだ。無と会話していたんですね。ないものと言葉を交わしていた。」

（『川端康成異相短篇集』〜高原英理「編者解説」より）

「川端康成の小説作品には多かれ少なかれ、現世界への平均的な認識に従わない、通常と異なる相を感知していると読めるところがある。しかもその只ならなさがあってこそ作品の主題が生かされている場合がしばしばある。こうした特徴が特によく発揮された作品を集め、一冊とした。これらを異相の短編と呼んでみたい。
　よく知られているためここには入れなかったが、たとえば『みづうみ』『眠れる美女』『片腕』などはそれぞれ別様に「只ならぬ」世界が展開していると言っても否定する人はいまい。」

「かつて私は、川端の『伊豆の踊子』を知ったさい、自身の未熟さもあって、それほどの感銘をもたなかったのだが、あるとき、『掌の小説』中でもとりわけ短い『心中』を読み、そこで説明の難しい恐るべき異変を目の当たりにしたように感じた。
　そしてこの『心中』こそ川端の異相の感受、認識を最もよく示す掌編であると今思う。
（･･･）
　後の川端の優れた「不可解への感受性」をうかがわせる諸作は『心中』的時空間の把握から始まっているのではないだろうか。これが当作を本書の最初に置いた理由である。」

☆mediopos-3115　　2023.5.29

賢人と奴隷とバカの話

賢人になれというのではない
奴隷に賢人をめざせというのでもない
無論バカであることそのものを肯定しているのでもない

賢人きどりの知識人の多くは
「バカ」が嫌いだ

賢人になりたい奴隷の多くは
じぶんが「バカ」と思われないように
「バカ」を馬鹿にする

現在ことあるごとに「バカ」とされているのは
「反知性主義」「陰謀論」「反ワク」である

そうした「バカ」の構図をつくったのは
バカ＝大衆への差別的なまなざしをもった
賢人と知識人のナルシシズムであり
それを方向づける「支配する知」である

「バカ」は支配されてしかるべきであり
「バカ」への同情から
「バカ」にならないように「知」を与えようとする者も
「バカ」への侮蔑から
支配に必要な「知」だけを教育しようとする者も
その「知」は「解放する知」ではない

二〇一一年以降
さらにはこの二〇二〇年以降
偽装されあるいは無自覚に機能させられてきた
「支配する知」がむきだしになってきている
（ある意味であまりに映画のような
ドラマチックなストーリーに充ちてもいるのだが）

それにもかかわらず
いまだにその「支配する知」に寄り添おうとする
賢人と奴隷はとくにこの日本では目覚める様子がない
目覚めてはいけないと政府もメディアも総がかりだ

みずからが知識人（おそらく賢人だと思っているのだろう）と
思い込んでいるひとたちの著作の多くは
「反知性主義」「陰謀論」「反ワク」を前提として
いまだ実質的に「バカ」をいかに啓蒙するかに忙しい
そのことでじぶんの確かな居場所を確保できるからだ

おそらくじぶんが「バカ」に見られることを
なによりも怖れているのだろうし
（「デクノボー」となんか呼ばれたくもないだろうから）
じぶんは決して「奴隷」だとも思ってはいないのだろう
そこに欠如しているものこそが
「無知の知」であることに気づくことなく･･･

しかしそんななかでも
賢人や奴隷が「バカ」とみなしているであろう
無名の人たちの蓄積してきた知や技術は
「解放する知」へと向けた動きもみせているようだ
おそらくそこにこそ私たちが
管理社会に潰されずに生き延びられる未来への希望はある

■酒井隆史『賢人と奴隷とバカ』（亜紀書房 2023/4）

▪酒井隆史『賢人と奴隷とバカ』（亜紀書房 2023/4）

（「00 はじめにーーーー賢人とドレイとバカ　二〇二三年、春」より）

「二〇一六年くらいのこと、こういう寓話がウェブに転がっているのをみつけた。（･･･）

（･･･）

いまでは選択肢も賢い二つしかありません。この二つは賢いので、とても似ています。バカは選ぶことをやめてしまうか、自分も賢いとおもいはじめました（そうしてドレイと見分けがつかなくなってしまいました）。自分を賢人とおもっているドレイだらけですから、（･･･）そうだそうだと賛成します。バカと思われたくないからです・こうしてバカはこの国からいなくなりました。

主人の側の賢人たちもバカがなにより嫌いです。かれらは、ドレイの側の賢人はバカにだまされているか、実はバカである、と考えています。だから、正真正銘のバカがいなくなると、勢いにのって、バカ疑惑のある賢人のことなどかまう必要などないといいはじめました。バカを追いだせ、と。バカの話なんかいらない。なぜならバカだからだ。

おれたちはバカではない、と。賢人と賢いドレイたちは口ごたえをします。バカはおまえたちのほうだ。おれたちはこんなに賢いし、バカではないかた立派なふるまいかたも知っている。バカとはちがって、ゴミも拾える。だから、主人にはわかるはずだ。主人は聞いてくれるはずだ。

しかし、もうその言葉も空しく大空に消えていくだけです。（･･･）だれもとりあいません。

賢人と賢人のつもりのドレイたちは必死で叫びます。われわれはバカではない。

＊＊＊

知る人が読めば一目瞭然であるように、この一文は魯迅の「賢人と馬鹿と奴隷」のパロディである。（･･･）

当のエッセイの翻訳者である竹内好は、この寓話をことさら愛し、しなしば日本の近代のありようをそこに読み込んだ。

いわく、日本の近代は、優秀な賢人たちによっておしすすめられた優等生の文化である。そこには、中国の近代のような抵抗が不在であるか、きわめて乏しかった。中国においては、進歩的近代に対し、あちらこちらで反動的な抵抗が起きて、足を引っ張った。それが、ひとつには日本に遅れた原因である。

ではなぜ、日本の先の大戦における敗戦、日本の近代そのものの破局にいたったのか。本来憂愁な文化であるにもかかわらず。

通説にいわく。それは優等生のなかに劣等生がひそんでいたから、あるいは大衆のうちに抱えた劣等性ゆえに負けたのだ。

しかし、と、竹内はいう。日本の近代はその優秀性ゆえに、「負けた」のではないか。」

「魯迅のような作家を生みだす土壌においては、人はいささか過大なほどに自己に固執している。だから、状況がどれほど変わろうが、にわかに方向を変えることはできない。わが道を歩くしかない。しかし、かれらはのろのろ歩きながら（生きていくには前へ歩かざるをえない）、自己を変えていく。歩くことは、成長したり、困難に遭遇してみずからを変容させたり、それ自体、人が変わることでもあるからだ。しかし、それは自己に固執するがゆえに、わたしがわたしであるために、変わるのである。「私が私であるためには、私は私以外のものにならなければならぬ時機というものは、かならずあるだろう」。それが個人にあらわれるとき「回心」（「転向」とは逆の）になり、あるいは社会にあらわれれば「革命」となる。

しかし、日本には、この固執する自己がそもそもない。したがって、自己であらんとして内側から変わろうとするのではなく、環境の変転にあわせて、外部の力によって変わっていく。これが日本の優秀さの秘密である。

いうまでもなく、魯迅は（そして竹内自身も）賢人を憎んでバカを愛していた。とはいえ、賢人がドレイを救うとは考えていないのは当然としても、バカがドレイを救うと考えていたわけではない。そこに注意でよ、と、竹内はいう。日本であれば、これらのキャラクターふぁそろえば、すぐに賢人かバカがドレイを解放するという物語を構成してしまうだろう。しかし、魯迅にとってはそうではない。そこで提示されているのは、だれが夢を充填してくれるかではなく、「夢から醒めても道がない」という苦痛をえがいた物語なのである。

賢人たちは、この幻想の空間をけんまいに補充しようとするだろう。バカも、語り方によってはそうした物語の一部を構成してしまうだろう。しかし、それたはいずれも、与えられる道の話、与えられる解放の話である。それは相変わらず主人だけあたらしくなったドレイの物語にすぎないのである。魯迅によれば、この苦痛を十全に受け止めることなしに、与えられる解放という幻想を破壊して、ドレイがドレイであることをやめる道はひらけないのである。」

（「第I部　無知と知、あるいは「大衆の恐怖」について」〜「01. 現代日本の「反・反知性主義」？」より）

「これは筆者の印象なのだが、昨今の日本の状況が「反知性主義」に侵されているとみえてしまうその文脈には、排外主義やレイシズム、セクシズム、あるいは「ポピュリズム」の言説を、その根拠に乏しくとも、貧困層や失業者に即座にむすびつけようとする傾向が執拗にあることと関連しているのではないか。つまり、そこにはそれらの忌むべき「邪悪な情熱」が、知性の反対の産物であるという。それこそ「偏見」がひそんではいないだろうか。

そして議論がこうつづく。それらの「邪悪な情熱」は、近年の流行語でいえば「思考停止」の産物にほかならない。したがって「知性」を働かせるならば、あるいは「事実」を知るならば、「教養」を積むならば、そうした卑しむべき態度も必然的に解消するはずだ、と。しかし、こうした言説の軌跡をだどっていくなら、それらを練り上げ、メディアを通して流布し、時代の空気の形成を主導してきたのが、もっぱら「知識人」であることはあきらかだ。現在のこのような排外主義的／レイシズムの思考の型は、こうした知識人たちによって練り上げられてきたものの映しである。

さらに、こうした「知的」な排外主義やレイシズムがのびのびと成長するための栄養分を供給しつづけている普遍的権利への攻撃や「戦後的なもの」への否定と、その気分としてのシニシズムは、長いあいだかけて、制度内外の知識人たちによって耕されてきたものである。現代の排外主義やレイシズムの言説の構造や、さらにそれを醸成する知的気分というものは、あきらかに（狭義広義の）知識人、エリート、メディアの複合体によって「上から」主導されてきたものである。したがって、現代の知的雰囲気を、「反知性主義」と決めつけ、それをときに「群衆化した大衆」に重ねたりする前に、それこそアントニオ・グラムシに謙虚に立ち返り、「市民社会」に分散し、時代を支配する感情や価値にかたちを与えている知識人、あるいは有機的知識人たちの働きの分析、知的ヘゲモニーの分析を必要としているのではあるまいか。」

（「第I部　無知と知、あるいは「大衆の恐怖」について」〜「02. 「反知性主義」批判の波動――ホフスタッターとラッシュ」より）より）

「なぜ「反知性主義」のような現象が生まれるのか、かんたんにコメントをしておきたい。

知そのものは人を解放するために機能することもあれば、人を拘束したり押さえつけたりするために機能することもある。いっぽうで、ヒエラルキーを解体し、わたしたちの共にある条件をよりよくすること、促進することにも決定的に寄与することもあるが、いっぽうで、ヒエラルキーを形成・強化し、専制支配を正当化し、不平等な富の配分に寄与することもある。

一九六八年以降において、知や知性そのものになにか価値があるといった物言いはもはやできなくなった。日本でならば、たとえば、「大学解体」以降、自主講座運動がなにを問題にしたか、それを想起してみよう。二つの大戦をかろうじて生き延びた知の無垢への信憑も、この時代以降、もはやほとんど全面的に困難になる。問われるべきは、知識人そのものが知を介して組み込まれたヒエラルキーとどうわたりあうかにもなる。そして、知識人は、みずからの知について、どのような条件のもとで人を束縛するものとなるのか。どのような条件で解放的になるのか、自問を強いられることになる。」

「知が支配とむすびつくとき、それはどこかで暴力と縁をむすんでいる。たとえば、国家において、人はつねに動員の対象となっている。それは富の抽出の対象であり。賦役や軍事のための動員の対象であり、逃亡を阻止するために監視される対象である。人びとをそのような対象に仕立てあげるためには、なんらかの知が必要である。文字が必要であり、計算が必要であり、合理的配置が必要なのである。そのような知は、人びとをその生きる平面から抽象化し、それを通して操作的対象とする官僚の知でもある。ここには知でありながら、解釈労働における知の個別性や具体性を欠いている。わたしたちは、上司の顔色をうかがうとき、上司一般の行動パターンを知り、それをあてはめるわけではない。「この」上司の性格やくせをつかみ、「この」上司のいまの感情の動きをつかみ、それによって「この」上司の機嫌を損ねないようにふるまうのである。いっぽう、官僚の知、支配の条件と展開した知は、そうした具体性の平面には無知である。あるいは、その無知とそれによる冷酷を「合理性」と誇るのも、この知である。したがって、この知は、つねに国家の暴力にどこかで繋留している。」

（「20.あとがき」より）

「総じていえば、この時代にこの社会で起きたのは、ネオリベラルな世界秩序への遅ればせながらの全面的順応の過程であった。単一のゲームの勝敗、取り分の大小の競い合いにほとんどが収斂し、それをはみだしていく動きは、全方向から取り締まられてしまう。この世界のありようをひらいてみせるよりは、「政権」やそれを「支持する人びと」に与えるダメージを狙ったようなフレーズが知的にも好んで流布されたのは、そのような態度のあらわれにもおもわれた。内向と保守化が、批判的言説をも覆い尽くしていったようにみえたのである。それまでの実践や知的ないとなみがカッコに括っていた、躊躇なしにはいえなくなったはずの（そう、おもいこんでいた）語彙から、つぎつぎとカッコが外されていった。二〇一一年の「三重の破局」の直後に爆発的にひらかれたようにみえた諸可能性が、なぜそのような空気へと転じていくのか、茫然としながらも、せめて大勢とはちがってもじぶんの考えを記しておかなければと書かれたのが、ここに収めたテキストの大半である。

いっぽう。二〇一一年以降、世界をみわたすならば、民衆的実践が世界的に呼応し合いながら別の世界のありかたの模索をさらに深めていくにともない、わたしたちがいまどういう時代に、どういう世界にあるのかを大きくつきとめようとする動きが、知の基盤の変動を加速させていったようにみえたし、そこにはしばしば興奮を誘うものがあた。この世界はやはりおもしろいのである！

しかし、もういっぽうで、パンデミックを転換点として、本書でみてきた悪しき趨勢もより強化され、よりむきだしになっている。世界のエリート層は、破局を富のさらなる蓄積の機会に転じつつ、一手に集中させた膨大な富の防衛のために地球上の多数の人びととたたかう意欲をますます隠さなくなってきた。富裕層とその同盟者は、システムの正当化が困難になればなるほど、「切腹」や「安楽死」などを口にしながら、「たちどころ」の解決、つまり暴力による解決を求めていくだろう。それと同時に、膨大な富を投入して、システムから振り落とされていく人びとになおこのシステムには維持する価値があると夢想（魯迅＝竹内好のいう「夢から醒めないことの救い」）を提供し、システムを回すにあたっての邪魔者をつくりだしてはそれへの憎悪を注入していくだろう。老いた恐竜の悪あがきに巻きこまれることなく、わたしたちが生き延びるためには、その「若づくり」に幻惑されないようにしなければならない。本書の目標は、正否はともかく、その幻惑に抵抗すること、そして、すでに地球上のあちこちではじまっている、つぎの世界の組み立ての過程に、いささかなりとも参加することにある。」

【目次】

◆はじめに賢人とドレイとバカ　二〇二三年、春

第I部　無知と知、あるいは「大衆の恐怖」について
01. 現代日本の「反・反知性主義」？
02. 「反知性主義」批判の波動――ホフスタッターとラッシュ
03. ピープルなきところ、ポピュリズムあり――デモクラシーと階級闘争
04. 「この民主主義を守ろうという方法によっては この民主主義を守ることはできない」――丸山眞男とデモスの力能
05. 一九六八年と「事後の生(afterlives)」――津村喬『横議横行論』によせて
06. 「「穏健派」とは、世界で最も穏健じゃない人たちのことだ」――「エキセン現象」をめぐる、なにやらえらそうな人とそうじゃない人の「対話」

第II部　だれがなにに隷従するのか
07. 「放射脳」を擁護する
08. 「しがみつく者たち」に――水俣・足尾銅山・福島から
09. 自発的隷従論を再考する
10. 「自由を行使する能力のないものには自由は与えられない」――二〇一八年「京大立て看問題」をどう考えるか
11. 「中立的で抑制的」――維新の会と研究者たち
12. 「この町がなくなれば居場所はない」――映画『月夜釜合戦』と釜ヶ崎

第III部　この世界の外に――抵抗と逃走
13. 「ブラジルで のブレザーなんて着たがるヤツはいない。 殴り倒されるからだ」――二〇二〇年東京オリンピックをめぐる概観
14. 戦術しかない/戦略しかない――二〇一〇年代の路上における二つの趨勢
15. 「わたしは逃げながら、武器を探すのです」――ジョージ・ジャクソン、アポリショニズム、そしてフランスにおける「権力批判」の起源について
16. ポリシング、人種資本主義、#BlackLivesMatter
17. パンデミックと（資本）とその宿主
18. 「世界の終わりは資本主義の勝利とともにはじまった」――文明に生の欲動をもたらすもの
19. すべてのオメラスから歩み去る人びとへ――反平等の時代と外部への想像力

◆20.あとがき

○酒井 隆史（さかい・たかし）
大阪公立大学教員。専門は社会思想史、都市社会論。主要著作に『通天閣―新・日本資本主義発達史』（青土社、2011年）、『完全版 自由論―現在性の系譜学』（河出文庫、2019年）、『暴力の哲学』（河出文庫、2016年）、『ブルシット・ジョブの謎』（講談社現代新書、2021年）。訳書に、ピエール・クラストル『国家をもたぬよう社会は努めてきた』洛北出版、デヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブ―クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店（共訳）、『官僚制のユートピア―テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』以文社、『負債論―貨幣と暴力の5000年』以文社（監訳）、マイク・デイヴィス『スラムの惑星―都市貧困のグローバル化』明石書店（監訳）、デヴィッド・ウェングロウ、デヴィッド・グレーバー『万物の黎明』光文社（近刊）など。

☆mediopos-3116　　2023.5.30

６月からＮＨＫのＥテレで
国際ジャーナリストの堤未果による
ナオミ・クラインの『ショック・ドクトリン』を
ガイドにした講義が放送される

このテキストで語られている内容を
はじめて知る人がいるとしたら
まさにその「ショック」で
世界への見方がひっくり返るかもしれないし
「陰謀論」のように映るかもしれないけれど

『ショック・ドクトリン』は
詳細な事実の積み重ねによって
明らかにされている裏の歴史にほかならない

そしてある意味この内容は
いまのわたしたちにとって
欠かすことのできない視点を与えてくれる

ナオミ・クラインは
一九七〇年代のチリの軍事クーデターから
ソ連崩壊・アジア通貨危機・米国同時多発テロ事件・イラク戦争
その他にもハリケーンや津波のような自然災害などの
さまざまな「惨事」に際し
それらの危機につけこみあるいはそれを意識的に起こし
過激な市場主義経済改革を強行する
アメリカとグローバル企業の
「ショック・ドクトリン(惨事便乗型資本主義)」により
危機状況にある国の富を収奪する構造を明らかにしている

その「ショック・ドクトリン」の背景にあるのは
「人間の精神を自在にコントロールする方法」を実験した
「ＣＩＡ拷問マニュアル」を
新自由主義経済の実現に利用したミルトン・フリードマンであり
その教えを受けたシカゴ学派の弟子たちが
各国政府の中枢で影響力を発揮しながら
「ショック・ドクトリン」が実行されてきている

そのシカゴ学派の弟子たちには
歴代米国大統領を筆頭やＦＲＢ（連邦準備制度理事会）議長
英国首相・中国共産党書記長・ロシアの新興財閥
ＩＭＦ（国際通貨基金）理事・途上国の独裁者などがいて
日本でいえば日本銀行の白川方明元総裁
竹中平蔵元経済財政政策担当大臣なども
シカゴ大学でフリードマンの講義を受けている
ちなみにフリードマンは日銀の顧問を務めていたりもした

▪堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』』（2023年6月 NHKテキスト NHK出版 2023/5）
▪ナオミ・クライン（幾島幸子・村上由見子訳)
『ショック・ドクトリン――惨事便乗型資本主義の正体を暴く（上・下）』（岩波書店 2011/9）

上記の面々をみればわかるように
「ショック・ドクトリン」という手法は
国家やイデオロギーの枠組みではとらえにくいが
重要なのは「お金」や「権力」の流れであることがわかる

昨今の新型コロナのパンデミックやワクチン被害
ロシアのウクライナ侵攻による紛争などにおいても
そこで「お金」がどのように流れているのかを
追ってみるだけでも
「ショック・ドクトリン」の本質が見えてくる

しかしこのテキストと放送が
先日のワクチン被害者について
意図的な虚偽放送を行った同じＮＨＫ関連であることは
（勝手な推測ではあるけれど）
自社を含むメディア報道に対する批判精神を
失わないでいたいという熱い意志をもっているであろう
人物の存在を感じさせてくれ
そこにある種の希望を感じることもできる

さてこの講義のテキストの最後に
次のようなある意味もっとも大切な示唆がある

「「一番悪い敵は、誰なのか？」
という思考に陥らないようにすること」

「善悪二元論に陥った民衆ほど、
扱いやすい存在は」ないからであり
「二一世紀のショック・ドクトリンの最大の特徴は、
敵の顔が見えない」からでもある

「相手は人間ではなく、
果てしなき欲望を現実化するための「方法論」」であって
（「犯人探し」を目的にすると視野狭窄と迷路に陥る）
なによりも欠かすことができないのは
「物事を深く、長く、広く見る目」をもち
「自分の頭で考える」ことなのだ

▪堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』 』
（ 2023年6月 NHKテキスト NHK出版 2023/5）
▪ナオミ・クライン（幾島幸子・村上由見子訳)
『ショック・ドクトリンーー惨事便乗型資本主義の正体を暴く（上・下）』
（岩波書店 2011/9）

（堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』 』

「惨事便乗型資本主義に警鐘を鳴らす

戦争やクーデター、テロ攻撃や大規模な自然災害が起きた時に、政府は民衆に何をしてくれるのだろうか？
ジャーナリストのナオミ・クラインは、「政府によって大惨事（ショック）は、民衆を思いのままに支配する政策を実行に移す、絶好のチャンスである」と言う、その著書『ショック・ドクトリン』 には、世界中で巧みに実施されてきた実例の数々が紹介されている。」

「ＣＩＡ拷問マニュアルから学んだショックの活用法

一九五〇年代から六〇年代にかけて、ＣＩＡは心理学者・精神分析家医の協力を得て「人間の精神を自在にコントロールする方法」を実験した。そこでまとめられたＣＩＡ拷問マニュアルを、新自由主義経済の実現に利用したのは米国のミルトン・フリードマンである。
彼の教えを受けたシカゴ学派の弟子たちは、各国政府の中枢で影響力を発揮し、大惨事が起こる機会を虎視眈々と狙っている。」

「世界中に散らばったシカゴ学派のドクトリン
シカゴ学派の狙いーーーー永遠に続くショック状態

二〇〇一年に同時多発テロが起きた時、米国の政権中枢にいたのはブッシュ（子）大統領。チェイニー幅大統領・ラムズフェルト国防長官の三人だった。フリードマンの教えを政策の柱とする彼らは、この大惨事を最大の契機と捉え、アメリカという国を「株式会社化する国家」へと一変させた。」

（堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』〜「はじめに」より 』

「９・１１後のアメリカで私が目の当たりにしたものが、過去半世紀の間に世界の他の地域でも使われてきた、一つの手法であったこと。
読み終わった時、私はしばらく呆然としたまま、言葉が出ませんでした。
歴史家のＥ・Ｈ・カーが言ったように、事実とは、歴史家が呼びかけた時にだけ語るもの。誰がどの角度から見るかによって、歴史はいかようにもその解釈を変えられるのです。
この本の日本語訳が刊行されたのは、巨大な地震と津波が日本を襲い、史上最悪の原発事故が社会全体をショック状態に突き落とした東日本大震災の半年後でした。
版元の岩波書店から帯文を依頼された私は、迷わずこう書きました。
「３・１１以降の日本は確実に次の標的になる」
『ショック・ドクトリン』 の原書が、世に出てから一六年。この間、世界ではデジタル・テクノロジーが猛スピードで進化し、私たちの日常はますます仮想空間と一体化し、ショック・ドクトリンの手法もまた、よりスピードを上げ、見えにくく、巧妙になってきています。
主権者として社会をつくっていくはずの私たちが、このスピードに引きずられ、大量の情報に飲まれたままでいれば、立ち止まる暇もなくつけこまれ、弱い者がまず踏みつけにされるでしょう。」

「起きていることを多角的に、俯瞰して見るスキルを身につけると、目に映る世界が本当に変わります。少ない情報でも、未来が見えるようになると、主権者としての自分の立ち位置がクリアになっていくのを実感できるでしょう。
新型コロナウイルスによるパンデミックやウクライナ危機、気候変動や食糧危機など、今や世界中が、同時多発惨事に放り込まれていると言っても過言ではありません。そこで今仕掛けられている全世界規模の「ショック・ドクトリン」とは何か。その中で日本はどんな未来を目指すのか。ぜひ私たちが現在その渦中にあるということを意識しながら、この本を読んでみてください。歴史とは現在と過去との対話だと言われますが、過去を見る新しい眼が今ほど切実に求められた時代があるでしょうか。それを紐解き向き合うことで、再び自分を取り戻した私にとっても、これからこの名著を読む皆さんにとっても、きっとその対話は、次世代に手渡せる素晴らしい財産になるはずです。」

（堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』 〜「第１回「ショック・ドクトリン」の誕生」より』

「今まで世界中で起きてきた、ショッキングが人権侵害事件の数々は、民主主義など存在しない非常な毒性政権下で起きるものだと思われていた。けれど、ハリケーン・カトリーナやイラク戦争、イギリスや南米、アフリカ、ロシアなどで過去数十年間に起きた事例を並べてみると、ある共通のパターンが存在するのではないか。
（ミルトン・）フリードマンの最も有名な論文（「資本主義と自由」）の中いはこう書かれています。

現実に、あるいはそう受けとめられた危機のみが、真の変革をもたらす。危機が発生したときに取られる政策は、手近にどんなアイディアがあるかによって決まる、われわれの基本的な役割はここにある。すなわち現存の政策に代わる政策を提案して、政治的に不可能だったことが政治的に不可欠になるまで、それを維持し、生かしておくことである。（序章）」

「危機に便乗して過激な新自由主義を強引にねじ込むこの戦略を、クラインは「ショック・ドクトリン」と名づけます。そしてそこから過去に遡り、フリードマンとその一派がこの手法を使って、いかに世界の多くの場所で、国家や国民の資産を略奪してきたか、事実を丹念に拾い上げながら、語られなかった〝もう一つの歴史〟を明るみに出したのでした。

歴史を辿ると、フリードマンを信奉してきた弟子たちは、歴代米国大統領を筆頭に、ＦＲＢ（連邦準備制度理事会）議長、英国首相、中国共産党書記長、ロシアの新興財閥にＩＭＦ（国際通貨基金）理事、途上国の独裁者など、いずれも国を動かす立場の人々ばかりでした。
ちなみに日本でも、日本銀行の白川方明元総裁はシカゴ大学でフリードマンの講義を受けており、竹中平蔵元経済財政政策担当大臣は、フリードマンの信奉者です。一九八二年から八六年までの四年間、フリードマンは日銀の顧問を務めていました。
自由市場の歴史を、作られた〝ショック〟が塗り替えてきたこと。
チリのクーデター、天安門事件、ソ連崩壊、９・１１、イラク戦争、そして津波やハリケーン・・・・・・一件バラバラに見えるこれらの歴史的事象に一本の糸を通してみせたのが、この『ショック・ドクトリン』 という本なのです。
ショック状態に置かれた人間は、いとも簡単に過激な変化を受け入れてしまう。
いったいフリードマンは、このアイデアを、どこから得たのでしょうか。
それは、クラインが後に「あまりにもグロテスクな話」と表現した、米ＣＩＡ（中央情報局）が絡む、恐るべき洗脳実験でした。」

「第１回の最後に、『ショック・ドクトリン』 の序章にある一節を引用しておきましょう。

コーポラティズムは、膨大な公共投資の民間への移転（往々にして莫大な負債を伴う）、とてつもない富裕層と見捨てられた貧困層という二極格差の拡大、そして安全保障への際限ない出費を正当化する好戦的ナショナリズムをおもな特徴とする。このようにして生みだされた巨大な富のバブルの内側にいる者にとっては、これほど収益性の高い社会構造はほかにない。だが、バブルの外側にいる大多数の人々は明らかに不利な立場に置かれるため。コーポラティズム国家は露骨な監視活動（ここでもまた政府と大企業が互いに便宜を図り、契約を交わす）、大量の人々の監禁、市民的自由の制限、さらには多くの場合、拷問という特徴を持つことになる。（序章）

政府と財界の蜜月が生みだすコーポラティズム国家。
そこにもう一つ、私たちの誰もがよく知る国家機関が参入することによって、国家どころか一つの大陸を丸ごとターゲットにした、大規模なショック・ドクトリンが可能になるのです。」

（堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』「第２回　国際機関というプレーヤー。中露での「ショック療法」」より 』

「ナオミ・クラインが明らかにした「ショック・ドクトリン」という手法は、イデオロギーや国家単位の枠組みから見るだけでは、その本質は見えません。
重要なのはお金の流れ、もっと言えば人間の欲望の先を見つめることなのです。リーダーや複数の勢力が共通の欲望でつながった時、そこにはショック・ドクトリンが生まれる素地ができる、と言うとわかりやすいかもしれません。」

「イラクでもロシアでも、ショック・ドクトリンがもたらしたものは、実体経済の破壊と外国資本による略奪でした。
けれど、本来の大義名分である「経済の健全化」が完全に失敗したことを取り上げるべきメディアは、フセインやプーチンといった個人の問題に矮小化したり、イラク人、ロシア人という民族を貶めたりする報道で、その本質から巧みに目をそらさせてきたのです。
歴史から学ぶという人類の特権を奪うこの行為が「腐敗」でなければ、いったい何を腐敗と呼ぶのでしょうか。」

堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』「第３回　戦争ショック・ドクトリン　株式会社化する国家と新植民地主義」より 』

「９・１１によって引き起こされたショック・ドクトリンの進化は、（･･･）従来の戦争の定義そのものを、二つの面で大きく書き換えてしまいました。
一つ目は、時間の制約です。
それまでの「国家対国家」の戦争には、どちらかが勝利する、講話が結ばれるなど、何かしら区切りがありました。ところが「テロとの戦い」には区切りはありません。世界のどこかにテロリストが存在する限り、戦いは続いていくからです。
二つ目は空間の制約です。
国対国の戦争と違い、テロリスト対我々という新しい演奏では、敵は自国内も含め世界中どこにでも存在しうるため、もはや国境がありません。
すると何が起きるでしょうか。
戦争から時間と空間の制約がなくなったことにより、政府は国家を無制限の緊急事態下に置いておくことができるようになりました。
セキュリティ産業には、まさに笑いがとまらない特需でしょう。」

「９・１１というショック・ドクトリンの下で導入されたもう一つのドクトリンは、当局による国民監視と言論統制の合法化でした。」

堤未果『ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』「第４回　日本、そして民衆の「ショック・ドクトリン」」より 』

「地震に台風、豪雪、噴火、ゲリラ豪雨に土砂災害･･････自然災害大国である日本にとって、自然災害を利用したショック・ドクトリンの事例には、多くのヒントが隠されています。」

「新型コロナのパンデミックに、ロシアのウクライナ侵攻による紛争、各地で頻発する異常気象に大手銀行の破綻など、世界全体に影響を与える巨大ショックが同時進行している時代に、私たちは生きているのです。
高速で進化するデジタル・テクノロジーは、惨事が起きた時に恐怖を拡張するスピードを飛躍的に上げ、何が起きているかを俯瞰して冷静に見ることがますます難しくなりました。
次々に仕掛けられるショック・ドクトリンに、私たち市民が対抗する術はあるのでしょうか。
ナオミ・クラインは、キャメロン博士の被験者になった女性が、実験に関する新聞記事を見たことをきっかけに、自分の破壊された記憶を取り戻し始めたというエピソードを紹介し、人間の「記憶」が持つ力について書いています。
それは私たちが、いつの間にか大事なものを奪われることから身を守るための、大きな武器になるからです。
『ショック・ドクトリン』の終章では、シカゴ学派の危険な思想に飲まれずに、大切なものを守るべく立ち上がる人々や、住民が自ら主権を取り戻したエピソードが登場します。」

「今、リアルタイムで進行している、地久規模の二つのショック・ドクトリンがあります。
一つはシカゴ学派の流れを汲む、グローバル経済主体のもの。「今だけ、カネだけ、自分だけ」の論理で、四半期ごとの利益のために猛烈なスピードで突き進み、あらゆるものを画一化して、市場というモンスターの餌食にしていきます。
もう一つは、画一化ではなく多様性、企業主導ではなく国民主権（あるいは地域住民主権）という形で、地域から合って直していこうという、民衆のショック・ドクトリンです。それは長いスパンで過去から今までを紐解き、じっくり考えながら、民主的に話し合いをし、点と点を線でつなげて、未来の行動を決めていく道です。」

「一つ、注意しておきたいことは、「一番悪い敵は、誰なのか？」という思考に陥らないようにすることです。善悪二元論に陥った民衆ほど、扱いやすい存在はありません。異なる意見を持つ相手に、レッテルを貼り排除するようになったら要注意。偏見と分断は、ショック・ドクトリンを仕掛ける側にとって、甘い蜜だからです。『ショック・ドクトリン』に繰り返し登場する。メディアという強力なプレーヤーの役割を、思い出してください。９・１１で、イラクで、私たち民衆は、なぜショック・ドクトリンを許してしまったのでしょうか。
今は独裁者や悪い王様など、わかりやすい敵を倒せばいいという時代ではありません。二一世紀のショック・ドクトリンの最大の特徴は、敵の顔が見えないことです。見えないだけでなく、限りなく増殖していき、今日の味方が明日の敵にもなる。全てはお金で動いていくので、敵の顔が見えたと思っても、それはどんどん変わり、複雑に絡み合うので、追いきれません。
『ショック・ドクトリン』に出てくる多くの事例が示すしょうに、〝犯人探し〟をしたくなるわたしたちの本能は、国民を分断し、攪乱し、戦うべき相手を見破るよう、利用されてきました。
それらを読むと、今世界規模で起きている数々のショックの下でも、同じように情報が狭められ、対立を煽られ、人々が分断されていることに気づくでしょう。
物事を深く、長く、広く見る目を失い、自分の頭で考えることを放棄してしまった時にこそ、ショック・ドクトリンは牙を剥き、私たちはいとも簡単に餌食にされてしまうのです。
相手は人間ではなく、果てしなき欲望を現実化するための「方法論」に他なりません。それを打ち負かせる武器はたった一つ、物事を俯瞰して眺め、本質をすくい上げる、人間の「知性」なのです。」
ナオミ・クラインの『ショック・ドクトリン』を通して、勝者だけが語る物語とは別の、弱者から見たもう一つｎ歴史を紐解くことで、私たちは過ぎ去った時間を、味方にできることに気づくでしょう。」

○堤未果
国際ジャーナリスト。東京都生まれ。ニューヨーク州立大学国際関係論学科卒、ニューヨーク市立大学大学院国際関係論学科修士号。国連、米国野村證券などを経て現職。『報道が教えてくれないアメリカ弱者革命』で黒田清・日本ジャーナリスト会議新人賞を受賞。『ルポ 貧困大国アメリカ』で日本エッセイストクラブ賞、中央公論新書大賞を受賞。その他著作に『沈みゆく大国アメリカ』(二部作、集英社新書)、『政府は必ず嘘をつく』(二部作、角川新書)、『日本が売られる』(幻冬舎新書)、『ルポ 食が壊れる』(文春新書)、『デジタル・ファシズム』(NHK出版新書)など多数。

○クライン,ナオミ
1970年、カナダ生まれのジャーナリスト、作家、活動家。デビュー作『ブランドなんか、いらない』が世界的ベストセラーとなり、一躍、反グローバリゼーションの語り部となる。『ニューヨーク・タイムズ』『ガーディアン』『ネーション』など、さまざまな媒体で記事を発表している。トロント在住

☆mediopos-3117　　2023.5.31

散歩を愛し
猫と一緒に暮らしているという
詩人ハン・ジョンウォンのエッセイ集（翻訳）が
書肆侃侃房から出されている
この本が著者のはじめての本だという

「散歩する」ということは
目的地にたどり着くためのものではない
散策しながら詩とともにあるようなもの

そうすることで
私たちは「違う人」になっていく

「散歩から帰ってくるたびに、
私は前と違う人になっている。
賢くなるとか善良になるという意味ではない。
「違う人」とは、
詩のある行に次の行が重なるのと似ている。
目に見える距離は近いけれど、
見えない距離は宇宙ほどに遠いかもしれない。
「私」という長い詩は、自分でも予想できない行を
いくつもくっつけながら、ゆっくりと作られる。」

ああそうだと心から思う

「散歩する」ように詩を生きることは
スマホを見ながら目的地を目指すことや
ChatGPTで文章を作成することのような
「答え」の出力機になることではない

その違いがわからなくなったとき
「散歩」も「詩」も意味を持ちえなくなる

またひとは「幸せ」のかたちを得るために
生きているのではない

こうすれば幸せになれるというような
与えられた「答え」としての幸せは
決められた目的地に向かうだけの散歩と同じ

ミヒャエル・エンデの『モモ』に出てくる
時間どろぼうの物語のように
現代では効率と決められた答えが
ひとから「散歩」を「詩」を奪い去っていく

だいじなのは
「取るに足りないものなどなに一つない、
と思う心」からはなれず生きること
「答え」のために生きているのではないのだから

▪ハン・ジョンウォン（橋本智保訳)『詩と散策』
（書肆侃侃房 2023/2）

▪ハン・ジョンウォン（橋本智保訳)『詩と散策』
（書肆侃侃房 2023/2）

（「散歩が詩になるとき」より）

「インディアンの少女が友達に、自分の家に来る道順を教える。

垣根のある道を抜けたら、海と反対側の枯れ木のほうに来るの。そのうち、細い流れの川が見えてくるから。そしたらね。緑の木に囲まれるまで上流にむかって歩いてきて、太陽の沈むほうに、川の流れに沿って、そのうちぱっと道が開けて、平らな土地が見えてくるんだけど。そこがあたしんちよ。

この頃は、通りの名前や番地を見て家をさがす。それすらも、スマートフォンに住所を入力する手間だけかけて、あとはそれを見ながら目的地まで行く。だが、その地図には化石のように固まった空間が広がるだけで、私たちの周りで滔々と流れる時間を見せてはくれない。木々の青さ、川の渦、風の震え、動物の脈拍は、そこにない。初めから存在しないかのように消されている。
だからインディアンの少女の口から出てくる言葉は、私にはなじみのないものだが、愛らしい詩のように聞こえる。垣根、海、枯れ木、上流、平らな土地、などの詩語と、それらのあいだにある飛び石を踏んで家をさがすその子は、友達の家にたどり着いた頃には一篇の詩を読んだことになる。あの子はもうこの詩を読んでるよね、などと思いながら、自分の目で一度、友達の目でもう一度読むうちに、互いに心が通い合うようになるだろう。
あなたという目的地を入力して一気にたどり着くのではなく、途中、あれこれささやかな苦労や美しさを経て、それらのすべてが合わさったとき、はじめてあなたに辿りつける。そんなプロセスがあったらいいのにと思う。」

「猫たちが横になれる場所、実をつけるかもしれない木、泣きながら眠った人たちの家‥‥‥散歩をするとき、私がきょろきょろ見渡すものも、どれも取るに足らないものばかりだ。しかし私の心の名かいは、大きなものとそんなささいなものが共存するために、それほど傷ついたり長く苦しまなくてすむ。日々の暴力や陳腐なものにめったに染まることもない。
私の目で見たものが、私の内面を作っている。私の体、足どり、まなざしを形づくっている（外面など、実は存在しないのではないか。人間とは内面と内面が波紋のように広がる形象であり、いちばん外側にある内面が外面になるだけだ。容貌をほめられてもすぐに空しくなって、真のほめ言葉にならないのもそのためだ。どうせならこう言うのはどうか。あなたの耳はとても小さな音も聞こえるのね、あなたの瞳は私を映すのね。あなたの足どりは虫も驚かないほど軽やかなのね、と）。そのあとまた、私の内面が外をじっと見つめるのだ。小さくて脆いけれど、一度目に入れてしまうと限りなく膨らんでいく堅固な世界を。
だから散歩から帰ってくるたびに、私は前と違う人になっている。賢くなるとか善良になるという意味ではない。「違う人」とは、詩のある行に次の行が重なるのと似ている。目に見える距離は近いけれど、見えない距離は宇宙ほどに遠いかもしれない。「私」という長い詩は、自分でも予想できない行をいくつもくっつけながら、ゆっくりと作られる。

詩は意味するものではなく、存在するもの
アーチボルド・マクリーシュ「詩学」

違う人に違う人に違う人になっていくあいだ、私はただ存在する。
散歩を愛し、散歩の途中で息を引き取ったローベルト・ヴァルザーもこう言っている。

わたしはもはやわたし自身ではなく、ほかの人間であり、まさにそれゆえにいっそう、わたし自身なのでした。

ローベルト・ヴァルザー「散歩」（ローベルト・ヴァルザー作品集４　散文小品集１」新本史斉、フランツ・ヒンターエーダー＝エムデ訳、鳥影社）」

（「幸せを信じますか」より）

「ひとり物思いにふけって歩くほうなので、街で布教をしている人につかまることがよくある。（･･･）その日は、横断歩道で不意に声をかけられたので、避けるタイミングを逃してしまった。

すばらしい福運に恵まれているのに、ご先祖様が邪魔をしていますね。
はあ。
福運を取り戻す方法があります。
そうなんですか。
幸せになれるんですよ。
べつに幸せになりたくはありませんから。
幸せになりたくない人なんていますか？
私です。
え？　なんですって？

布教者の声は怒気を帯びていた。信号が変わらなければ、私と言い争った末に堪忍袋の緒を切らしていたかもしれない。
私はひとり横断歩道を渡った。幸せになんかにこだわらなければ、あなたはいまよりずっと楽に生きられますよ、と言いたいのを我慢して。
私は幸せうんぬんにうんざりしていて、「幸せ」という言葉を辞書から削除してしまいたいと思っている。もしくは意味を変えるとか。（･･･）もちろん、軽々しく使われるのが問題なのであって、言葉にはなんの罪もないことは承知している。
道で会った布教者には嫌みな言い方をしてしまったが、「幸せになりたい」というのは、より正確に言うと「幸せを目標にして生きたくない」という意味だ。多くの人が幸せを〝昇進〟〝結婚〟〝マイホーム購入〟などと同義語だと思っている状況ではなおさらだ。
幸せは、そんなありきたりで画一的なものではない。目にも見えない、言葉でもうまく言い表せない、手相のほうに人それぞれ違ったものなのだ。幸せについて語るのは。互いの手のひらを見せ合うような秘密めいたことでなければならない。
私は自分の手をじっと見つめる。私はいつ幸せだっただろう。不安や寂しさもなく、成就も自負心もなく、ただ純粋に嬉しかったことがあっただろうか。」

「　愛はただ方向を決めるものであって、魂の状態ではないことを知らなければならない。それを知らなければ、不幸が襲ってきた瞬間、絶望に陥る。
シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』

これは愛についての記録だが、私は「愛」の代わりに「幸せ」を入れてもう一度読んでみる。「幸せはただ方向を決めるものであって、魂の状態ではない」と。
幸せが理想的な魂の状態だと思うから、私たちは絶望に陥りやすい。ある状況や条件の中で、受動的に得たり失ったりすることが幸不幸だと決めてしまうと、永遠にそのしがらみから抜け出せない。手に入れられないものが多く、毀されてばかりの人生でも、歌を歌おうと決めたらその胸には歌が生きる。歌は肯定的な人の心に宿るというよりも、むしろ必要にかられて呼び寄せる人に沁み入るのだ。
私たちはいつも「方向」を選ぶ。単に幸せを目標にするのではなくて、目の前に拡がるありとあらゆる可能性の中でいちばん善い道を宿している矢印についていく。その不立ちじゃ初めは一致しないかもしれない。しかしいずれ、幸せは善のほうに入っていくだろう。
だから「幸せ」なんて言葉はなくてもいい。私の最善とあなたの最善が向き合えば、そして私の最善と私の最善が向き合えば、私たちはもう「幸せ」にたよる必要もない。
（･･･）
幸せなんて言葉は（･･･）忘れてしまおう。できれば「不幸」も忘れよう。
うれしくて悲しいことを、ただ歌おう。」

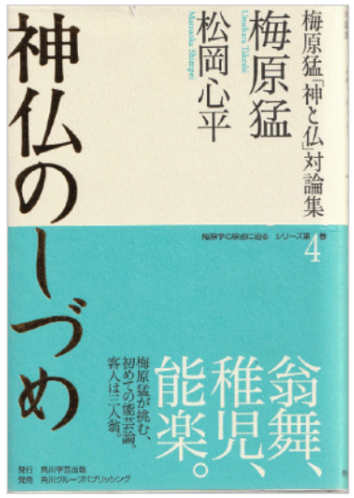
（「日本の読者のみなさんへ」より）

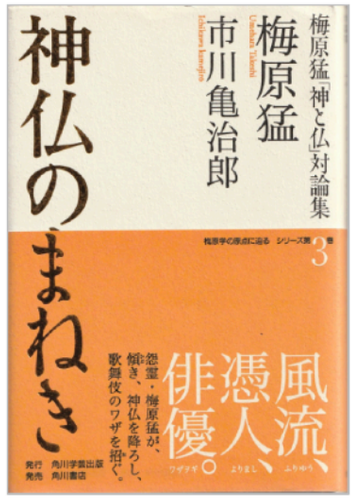
私は散歩を愛しています。歩きながら見たり聞いたりした、すべての些細なことを大切にしてきました。それらは必要なときに、悲しみと絶望に立ち向かえる力になってくれました。詩もそうです。私は正式に詩人としてデビューしたわけではありませんが、どこでなにをしていようと「詩人の心」を持って生きようと自分に言い聞かせてきました。この本に書いたように「取るに足りないものなどなに一つない、と思う心」を持って。

【著者プロフィール】ハン・ジョンウォン　（한정원）
大学で詩と映画を学んだ。修道者としての人生を歩みたかったが叶わず、今は老いた猫と静かに暮らしている。エッセイ集『詩と散策』と詩集『愛する少年が氷の下で暮らしているから』（近刊）を書き、いくつかの絵本と詩集を翻訳した。

【訳者プロフィール】橋本智保（はしもと・ちほ）
1972年生まれ。東京外国語大学朝鮮語科を経て、ソウル大学国語国文学科修士課程修了。訳書に、キム・ヨンス『夜は歌う』『ぼくは幽霊作家です』（新泉社）、チョン・イヒョン『きみは知らない』(同)、ソン・ホンギュ『イスラーム精肉店』（同）、ウン・ヒギョン『鳥のおくりもの』（段々社）、クォン・ヨソン『レモン』（河出書房新社）『春の宵』（書肆侃侃房）、チェ・ウンミ『第九の波』（同）ユン・ソンヒほか『私のおばあちゃんへ』（同）など多数。

☆mediopos-3118　　2023.6.1





▪梅原猛・市川亀治郎『神仏のまねき』（梅原猛「神と仏」対論集 第三巻　角川学芸出版 2006/10）
▪梅原猛・松岡心平『神仏のしづめ』（梅原猛「神と仏」対論集 第四巻　角川学芸出版 2008/6）
▪山本ひろ子『摩多羅神／我らいかなる縁ありて』〔春秋社 2022/8〕

四代目市川猿之助の悲しい事件があった

歌舞伎のことには疎いものの
猿之助の存在には
若き市川亀治郎の時代から注目していたこともあり
たしかなかたちで復帰されるよう心から祈っている

亀治郎に注目するきっかけになったのが
ここでとりあげている梅原猛との対談で
あらためて読み返してみることにした

この対談は平成十七年十二月二十一日と
平成十八年一月二十八日・三月十六日の
三回にわたって行われたもの
四代目市川猿之助は1975年〈昭和50年〉生まれなので
当時はまだ三十歳

亀治郎はクレバーな知性と
深い直感力をもった優れたワザヲギ（役者）
常に「攻め」の姿勢で
「守りに入らない」でいられる「勇気」の必要性を語っている

つまり「あらゆるものを知っていなければいけないし、
あらゆるものを学」ぶことによって
「〝もの〟に瞬時にして乗り移れる直感、感覚」をもち
「この世ならざる存在へ変身する」呪力をもって演じる
というのだが

梅原猛曰く「理性的な亀治郎と、
神がかっている亀治郎の二人の亀治郎がいる」といい
亀治郎自身としては
「完全に霊が乗り移ってくるタイプ、憑依型」なのだという

亀治郎は「どこか孤独で寂しさを漂わせ」ながら
「孤独に耐える力があった」最澄という人間が好き」で
「独りで、静かにい」ながら
「密なるもの」の「声を常に聞こうという姿勢」を
もっているというのだが

一神教の神を味方にして
そうした孤独に耐える西洋のあり方に代わるものを
梅原猛に問いかけたところ
梅原猛は「怨霊」だ答える

その「怨霊」という答えに対して
亀治郎は「怨霊を鎮魂するという行為」を口にする

怨霊を鎮魂するといえば
まさに「能」の世界であって
「歌舞の神・芸能の神とも仰がれ」るのは
「摩多羅神」である

「摩多羅神」は
亀治郎が共感をもつ最澄の開いた
天台宗系の寺院の常行堂という仏堂にゆかりの神で
常行堂の外でも秘密結社的な
イニシエーションの本尊という役割を演じてもいるが
その摩多羅神の出自についてはよく知られていない

梅原猛によれば
「この神は日本産でも中国産でもインド産でもなく、
中央アジアの方からやってきた」
「どこかディオニソスに繋がっている」神である

亀治郎（四代目市川猿之助）はワザヲギとして
そうしたディオニソスに憑依され
怨霊を憑依させ鎮魂することで演じていることになる

その怨霊の鎮魂は
「神がかっている亀治郎」として
ワザヲギの舞台上の演技のなかで成立するのだが
同じ身体をもちながら
そこからはなれた日常のなかでは
「理性的な亀治郎」を可能にすることが求められている

現代はかつての時代とは異なり
芸能やスポーツなどの世界でも
日常的なレベルにおける道徳的なありようが
過剰なまでに求められているところがある
つまり「二人の亀治郎」が
かつてよりも厳しく求められるようになっている

ある意味でそうしたありようこそが
現代的なイニシエーションとして
求められているともいえるのだろうが
なかなかに困難な課題ではあるようだ

▪梅原猛・市川亀治郎『神仏のまねき』
（梅原猛「神と仏」対論集 第三巻　角川学芸出版 2006/10）
▪梅原猛・松岡心平『神仏のしづめ』
（梅原猛「神と仏」対論集 第四巻　角川学芸出版 2008/6）
▪山本ひろ子『摩多羅神／我らいかなる縁ありて』
〔春秋社 2022/8〕

（梅原猛・市川亀治郎『神仏のまねき』～「第一幕　ワザヲギの呪力／神降る場・神がかる肉体」より）

「市川／先生は直感が大事だとおっしゃっていたんですけど、まさに僕もそうです。先生は僕に「古典を勉強せなあかん」とおっしゃいましたが、僕が役者として古典を勉強する方法は、梅原先生の学問の方法をそのまま真似ているわけです。例えば、「この役をお願いします」って言われると、まずは、先輩方がやってらっしゃるものを全部学びます。そして書物に全部当たります。その次が懐疑です。
　歌舞伎界というのは、先人たちから伝えられてきた型は、全部正しいということになっているんです。だけど僕はそこで疑って、先輩が長年継承してきた型でも、本当にこの役の精神を表しているんだろうかと疑う。疑って疑って、それが今まで伝えられてきたのにはそれなりの理由があるわけですから、それも考え合わせた上で。
　間違ったものは間違ったものとして、きちんと吟味して、そして正しい型を構築したい。型を構築して、自分なりに作り上げてゆく。しかしながら演劇というのは論理も大事ですけど、論理を超えたところの「摩訶不思議」なところも大事だと思います。あまり理屈で芝居をすると冷たいものになってしまいます。
　それで自分なりに役を構築して、自分で納得したら、一遍全部忘れるんです。で、しばらく三日間くらいぼうっとしていると、パッとひらめくんです。「あ、これで行こう」って。それで舞台を務めると、だいたい納得いく形になり、それは学問の方法とまったく同じだと思うんです。ひらめきなんです。でも「原典」は大切です（笑）。
梅原／やはりね、直感が大事なんです。
（･･･）
梅原／私は直感が鈍いのはダメだと思います。だけど直感だけに頼るのは危ない。
市川／危ないですね。
梅原／理性がいるんです。芸術家というものは火のような創造の情熱と、水のような冷たい理性の両方を持っていなくてはならない。冷たい理性でいつも自分を眺めている目がいる。それを世阿弥は「離見の見」という。」

「梅原／亀治郎君が目指すところのワザヲギはどういうものですか。
市川／それはもう昔とは時代が違いますから、何でも呼び寄せなければいけないと思います。どのような役でもできなければいけない。そういう〝もの〟に瞬時にして乗り移れる直感、感覚が必要です。それにはあらゆるものを知っていなければいけないし、あらゆるものを学ばなければいけない。そういう意味で言うと大事なのはやはり「感覚」ですね。」

「市川／創造者というのは晩年、守りに入ってしまう傾向が強いようです。
梅原／それは駄目だね。
市川／守りに入らないために、いつまでも攻めでいるには勇気が必要です。
梅原／勇気は必要。学者でも芸術家でも勇気は必要なんです。
（･･･）
市川／学者で勇気と言うと、例えば西洋の学者は、一神教だと唯一絶対の神がつまり真理で、神と自分個人というような一対一の契約になる。契約というか、神に対峙する自分であるから、自然と勇気が湧いてくる。しかし日本人というのは唯一絶対の神というのを持ってないから勇気が育ちにくい環境にある。その中にあって先生の勇気というの･････先生の神、西洋の唯一神に代わるものは何なんでしょうか。
梅原／怨霊だと思う。怨霊が憑いているんだ。」

「市川／勇気と関連して思うんですけど、僕は最澄という人間が好きです。最澄にしろ法然にしろ、大きいことを成し遂げる人はどこか孤独じゃないですか。肖像に描かれた最澄さんを見ても、どこか孤独で寂しさを漂わせている。だけど孤独に耐える力があったと思うんです。
梅原／孤独に耐える力が日本人には足りない。西洋人にはあなたが言ったように絶対神があるから、神さまが味方だから強いことが言える。
（･･･）
市川／やはり「密なるもの」、静かな声はざわざわしていたら聞こえないんで、独りで、静かにいること。それで好奇心を持ちつつ･････そういう声を常に聞こうという姿勢ですね。
　ただ日本人って、今の若い世代は特に孤独に耐えられないですね。
（･･･）
　耐えられないと変てこな神を求めて、怪しげな宗教に走ることになるんですね。
（･･･）
　今の若い世代が孤独に耐えうるために、西洋でいう一神教の神のような、そういうものに代わるものは先生、例えば何だと思われますか。（･･･）
梅原／それこそ怨霊が一番いいんだけどな。（･･･）
市川／でも怨霊を鎮魂するという行為に向かえばいかがでしょう。
梅原／そう、鎮魂です。」
（･･･）
市川／俳優の、ワザヲギの持つ呪力の一つは、変身です。この世ならざる存在へ変身する。これは仏教で言う、例えば即身成仏に近いような、自分にないものに変身するという、そのことによって自分が救われる、みたいなものだと思っています。これも一種の鎮魂でしょう。役者に限らず人には誰しも変身願望というものを多少なりともあると思います。」

（梅原猛・市川亀治郎『神仏のまねき』～「第二幕　ワザヲギの運命／神に見せる・神を魅する」より）

「市川／我々は役者であって、語り部です。ものを「カタる」というのは演劇の基本だと思います。
梅原／理性的な亀治郎と、神がかっている亀治郎の二人の亀治郎がいると思うけど、それはいつ変化できるものですか。
市川／常にでしょうね。同じ存在の中に常にある。先生も僕も一緒だと思うんですけど、熱中しているのと、非常に冷めている自分とが同居している。
　僕は役に近づいてゆくというタイプではなく、完全に霊が乗り移ってくるタイプ、憑依型です。でもなかなか降りてこない（笑）。
梅原／降りてこない時がある？　僕はものを書くときは確実に降りますね（笑）。
市川／先生の方が役者に向いてるんです（笑）。
梅原／例えば亀治郎さんは舞台に立った時に乗り移るかもしれないけど、僕は飛行機の中でもどこでも乗り移ってる。
市川／そこは役者との違いですね。役者というのは乗り移る時期を選べるんです。だから「ワザヲギ」なんです。
梅原／自分から呼ぶわけですね。」

（梅原猛・松岡心平『神仏のしづめ』～「第一章　能の力／怨霊鎮魂劇」～「能とディオニュソス」より）

「松岡／私は先生の〝もの〟に対する姿勢にとてもすごさを感じています。それから仏教、先生に仏教と能の話を聞きたかった。さらに欲張って哲学です。先生のディオニソスてきなるものを知りたかった。
　ギリシア人が考えいたゾーエーという永遠の生命がディオニソスの祭の中で噴き出してくる、それを芸能にしたのが能だと思うんです。そういうディオニソス的芸能としての能に梅原先生が魅せられているのかもしれないですし、私もそこがポイントかなと思います。
梅原／ニーチェの『悲劇の誕生』も結局ディオニソスの霊に魂が憑かれて書いた、いや書かされた書であると言えます。
松岡／『悲劇の誕生』について、私はまだまとまった考えを持っていませんが、ギリシアの仮面劇がディオニソス祭祀のあたりから出てくる流れと、日本の能という仮面劇が多武峰などの常行堂修正会で行われる摩多羅神の祭祀のあたりから出てくる流れは重なっていると思います。
梅原／私は、摩多羅神は暴れる神、荒々しい神と感じました。広隆寺の牛祭は摩多羅神の祭ですが、この神は日本産でも中国産でもインド産でもなく、中央アジアの方からやってきた、そういうニュアンスや匂いがしまう。どこかディオニソスに繋がっている。詳しくは調べていませんが直観的にそう感じます。それがいったいいつからきたのか。すでに秦河勝の時代からきていたのか、それとも円仁によって移入された浄土念仏とともに平安時代にやってきたのかわからないがまったく不思議な神です。
松岡／例えば現在のディオニソス研究では、中央アジアからやってきたと言われるのはディオニソスの持っている圧倒的な他者性というのか、外から訪れる客人（まれびと）としての神のことだという解釈も出てきているようです。つまり特定の地域からやってきたと言わなくても、もっと古いギリシアの古層、あのあたりの土地の古層の神が、新しい植民都市を造ってギリシアが世界に伸していこうとする時に噴出してくるという考えでもいいと思います。
梅原／おっしゃる通りです。能をディオニソスの演劇として捉えるのは私はたいへん面白い考え方だと思う。」

（山本ひろ子『摩多羅神／我らいかなる縁ありて』～「第一章　摩多羅神と夢の女人ーーーー壇上遊戯としての恋」より）

「「摩多羅神」という奇妙な名前をもつ神がいる。どちらかと言えば、真言系よりは天台宗系寺院の、それも常行堂という仏堂にゆかりの神で、現在でも日光山・毛越寺などの常行堂に祀られている。」

「摩多羅神は謎のヴェールに覆われており、その由緒・出自は杳として窺い知れない。おぼろげながらわかるのは、日本古来の神でもなく、教典に記された仏菩薩でもないことだ。中世の叡山では、慈覚大師円仁が唐より帰朝するとき、船中に示現し、「わたしは障礙神である。わたしを奉斎しない者は浄土往生を遂げられないだろう」と告げたと伝えられている。
　また摩多羅神はダキニ天や大黒天と同体とみなされたが、そのことは逆に、すでに中世にあって摩多羅神の実態が判らなくなっていた消息を物語る。「マタラ」という異風な名前をもつ神･････原・摩多羅神は、どうやら外国からやってきた「異神」であったらしい。
　摩多羅神の神秘性をいっそう際立たせるのは、その祀られ方である。あまりにも霊力が強く、秘匿すべき性質の神だったからか。阿弥陀仏の背面や堂内の隅に秘密裏に祀られた。つまり、摩多羅神は、一般の信者が参拝するような神ではなく、あくまで常行堂と堂僧らのための「深秘」の本尊であったのである。
　摩多羅神は、そのおそるべき降魔の力で、修行や念仏行事において天魔・天狗のたぐいから行者を守った。行者は、己れの超能力を高めるためにも、摩多羅神のパワーを仰いだと思われる。」

「やがて摩多羅神は、歌舞の神・芸能の神とも仰がれるようになる。それを端的に示すのが、鼓を打ち歌う摩多羅神を中尊に、左右に踊る二童子を配した、摩多羅神曼荼羅図だろう。
　つまる摩多羅神には、（一）修行の本尊、（二）歌舞・芸能の本尊という、ふたつの属性と働きが認められる。
　ところで摩多羅神がその霊力を発揮したのは、常行堂でも修行や法会だけではなかった、常行堂の外で、秘密結社的なイニシエーションの本尊という役割を演じていたのである。
　中世叡山の天台宗は、密教の灌頂作法にならいつつ、口伝法門という特殊な世界を形成していた。（･･･）
　この玄旨灌頂の本尊とされたのが、摩多羅神と眷属二童子である。」

☆mediopos-3119　　2023.6.2

「人間がいなくなっても川は存在し続ける」
「だが、人間はといえば、川がなくては生き延びられない」

地球はその歴史の最初期から川を生みだし
あらゆるところに川は存在するようになった

川はすべてを下流へと運び
隆起して山となった場所では山を削り
地殻プレートの生成によって海ができると
川はそこを埋め立てていく

流れの最後には海や湖とひとつになるが
やがて蒸発し地上高く舞い上がり
また山を削り始める
そんな循環を繰り返し
「破壊と建設のプロジェクト」を続けていく

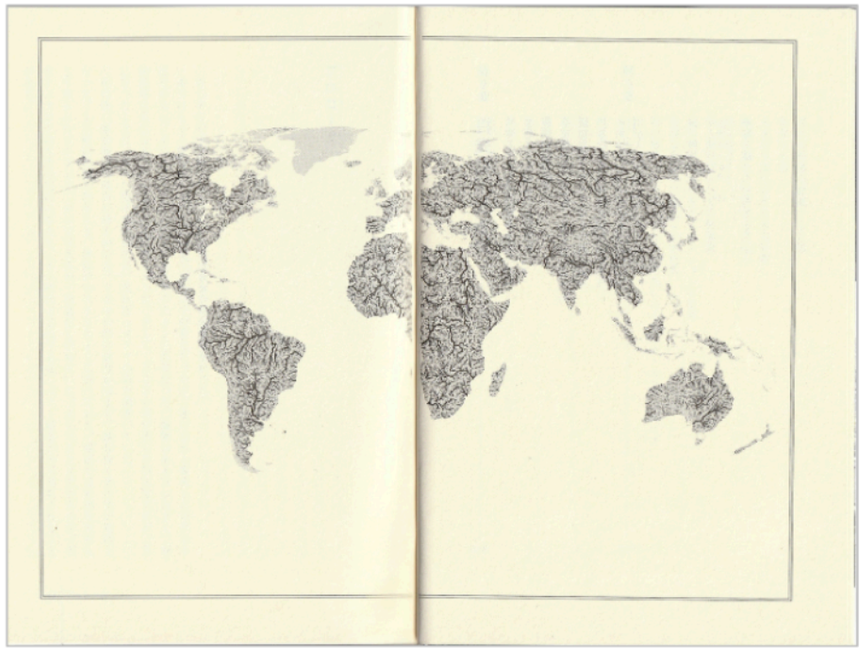
川は人間の文明にとって
非常に重要な役割を果たしているのだが
いまはそれが「とてつもなく過小評価されている」という

「河川がまったくなければ、世界は私たちにとって
認識しがたい姿となっていただろう」
「私たちの定住パターンはまったく違う形で進化し、
農地や村がオアシスや海岸線にしがみつくような形になっていただろう。
戦争も違った形で進行し、国の境界線も今とは違うものとなっただろう。
今あるもっとも有名な都市はいずれも存在しなかっただろう。
今日の人類のあり方を決定づけている、世界的な人の移動や貿易も、
生まれることはなかったかもしれない」

そのように本書は
人類の暮らしと深く関わっている河川の「見えない力」を
浮き彫りにしていく文明論となっている

訳者もあとがきで述べているように
「人間の生活を形づくってきた川について理解を深めることは、
ものの見方を変化させ、深めることでもある」

ふだんはあまり意識していないような視点
たとえば世界を「水」や「川」から見てみるだけでも
ものの見方を変化させ広げ深めるきっかけとなる



▪ローレンス・C・スミス（藤崎百合訳）『川と人類の文明史』（草思社 2023/2/22）

それは水や川だけに限らない

岩石や鉱物・動物や植物・虫たち
あるいは地球などの星
または見えない霊的存在などなど

それらの視点から世界を見たとき
そこにはどんな世界が広がっているのか
想像力を飛翔させてみる

それは「私」が「私」を超えていくための
重要な契機となり得る
逆にいえばそういう想像力をもてないとしたら
ひとは「私」という牢獄のなかにいても
それに気づけないままでいることになる

▪ローレンス・C・スミス（藤崎百合訳）
『川と人類の文明史』（草思社 2023/2/22）

（「プロローグ」より）

「遅くとも40億年前には、原始の空から雨が降っていた。水が溜まって湖となり、地中へと染みこむ。地表を伝う水が、細い流れに、小川に、そして川となって、新しく生まれた海へと注ぎ込んだ。水は蒸発して有毒な大気中へと広がり、凝結して雲となり、雨となって再び地面へと降り注ぐという循環が完成した。水は、まだ若く厚みを増つつある地殻への浸食を開始し、こうして水と大地の永遠の戦いが始まった。

雨は少しずつ高地を崩し、低いところに溜まった。岩を砕き、鉱物を溶かす。山を削り、その残骸を低地と押しやった。雨粒が出会い、集まり、その強さを増した。合流を何度もくり返し、数えきれないほどの雨粒が合わさって、大きな力となる。こうして、川が誕生した。

川にはひとつの役割があった。すべてを下流へと運ぶことだ。下へ、下へ。そして海へ。

衝突した地殻が隆起して山になった場所では、水と重力が協力して山を削った。地殻プレートが身をよじって新しく海ができると、川はそこをこつこつと埋め立てた。たくさんの根が１本の茎へと収斂するように、濁った泥水が合流する。砂利が押し合いへし合いして流れは分岐しつつ、すべてが最後の目的地を目指すのだ。

流れの執着点で、川はその生涯を終えて海や湖とひとつになる。旅路の果てまでやってきた川は、堆積物をそこに落とすと、蒸留酒のように蒸発し、再び空高く上昇し、舞い戻った先の高地を攻撃し、平らにし、運び、再び捨てる。山々は頑丈だが、もっとも力強い頂ですら、この休むことのない敵の前には陥落するしかない。水の循環は、あらゆるものに打ち勝つのだ。

遅くとも37億年前には、川は堆積物を世界中の海へと着実に押し出していた。その数億年後、地球で最初に光合成を始めた青緑色の藍藻（シアノバクテリア）が、酸素を含んだ空気を生成するようになった。そして、約21億年前に、この酸素生成量が急増する。黄鉄鉱（別名をfool's gold〈愚者の黄金〉という）など、酸化しやすい鉱物は川底から姿を消した。また、世界中で、鉄分を豊富に含む土壌が錆のように赤くなった。

さらに、10億年以上が経過した。そして、今から8億年から５億5000万年前にかけて、海で生成される酸素の量が再び増加した。海綿や扁形動物など、奇妙な姿をした海の生き物が誕生する。これらの初期の生物はその後もしぶとく生き延び、進化し、ついには奇妙にして豊かな形で世界中にはびこるようになった。

その間に、大陸は厚さを増し、そしてぶつかりあった。新しい山脈が盛り上がっては崩れた。山をつくりあげていた岩石は、その姿を変えはしたが、物質として失われることはなかった。容赦のない川の流れによって岩の欠片が低地へと運ばれ、流域に広大な平原が形成された。運ばれたものが何層にも厚く積み重なって、盆地や海をゆっくりと埋めていった。河口にできた三角州が広がり、はるか沖合にまで新しく土地が押し広げられた。

川は、本当に、あらゆるところに存在する。軌道をめぐる宇宙探査機によって、私たちは他の世界にある川の姿を見ることができる。かつて水が豊富にあった火星の地表には、古代の川によってつくられた、今では乾いた水路や三角州、層状の堆積物が残っている。また、土星から遠く離れた衛星タイタンの極低温の表面では、今この瞬間にも川が盛んに流れている。流れているのは液体メタンで、その流れが削る川床は氷だと考えられているのだが、その流れがつくる谷や三角州や海などのパターンや地形は、薄気味悪いほど地球に似ている。

（･･･）

私たちの世界で、この破壊と建設のプロジェクトが終わりを迎えることはない。山脈は隆起し、叩きつけられて砂となる、岩相は、流域へ、三角州へ、沖合の大陸棚へと運ばれる。プレートテクトニクスと水という古の二大勢力が織りなす、世界の表面を形成するという戦いのなかにあっては、どれほどの地層も地滑りも荒れ狂う洪水も、ほんのわずかな痕跡にしかならない。この戦いは少なくともあと28億年ほどは続くだろう。死に向かい膨脹し続ける太陽が、地球上の最後の一滴を蒸発させる、そのときまで。

現在、川は、その積み荷を海まで運ぶのに苦戦している。ガチガチに固められた都市部を通り、ダムに阻まれ、工学者により管理され、ほとんどの人からは顧みられることもない。それでも、最後に勝つのは川なのだ。人間がいなくなっても川は存在し続けるのだから。

だが、人間はといえば、川がなくては生き延びられない。」

「本書で強く訴えたいのは、人間の文明に対する川の重要性が、とてつもなく過小評価されているということだ。もちろん、川にはさまざまな実用的な面での重要性があって、たとえば飲み水、発電所の冷却水。下水処理などに利用されている。しかし、もっと見えづらい形でも、川は人類に大きな影響を与えている。」

（「第９章　再発見される川」より）

「人ルウ死をとおして、河川は自然資本、アクセス、テリトリー、健康な暮らし、そして力を提供し、私たちを魅了してきた。河川がつくる平坦で肥沃な流域は、食料と水を与えて人類を支えてきた。

（･･･）

人類は世界中の川岸に転々と居住地をつくり、それが発展して町や都市、そして大都市が生まれた。

後の世代の人々は、その恩恵を受けながらも、川をほとんど意識しなくなった。川はただそこにある気持ちのいい景観となり、その価値は必要不可欠ながらも限定されていた。魚を与えてくれるもの。水利王国の灌漑用水。大陸探検のための道。工業化を成功させる要因。汚染物質を押し流してくれるもの。電力を生みだすもの。乾燥地帯を開拓する源。発電所の冷却剤。環境保護運動と技術発展を触発するもの。不動産開発の機会。ストレスの多い都会人の心を癒やすもの。どの世代にとっても、河川の価値は明らかで、実用的で、当たり前でさえある。長い目で見なければ、人類の文明にとっての、川の根源的な重要性はわからないのだ。」

「都市国家の発明から地球の探検まで、領土の争いから都市の誕生まで。エネルギーの獲得から経済の工業化まで。人の連携、環境保護運動、技術を発展させるための触媒から、都市で暮らす何十億という人々のための整備された自然の空間まで。川はいつもそこにある。

私たちのまわりのあらゆるところに、脈打つ大動脈のような巨大な力が潜んでいる。その力は、どんな道路よりも、どんなテクノロジーよりも、どんな政治的指導者よりも、私たちの文明を形づくってきた。その力によって、新天地が拓かれ、都市の基礎が築かれ、国境が定められ、数多の人が養われてきた。生命を育み、和平をもたらし、権力を与え、その道すがらにあるすべてを気まぐれに破壊する、強力な力。ますます飼いならされ、枷をはめられてさえいても、その古代の力は、今なお私たちを支配している。」

（「訳者あとがき」より）

「人間の生活を形づくってきた川について理解を深めることは、ものの見方を変化させ、深めることでもある。翻訳にあたって調べ物をしたり何度も読み返したりするうちに、川や水に関する視点が変わるのを感じた。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」。人間も、読書をとおして自分のなかに文字を流すことで、見た目は変わらなくても、もとの自分ではなくなるのかもしれない。」

「訳者と川との関わりも、浅からぬものがある。子どもの頃の実家は、庭先の石垣から顔をのぞかせるよ、真下に幅10メートルほどの川が流れていた。川べりまで簡単に下りることができて、子ども時代は釣りや水遊びをよくしていたし、年末になると母が川で障子を洗っていたのを思い出す。祖母や曾祖母の世代は洗濯や食器洗いも川でしていたという。かつてはこの川が移動手段であって、祖母は川を往来する巡航船を使って通学していたらしい。実家の家業は石灰工場だったが、その昔は採掘した石灰を輸送するために船（「石船」と呼ばれていた）が使われていたそうだ。まさに著者のいう「アクセス」である。そして、この文章を書くにあたりはじめて知ったのだが、高祖父が汽船会社を経営していたと聞いて驚いた。孫の私が川の本を訳すのも何かのご縁なのだろう。

この川も、今では護岸工事が行われ、実家とのあいだに小高い堤防がつくられた。川との距離は広がって、以前のように子どもの遊び場となることはもうなくなった。安全にはなったものの、川から距離を置かれたようで寂しくもある。だが、たとえば蛇口をひねって出てくる水の一部はもとを辿れば河川水なのだから、分流と処理を繰り返された小型の川が蛇口から流れ出すとも言えるだろう。私たちは、決して水の流れから離れることはない。」

○ローレンス・C・スミス(Laurence C. Smith)
ブラウン大学のジョン・アトウォーター・アンド・ダイアナ・ネルソン環境学教授、および地球・環境・惑星科学教授。初の著書『2050年の世界地図』(邦訳はNHK出版より刊行)は、ウォルター・P・キスラー図書賞を受賞し、2012年の『ネイチャー』誌エディターズピックにも選ばれた。ダボスの世界経済フォーラムでの招待基調講演をはじめ、講演活動も頻繁に行なっている。

○藤崎 百合(ふじさき・ゆり)
高知県生まれ。名古屋大学の理学系研究科にて博士課程単位取得退学。訳書に『砂と人類』『すごく科学的』『ハリウッド映画に学ぶ「死」の科学』(いずれも草思社)、『ウイルスVSヒト』(文響社、共訳)、『ディープラーニング革命』(ニュートンプレス)、『生体分子の統計力学入門』(共立出版、共訳)などがある。

☆mediopos-3120　　2023.6.3

フランス文学者で
現代詩・現代文学の評論・翻訳をはじめ
多岐に渡る仕事をされてきた
菅野昭正が三月七日に九三歳で亡くなった

「週刊読書人」（五月五日）に
「追悼＝菅野正明」ということで
フランス文学者の中地義和・塚本昌則による
対談が掲載されている

そのなかから五篇の詩人論
（北原白秋論／萩原朔太郎論／三好達治論／
伊東静雄論／西脇順三郎論）が収められた
菅野昭正の著書『詩学創造』について

『詩学創造』の「あとがき」にあるように
この五篇の詩人論は
それぞれの詩人の個別的なそれではなく
「あるひとつの問題系列を追いながら」
「彼らの創造した詩の世界をあらためて考え直」したもの

明治以降日本の詩人たちは
それまでの伝統的な短詩型文学から離れ
「新しい詩を創造するために、悪戦苦闘を強いられた」
「この五人の詩人たちが
それぞれどういう詩を創造したか、
新しい詩を創造するためにどういう詩学を編みだしたか」
菅野昭正の「関心は最初から最後までそこにあった」という

『詩学創造』は北原白秋論からはじまっている

「北原白秋にたいする関心の頂点に坐りつづけている歌」は
「白秋最後の絶唱」である次の歌だという

「内隠（こも）るふかき牡丹のありやうは
花ちり方に観（み）きとつたへよ」

ここで「詩人の眼の前に置かれている牡丹の花」は
「知覚できる表面のかたち」を
「見る視線」ではなく「観る視線」
つまり「観」の眼である

見ることと観ることとの違いについては
小林秀雄「私の人生観」における
「観見二つの見様」についての
「観は、日本の優れた芸術家たちの
行為のうちに貫通している」という記述にもあるが

詩的創造においては
「外部の世界のものの奥深い実相を見届けること、
そしてそれを透視した視線の喜びを書きとめることは、
詩が豊かになるための不可欠の要件」であり
白秋はその「極限近くまで登っていた詩人である」と
菅野昭正はその北原白秋論の最後に語っている

週刊読書人　2023年（令和5年）5月5日（4月28日合併）（金曜日）　雑誌20451-5/5

対談＝中地義和×塚本昌則
追悼＝菅野昭正　認識と創造

マラルメの詩を三時間で四行

詩の生命は何度でも よみがえる

超人的な…、文学の現在の鼓動を追う

週刊読書人

出版界に新風を
書店新風会

▪菅野昭正『詩学創造』（集英社 1984/8）
▪対談＝中地義和×塚本昌則　＜追悼＝菅野正明　認識と創造＞
（週刊読書人　2023年5月5日号・2023年4月28日合併）

塚本昌則は『詩学創造』のなかでも
「伊東静雄論」に刺激を受けたというが

菅野昭正は
「ひとが詩人になるそのなりかたは」
「ひとそれぞれに違っている」としても
「ひとりだけの秘密の詩の場所を所有する
という点に関しては、詩人が誰しも
同じ過程を踏まなければならない」といい

「伊東静雄が詩人になりはじめたのは、
宇宙の強制の声を聞きとったときからである」

「宇宙の強制の声」は
「外なる宇宙のどこからかひびいてくる無言の声」であり
それを感じはじめたときから「詩人になる道が開かれ」たが
それは「存在の根源を見つめる嶮しい場所」への道であり
伊東静雄は「その極点に近いところまで登りつめた」と論じる

五人の詩人たちはそれぞれに
それぞれの方法で
「観」の眼によって
ある詩作の根源にあるものを「幻視」し
あるいは（宇宙の強制の）「声」を見出し
それを詩作するべく
困難な道を歩んだのだといえる

菅野昭正の論じた五人の詩人の模索した方法論は
現代における詩作のためのそれとしては
すでに効力をもたないだろうが
そうした詩的創造のための歴史から学ぶことは必須である

私見だが
それはおそらくノヴァーリスが
すべての学問（科学）は哲学になったあと
ポエジーにならなければならない
といったことと通底している

現在科学や哲学が陥っているかにみえる
袋小路からの出口を見出すためにも
ポエジーからそれらを逆照射することが
求められるのではないかと思われるからである

「詩学」はそのためにも
常に「創造」されていかなければならない

▪菅野昭正『詩学創造』（集英社 1984/8）
▪対談＝中地義和×塚本昌則
　＜追悼＝菅野昭正　認識と創造＞
　（週刊読書人　2023年5月5日号・2023年4月28日合併）

（「対談＝中地義和×塚本昌則　＜追悼＝菅野昭正　認識と創造＞」より）

「塚本／私が最初に菅野先生の本で感銘を受けたのは、大学院に入った年に刊行された『詩学創造』（一九八四年、集英社）でした。萩原朔太郎、北原白秋、三好達治、伊東静雄、西脇順三郎が取り上げられています。中でも「伊東静雄論」に刺激を受けました。この論で展開されている、人は自分だけの「詩の場所」を見つけることで詩人になっていく、という洞察に目を開かれました。静雄の場合それは「強いられる」ことであったと先生は論じられています。自分の内に聞こえてくる、「外なる宇宙のどこからかひびいてくる無言の声」、その強制に従って、生活の仕方、存在のあり方を選ぶことが、伊東静雄にとっての「詩の場所」だった。この視点から読むと、伊東静雄の詩が身に染みるようにわかります。

　先生は五人の詩人について、それぞれ違う手触りで「詩の場所」を見つけていきます。三好達治であれば、「遠き」という一つの形容詞を通して、全作品に響く通路を見つけ出す。それぞれの詩人の中心で響き続ける、核心をなすものを摑み取る、そうした身振りを菅野先生の批評で知ったのです。

　そのように自分の詩の世界を構築していくのか、どんなふうに「詩の場所」を見出していったのか、先生は評論を通してその探求の道程を、示してくれました。」

「中地／塚本さんが挙げられた『詩学創造』の中で、私は「北原白秋論」も好きなんです。「内隠（こも）るふかき牡丹のありやうは花ちり方に観（み）きとつたへよ」という歌が冒頭に掲げられているのですが、牡丹の美とは、しおれてちるかけたところにこそ、その本質がある。それを「見る」のではなく「観る」のだと。この歌が北原白秋の作品の頂点に位置していると評価されます。菅野先生は、ここから白秋を掘り下げていかれるのですが、白秋の作品にもさまざまある中で、この歌が冒頭にくるというのはすごいと思いましたね。

塚本／「萩原朔太郎論」も印象的でした。「竹とその哀傷」について語られるのですが、見えざる竹の幻視は、そのまま詩が生成するときの意識の現象学だと言っています。つまり朔太郎は目に見える竹を描いているのではなく、自分のに芽生えて光る竹の姿を描いているのだと。」

（菅野昭正『詩学創造』〜「見つつ観ざりきーーーー北原白秋論」より）

「　　内隠（こも）るふかき牡丹のありやうは花ちり方に観（み）きとつたへよ
　　（『牡丹の木』）

　この一首をはじめて知ったのはもう三十年以上も昔のことになるが、その初心の頃いらい、これは私の北原白秋にたいする関心の頂点に坐りつづけている歌である。」

「「内隠るふかき牡丹‥‥‥」の三十一文字のなかには、なによりもまず花の内側に隠れている見えない宇宙を探り、それを掘り起こそうとする眼の動きが感じられる。詩人の眼の前に置かれている牡丹の花は、ただ知覚できる表面のかたちで眼を楽しませてくれるから珍重されるのではなく、あでやかにかがようその外形の背後に、花の生命を圧縮したもうひとつの幻視のかたちを見通させてくれるからこそ、詩人の眼をひきつけるのだ。このとき、詩人を誘っているのは牡丹の本質である。その誘いにうながされて、本質を《観る視線》が動き出すときに詩が発生する。この白秋最後の絶唱においては、詩は《観る視線》から生成しはじめる。」

（菅野昭正『詩学創造』〜「帰れない帰郷者ーーーー伊東静雄論」より）

「ひとはひとそれぞれに詩人になる。
　ひとが詩人になるそのなりかたはさまざまであり、ひとそれぞれに違っているものであるとすれば、詩人が詩人になるために通っていく道は、詩人と同じだけの数が数えられる道理である。」

「詩人になるために通る道筋こそ違っていても、ひとりだけの秘密の詩の場所を所有するという点に関しては、詩人が誰しも同じ過程を踏まなければならないようである。」

「伊東静雄が詩人になりはじめたのは、宇宙の強制の声を聞きとったときからである。どこから聞こえてくるのか分からないが、外なる宇宙のどこからかひびいてくる無言の声。それが或る特別な姿勢で宇宙に対することを強いたり、或る独特な視線で宇宙を観ることを命じたりする。その無言の声を感じはじめた瞬間から、伊東静雄のなかでなにかが変わり、詩人になる道が開かれはじめる。」

「イデアとしての故郷、純粋な要素に還元された宇宙と私は書いてきたが、いいかえればそれは詩人の存在の根が見出されるはずの場所ことでもある。存在の根源、存在の根拠という言葉こそ伊東静雄は筆にしなかったが、『わがひとに与ふる哀歌』以降、この詩人がほとんどただひとつの主題として選んだのは、そう名づけられるのにふさわしい領域の問題である。ものを見つめる地点から出発したこの詩人は、存在の根源を見つめる嶮しい場所へたどりつき、その極点に近いところまで登りつめたのである。すくなくとも『わがひとに与ふる哀歌』から『夏花』の頃まで、彼はなによりもまず思考と認識の詩人であった。」

（菅野昭正『詩学創造』〜「あとがき」より）

「この五篇の詩人論（北原白秋論／萩原朔太郎論／三好達治論／伊東静雄論／西脇順三郎論）を構想した最初のときから、五人の詩人をそれぞれ異なる視覚から眺め、個別的な詩人論を並べるつもりは私にはなかった。あるひとつの問題系列を追いながら、この五人の詩人たちの作品をあらためて読みかえし、彼らの創造した詩の世界をあらためて考え直してみたいと思ったのである。

　明治以降、日本の詩人たちが出会わなければならなかった難しい条件については、多くのことが言われてきたが、しかしそれは難しいという以上に難しいものであったことを、もう一度ここで強調しておきたい。その困難さは、世界のどこの文学の歴史もおいそれと類例の見当たらないような、空前絶後のものであった。伝統的な短詩型文学を詩的表現の容器として活用できる可能性がしだいに乏しくなり、百花繚乱といえば百花繚乱、種々雑多といえば種々雑多に、西欧の詩が視野に入り込んでくる混乱した状況のなかで、詩人たちは新しい詩を創造するために、悪戦苦闘を強いられた。

　萩原朔太郎を中心として、北原白秋、三好達治、伊東静雄、西脇順三郎は、さまざまな悪戦苦闘の過程を経て、新しい詩を創造した代表的な詩人である。この五人の詩人たちがそれぞれどういう詩を創造したか、新しい詩を創造するためにどういう詩学を編みだしたか。私の関心は最初から最後までそこにあった。五篇の詩人篇は、したがって同じ主題を意識しながら書かれたものであり、その一点で緊密に結ばれていると、私としては思いたいところである。

　もうひとつ、近代詩の山脈を築きあげてきた詩人たちの仕事をふりかえりながら、私はいつも現在の詩のことを考えていたことを附けくわえておきたい。この詩人たちが創造した詩が、現在そのままのかたちで効力をもつなどと考えるひとは、もちろん誰ひとりいるはずもない。文語定型が、詩的言語として生命を失った事実ひとつ思い出すだけでも、そこにはもう宰相の疑いすらいれる余地はない。しかし、この五人の詩人たちが詩と詩学を創造しようと試みた態度を現在の詩の状況のなかによみがえらせ、それを鏡として現在の詩の状況を照らしだせば、なにか見えてくるものがあるはずだと私は考える。いいかえれば、この五人の詩人たちの詩は、詩の現在にとって大事な遺産である。遺産を贈与してくれたのは、もちろんこの詩人たちだけではないし、私としてもいずれ機会を得て他の贈与者のことも考えてみたいと思うが、いまはとりあえず、歴史を無視する者は歴史に復讐されるとだけ言い添えるにとどめておこう。」

☆mediopos-3121　　2023.6.4

「無知学（アグノトロジー）」が
「現代思想」（2023年6月号）で特集されている

「無知学」とは
「歴史のなかで「無知」」が
いかにして作られてきたかを探求する学問」だという

無知といえば
「無知の知」という
ソクラテスのそれが知られているが
この特集の副題にあるように
その関心は「科学・権力・社会」における「無知」が
問題とされているようだ

ちなみにソクラテスの「無知の知」とされるものは
「不知」つまり知らないにもかかわらず
哲学的な「愛知」（知を愛する）に対立する
「知っていると思いこんでいる」「無知」を
自覚へと導く「不知の知」である

それはなんにで対しても「不知」を求めたというのではなく
「善、美、正義」など
人間の倫理や価値をめぐる「知」について
それが「何であるか」を問い続けるものであった

さて現在問題とされるようになっている「無知学」には
「科学史において、知らないということ自体の問題
もしくは、何かについて知らないとされてしまったこと自体が
問題ではないかと主張」するにあたり
二つのアプローチがあるという

ひとつめは
科学史や医学史において
あえて知らないとされてしまった「無知の領域」に注目し
その背景となる要因を問題にするもの

もうひとつは
ジェンダーについての科学史を扱うもので
科学が「構造的」に女性を排除してきたことを
埋もれた女性科学者の存在を見出すだけではなく
なぜ埋もれたのかその理由問題にするものである

▪隠岐さや香＋塚原東吾「【討議】無知の力と新しい啓蒙」
▪鶴田想人「無知学（アグノトロジー）の現在――〈作られた無知〉をめぐる知と抵抗」
▪納富信留「知らないということ――ソクラテスの哲学を究める」
（現代思想2023年6月号 特集＝無知学／アグノトロジーとは何か―科学・権力・社会）

そのように現代クローズアップされている「無知」は
「科学・権力・社会」における「無知」であり

科学は知を生みだすだけではなく
「無知」を作りだしてきたのではないかという問題意識から
これまでの科学史を見直し
そこで働いていた力の所在を明らかにすることで
それに抵抗していこうとするもののようだ

無知を作りだしてきた力とは
ひとつめの問題意識のもとにおいて論じられる
ロバート・プロクターの論文でいえば
三つある「無知」のうちの三つ目
「戦略的策謀、または積極的権威としての無知」のことだ

そうした「無知学」は
ある意味で「新しい啓蒙」のための動きでもあるが
おそらくそこには「啓蒙」の両義性の問題が生まれる

「啓蒙」（Enlightnment）は光を当てること
そして無知学は「無知」という「闇」に
「光」を当てる啓蒙だが

その際だれがどのように「光」の基準を作り
光を当てようとするかが問われなければならないが
そこには「科学の権威」の問題がでてくるのである

現代は宗教的権威にかわり
あらたな権威として「科学」が信仰されがちななか
国家やメディアが「科学の権威」の旗印のもと
「啓蒙」を行おうとする働きかけが強くある

そして国家やメディアの「啓蒙」の意図に反するものは
ネガティブな評価がなされがちである
ときにその「啓蒙」は「光」ではなく
「闇」をもたらすものにもなりかねない

そして「闇」に啓蒙された「権威好き」の人たち
あるいはそれによって利益を得る人たちは
「科学の権威」を「知」だと思い込んでしまう

それはまさに
ほんらいの「不知の知」という自覚が
欠如している状態にほかならない

その意味で「無知学」が探求される際には
背景にある「科学・権力・社会」を問いなおし
そこにおける「啓蒙」そのものの両義性が
常に自覚されていることがその条件となるだろう

▪隠岐さや香＋塚原東吾「【討議】無知の力と新しい啓蒙」
▪鶴田想人「無知学（アグノトロジー）の現在ーー〈作られた無知〉をめぐる知と抵抗」
▪納富信留「知らないということーーソクラテスの哲学を究める」
（現代思想2023年6月号 特集＝無知学／アグノトロジーとは何かー科学・権力・社会）

（「【討議】無知の力と新しい啓蒙」より）

「塚原／学問は知を扱いますが、「知っている」ということだけではなく「知らない」ということ、もしくは「知られていない」ことを考え直さなければいけないのではないかという考え方は、昔からあります。歴史をさかのぼればソクラテスがひとつの典型ですが、最近では特に一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけての科学史において、知らないということ自体の問題もしくは、何かについて知らないとされてしまったこと自体が問題ではないかと主張しはじめた二つのグループ、二つのアプローチがあります。
　一つ目は、ロバート・プロクターとピーター・ギャリソンらのグループによるものです。彼らは科学の名のもとに、あえて知らないとされてしまった領域が存在していると指摘しました。（･･･）彼らは科学史や医学史において、あることについての知だけが研究されていて、研究されていない分野やそういったかたちで置き去りにされている領域、いわば無知の領域とされている部分があることに注目しました。知を自称する側には、そのような大きなバイアスがあることを曝し、そしてそれらの背景となる要因を指摘しました。科学史のなかで、無知に押し込められていた領域があるのはなぜかを問うことで始まった考え方です。
　もう一つは、ロング・シービンガーが中心になっている、ジェンダーについての科学史を扱うグループがあります。女性についての初期の科学史は、これまで知られていなかった科学史上の女性の功績を掘り起こすというやり方です。しかしシービンガーたちはそうではなく、そもそも科学が「構造的」に女性を排除してきたことを明らかにしました。埋もれた女性科学者を掘り出すだけではなく、埋もれた「理由」を問い始めたわけです。」

「塚原／私はどちらかというと、マルクス・ガブリエルが提唱する「新しい啓蒙」（New Enlightnment）的な立場に近いのかもしれません。彼は大胆にも「道徳的進歩」（moral progress）の必要性を提唱しています。パンデミックや戦争を乗り越えて持続可能性を保ち、差別や不平等を減らすためには、結局、人類胸痛の普遍的価値を求め、今までに不可能であったような人類全体の協力関係を構築するべきだという考え方です。そのためには人間性に対する高度な理解が必要とされます。何故なら、「新しい啓蒙」では個々人の理性はあてにできず、多様で限定的な理性を持つ弱い個人が、地域や人種、ジェンダー、年齢の違いや障害の有無がもたらすバイアスとともに対話を重ねなければならないからです。そのためには学術の全分野からの人間性把握が必要になります。私自身は彼ほどラディカルに「道徳的進歩」を信じきれていない部分はありますが、過去の啓蒙とは技術環境が違うので、こうした方向性は全くの夢物語でもないとも感じています。
　しかし、矛盾するようですが、一方でかつてのように専門知の権威が復権し、崇拝や信頼の対象となればいいのかといえば私には躊躇いがあります。私は引き裂かれた思いでいます。」

（鶴田想人「無知学（アグノトロジー）の現在」より）

「無知学とは、歴史のなかで「無知」ーーーー私たちの知らないことーーーーがいかにして作られてきたかを探求する学問である。」

「二〇〇八年の論文集『無知学』の巻頭に、プロクターは無知学のマニフェストともいえる論文を寄せている。
（･･･）
　プロクターはそのマニフェストの中で、無知を三つに分けている。

　①生来の状態としての無知
　②失われた領域、または取捨選択（受動的構成）としての無知
　③戦略的策謀、または積極的権威としての無知」

（納富信留「知らないということ」より）

「人々から「知者」と呼ばれていたソクラテスが強く「私は知らない」と言い続けた様子は、プラトンの多くの対話編では描かれている。彼が自認するあり方を「不知」と呼ぶとすると、その特徴は次の通りである。
　まず、ソクラテスが「知らない」と言っているのは、「善、美、正義」など大切なことについてであり、任意のどんな事柄も知らないという趣旨ではない。（･･･）
　第一に、ソクラテスには、後の懐疑主義者のような、「何も知らない」といった全称否定であらゆる「知」を疑ったり退けたりする態度はまったくない。（･･･）
　第二に、ソクラテスが「知らない」と言うのは、大きく人間の倫理や価値をめぐってであり、とりわけ「徳（アレテー）」と呼ばれた「人間としての善さ」に向けられている。（･･･）
　第三に、ソクラテスが「知らない」と言ったのは、徳をめぐるあらゆる命題ではなく、「何であるか」という問いへの答えであった。つまり、ソクラテスは徳について何も知らないとか、そもそも何も論じられないとか、そんな無責任なことを言ってはおらず、吟味をつうじて確信できることを認めていっても「それが何であるか」という最重要な点は「知らない」と語ったのである。（･･･）

　では、「何であるか（ティ・エスティン）とは何を尋ねる問いであり、そこで求められる答えとは何なのか。この問いを引き受けたアリストテレスは、それを「定義」と呼び、言論において「本質」を示すことだと考えた、師のプラトン派その二つを射程にいれつつ、「何であるか」への答えに「イデア」という存在を提示した。ソクラテスが「知らない」という形で強烈に問題提起した「何であるか」の探求は、ギリシア哲学の本道を切り開いたのである。」

「「何らかの点でより知恵がある」とアイロニカルに語られた「人間的な知恵」は、日本では一世紀にわらって「無知の知」あるいは「不知の知」という標語のもとで誤解されてきた。「知らないので、そのとおり知らないと思っている」という虚心坦懐に認め語りつづけるソクラテスを、「無知を知る」、あるいは「無知の知を知る」知者、偉大な教師として祭り上げてきたのが、近代日本のメンタリティである。
　ここで、プラトンによる「不知」と「無知」の明瞭な区別を確認しておこう。『ソフィスト』では、ただ「知らない」という状態である「不知（アグノイア）」を類として、分割された一方の種が「知らないのに、知っていると思っている」という「無知（アマティアー）」だと言われる。『法律』篇でも同様に、「過ち」の原因である「不知」という類が、二種類に分けられる。
（･･･）
　この二種類を分けるのは、「無知」つまり「知らないのに、知っていると思いこんでいる」という悪を取り除く必要があるからである。哲学の一つの任務は、そうした無知からの魂の浄化である。知を愛し求めるのが哲学だとして、そもそも知に向けて欲求が発動するためには、知らないという自覚が必要である。「不知」という状態はそれ自体では人間に宿命的な有限性に過ぎないが、「無知」は「愛知」に真っ向から相反する最悪の状態なのである。」

「善や美や正義など、私たちにとってもっとも大切なことについて「何であるか」を問いながら「知っている、知らない」という究極の場面から自己のあり方を吟味しつづけること、それがソクラテスの不知の自覚であった、天球を継続しながら、その都度「知らない」と確認し、その思いを抱きつづける彼の生き方は、自己のあり方を可能な限り透明にし、あるがままに受け止めることで、より善い生き方を目指す不断の営みであった。その「不知」に耐える強靱さが、ソクラテスの偉大さであり、哲学者の生き方という理想をもたらしなのである。私たちは、彼が突きつける「知らない」から目をそらさず、それを認めつづける生に耐えることができるだろうか。」

☆mediopos-3122　　2023.6.5

「普通」だとされることについて
「何度でも刃向かっていきたい」
と本書の「あとがき」で書かれているように

「普通」ではないことにたいする「圧」は
たとえそれが直接的なものではないとしても
そうでない者に多かれ少なかれ強くかかってくる

本書では
「父親とは」「母親とは」「子育てとは」といった
「普通の家族」をめぐる「当事者」の言説に対して
「第三者」としての「ではない」立場から感じられる
違和感から見えてきたことについて考えようとしている

著者の基本的な考え方は以下の通り

「何かを経験するというのは文字通り経験だが、
未経験を保つというのも経験だと考えている。」
「どんな人でも、大抵の物事は未経験で、
大抵のことには第三者である。」
経験者と未経験者が自由に重なり合うことによって、
意見をぶつけ合うことによって、物事は重層的になっていく。」

著者は結婚して１０年ほどになるが子どもはいない
子どものいない理由はとくにない
それでも直接的であるかどうかはともかく
「子どものいないあなたにはわからないと言われるけれど」という
「ではない」つまり「第三者」の視点から語っている

本書について「普通」の立場からどんな反応があるのかが
少しばかり気になったので
アマゾンのレビューを見るとその筆頭にこんな評が寄せられていた

「タイトルはとてもよいが」
「残念ながら期待にこたえられてません。
自分の子供と遊ぶのと、
他人の子供と遊ぶのでは全く次元か違います。」
父親になる実感は、なってみないとわからないでしょう。
経験していないことについて語ることの難しさを学びました。」

この評者はおそらく
「当事者」（父親）であることについて
「なってみないとわからない」
ということを強く語ってほしかったのだろう

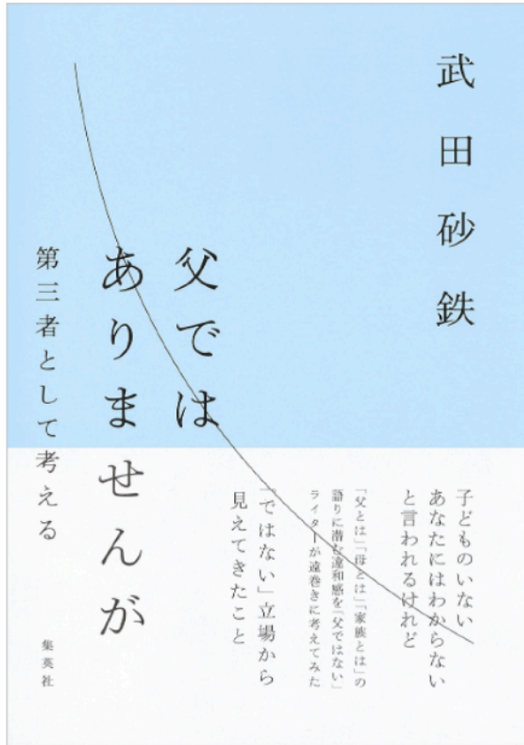
本書の趣旨を理解した評ではないが
まさにこれが「当事者」目線の
「普通」の反応だということがわかる

ぼく個人はこの著者と同じ「第三者」の立場なので
本書の趣旨が理解しやすいとはいえるだろうが
ここで語られているのは
「家族」問題だけではなく

「経験している当事者」の経験と
「未経験を保っている第三者」の経験とを
重なり合わせることで
「普通」から自由で重層的な観点を探っていくことであり

著者も言うように
「どんな人でも、大抵の物事は未経験で、
大抵のことには第三者」なのだから
じぶんにとって未経験のことに対して
「経験者」だけの視点だけで見てしまうと
その「蠅取り壺」の中から出られなくなってしまう
ということだろう

たとえばルドルフ・シュタイナーは
結婚は二度したのだがじぶんの子どもはいなかった
それにも関わらず
「父ではない」いわば「第三者」の立場から
「子どもの教育」についてさまざまな示唆を行った



▪武田砂鉄『父ではありませんが／第三者として考える』
（集英社 2023/1）

先の評者からすればこのシュタイナーに対しても
「実感は、なってみないとわからないでしょう」と
その当事者の視点から出られないことになる

当事者は当事者として
第三者は第三者として
それぞれがじぶんの外にある経験へとひらかれていくことで
重層的な理解を深める可能性を得ることができる

そのためにも「普通」であろうとする
根強い「圧」から自由であることが必要だといえる

▪武田砂鉄『父ではありませんが／第三者として考える』
（集英社 2023/1）

（「「ではない」からこそ」より）

「自分は１９８２年生まれ。２０１１年に、ふたつ下の妻と結婚して１０年以上が経つ。ずっと二人で暮らしている。すると、どこからともなく、あれ、子どもは作らないのだろうか、それとも、何か事情があるのだろうか、と詮索される。特に事情はない。事情はないが、もし、事情があったとしても、その事情は別に、誰かに伝える必要なんてない。結婚したら、子どもを産むもの、少なくとも産もうとするもの、という考え方が世の中にあることをよく知っているが、その考え方を、私や妻が背負う必要はない。」

「何かを経験するというのは文字通り経験だが、未経験を保つというのも経験だと考えている。経験者と未経験者が自由に重なり合うことによって、意見をぶつけ合うことによって、物事は重層的になっていく。どんな人でも、大抵の物事は未経験で、大抵のことには第三者である。当事者と、当事者でない人が結びつき、その当事者が抱えている問題を解決していく。即座に解決なんて難しいから、せめてこれ以上悪くならないように監視したり、ことあるごとに、どうして改善していないのかと指摘したりする。その時、立場によって言葉を発する資格を問うてはいけない。

　自分は父ではない、という前提に立ってみた時に、あれ、これって言ってもいいのかな、これを言ったら、あなたにそれを言う資格があるだろうか、なんて言われてしまうのではないかと、躊躇する事柄がいくつも浮上してくる。これがなかなか珍しい感覚なのだ。自分はこれまで、とりわけ日本社会で根深い男女格差の問題を、それなりの回数、男性の立場から指摘してきた。シングルマザーの貧困率が高いと聞けば、もっと公的支援が必要ではないかと書く。そこに、なんのひねりもない。当たり前の指摘だ、そもそも、ひねらせる必要がない。それに対して、あなたにそれを言う資格があるだろうかと言ってくる人もいない（いたのかもしれないが、さすがに目に入らなかった）、ところが、「父親」というカテゴリに吸い寄せられる議題について考えようとすると、たちまち、どうしてあなたが、が浮上してくるのだ。」

「「ではない」側から眼差しを向けたい。「ではない」側からも見なければ、ありとあらゆる全体像って見えてこないのではないか。もしくは、全体像なんて見えるものではありません。という意見も発することができないのではないか。父親になった、父親として、父親だからこそ、という言説が増えてきている。どんどん増えていったらいい。同じように、父親ではない人間が考える「親・子・家族とは何か」があってもいいのではないか。」

（「子どもがいるのか問われない」より）

「子どもを産むために結婚するわけではないが、結婚したら子どもを産むのが普通でしょうと考える世の中の雰囲気は、女性に対して、より強い「そろそろ結婚したほうが‥‥‥」を生み出す。雰囲気って、束ねると圧力になる。その圧力は、直接的に、そして間接的に繰り返される。人生相談にもっとも多い比較が、この結婚ｏｒ未婚、子ありｏｒ子なしに始まる議論である。経験の有無で比較され、経験したことのない人が、その経験を欲したり、経験したいとは思わないことへの悩みを吐露したりする。すでにそれを経験している人から投げかけられた心無い言葉を、何度も自分に刺して、心を痛めてしまう。山頂に到達している人から「おーい、どうしてまだそんなところにいるの？」と声をかけられる。早くこっちに来なよ、と。でも、そもそも、その山は、皆が登らなければいけない山なのだろうか。そんなはずはない。自分が登るべき山を、誰かから指定されたくはない。」

「父親ではない私が、父親であることを饒舌に語るインタビューなどを読むと、なるほどそういうことなのか、実際その立場になってみなければわからないことばかりなんだな、と勉強になる。でも、繰り返し言うように、どんな立場であろうとも、その立場になってみなければわからないことばかりなのだから、父親の語りを特別なものとして受け止める必要はない。そんな当たり前のことも、産んで育てるのが「普通」とされる圧を直接的に浴びない立場だからこそ言えるのだ。
　子どもがいなくても、特に何も言われない。同じような状況に置かれている妻は、やはりそのことをよく聞かれてきた。性差の問題ではなく、ただ単に話しかけにくい、そういった話をしにくい、という個人的な所作や態度によるものなのかもしれないが、子どもの話といえば、やはりまずは、産んだ女性の視線が向かう。同じようにして、産んでいない女性に視線が向かう。育児によって削られる部分が男性にはまだまだ少ない。と同様に、子どもを産んでいない、という状況について、他人からの乱暴な指摘を受けずにいられるのも男性で、「削られる部分」が少ないのだ。親ではない状態についても、男性に優位性がある、このことはもっと考えられなければならない。」

（「こどもが大人になったとき」より）

「夫婦二人で暮らしていると、とにかく、ずっと妻と話している。とりわけフリーランス稼業なので、朝昼場、大抵の場合は一緒に過ごす。家の近くの仕事場に出かけるとはいえ、長い時間を共にする。この時間がただひたすら積み上がっていく状態に、特段のストレスはなく、このまま年老いて最期を迎えるのかなんてことまで考えるのだが、私は、私たちは、未来を語ってはいけないのだろうか。はい、いけません、と言ってくる人はよほどの保守的な考えの持ち主で、幸いにも自分の近くにはいない。直接は言ってこない。でもどこかで、この人たちは受け継がなくていいのだろうか、未来が不安にならないのだろうかと思っているかもしれない。」

「こういう人たちが本音として抱えているものをいい加減壊していかないと、未来は、産むことを前提とした上で、子どものためにだけ用意されてしまうし、子どもは未来のために生み出されることになる。自分は自分のために将来を用意したいのだけれど、それではダメなのだろうか。ダメだとしたらなぜなのだろう。人の生き方を採点しようとする人を遠ざけたい、「自分の子どもが大人になった時にこんな日本では‥‥‥」、自分はその時、老人として、同じ空間を生きていたいと思うのだけれど、どうしたらいいのだろう。」

（「勝手に比較しないで」より）

「子どもの話は強い。勝てる。上回る。この通説というのか、状態を考えてみたいと思ってきた。本当にそうなのだろうか、という疑問をぶつけてみたかった。子どもについては、「いる」「できた」「ほしい」という状態からの語りが大半である。「いない」「できない」「ほしくない」という状態からの声は、なんだかあんまり声高に叫んではいけないように思われている。それは一体、なぜなのだろうか。誰が止めているのだろうか。止めてくる人は本当にいるのだろうか。イメージの産物なのだろうか。ここに迫ってみたかったのである。
　父ではない人間が、子育てや親であること、家族というものについて語ることは許されないのだろうか。そもそも、誰にどのような許諾が必要なのだろうか。」

「あるべき家族の形が保てなくなってきているならば、保てなくなってきた原因を探るのではなく、あるべき家族の形なんてものはあるのか。あるのだとしたら、なぜそれは存在しているのか。それ以外のあり方ではいけないのか、そっちから議論したい。結婚しているのに子どもがいない状態で、それなりに長い間暮らしていると、観察されているなと思う。直接言ってくるのではなく、少し離れたところから見られているような感覚。あの人たちはどうするつもりなんだろう、という目線がくる。それと付き合うのは正直面倒で、特段の反応をせずにそのままにしておく。」

「家族はこうやなくっちゃとか、やっぱり子どもがいたかたこそ、といった言説は、そうではない人を巻き込まないようにやってほしい。私は、私たちは、比較材料として生きているわけではないのだから。」

（「あとがき」より）

「数えたわけではないし、実際に数えたらそんなことはないのだろうが、この本でもっとも頻繁に使われている言葉は「普通」ではないか。普通という状態を勝手に決めないでよ、という主張を何度もくり返している。あまりに繰り返しすぎているので削ろうと思った箇所もあったのだが、世の中で凝り固まっている普通を疑いながら、必要に応じて壊したり溶かしたり削ったりするためには、何度でも言えばいいのかなと、そのままにしておいた。
　普通の家族ってさ。普通は結婚するでしょ。普通これくたいで子どもを。こうしてあちこちで投じられてきた「普通」がどのようなダメージを与えているのかは可視化されにくい。なぜって、普通の枠組みの中に入っている人は、当然、両隣にもその枠組みに入っている人がいるので、それ以外の部分に気がつきにくい。」

「気心知れた仲だからといって、個々人がその場で全ての事情や感情を明らかにしているとは思わない。隠していること、言いたくないことがあり。弾けているように、どこかで無理をしているのかもしれない。それぞれが当事者で、それぞれが第三者だ。「ではない」状態を生きている。
　今回は、父ではない自分から見えたものを書いてみた。それぞれの立場から、様々な読まれ方をするのだろう。そこでは意見の相違が生じるかもしれない。その時に、相違を無理やりになかったことにしようとする力に警戒したい。そこではやっぱり「普通」という言葉が用意されるはずで、そこに何度でも刃向かっていきたい。」

【目次】

「ではない」からこそ
子どもがいるのか問われない
ほら、あの人、子どもがいるから
あなたにはわからない
子どもが泣いている
変化がない
幸せですか?
「産む」への期待
孫の顔
男という生き物
「お母さん」は使われる
もっと積極的に
共感できません
人間的に成長できるのか
子どもが大人になった時
勝手に比較しないで
あとがき

【著者プロフィール】
武田砂鉄(たけだ・さてつ)
1982年生まれ。出版社勤務を経て、2014 年よりライターに。2015年『紋切型社会』でBunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。他の著書に『日本の気配』『わかりやすさの罪』『偉い人ほどすぐ逃げる』『マチズモを削り取れ』『べつに怒ってない』『今日拾った言葉たち』などがある。週刊誌、文芸誌、ファッション誌、ウェブメディアなど、さまざまな媒体で連載を執筆するほか、近年はラジオパーソナリティとしても活動の幅を広げている。

☆mediopos-3123　　2023.6.6

対話とは何か

非常灯の思考

戸谷洋志

連載 第5回　2023.5.23

対話の共同性――なぜ人は空気を読むのか？

▪戸谷洋志「非常灯の思考　対話とは何か」
連載第５回「対話の共同性――なぜ人は空気を読むのか？」（2023.5.23）

他者と対話するときには
対話に先行した共同性が必要となる

その「共同性」とは
対話に必要なところでは
「みんな」の一員であることだ

その「みんな」は
わたしでなくてもいい誰かであり
「わたし」も「他者」も
特定のだれかである必要はない

ある意味「みんな」として
共有されている言葉と思考表現で
アルゴリズム化されているChatGPTどうしが
対話しているようなものともいえる

つまり「他者」は実質的にそこにはいない

けれども通常わたしたちが日常において
交わしているコミュニケーションを
言葉だけとりあげるとすればその多くは
そうした「対話」以外のものではないことが多いだろう

ハイデガーは「このように道具の使用において
「私」が関係する「みんな」を
「特定の誰かではなく、誰でもない誰か」という意味で
「世人 das Man」と呼んでいる

とはいえこうした「世人」こそが
日常的なコミュニケーションを可能にしている

それは「「みんな」が言うことを、
「みんな」と同じように言うこと」であり
それは「「空気を読む」という行為によく似ている」のである

私たちは「常に、この場において何が逸脱と見なされるのか、
どんな言動が空気を読まないと評価されるのかを
意識しながら、語り合」っている

けれどもそうした「逸脱」は
たとえば芸術的な表現の場において
もちろんそこにはそれぞれの条件があるだろうが
許容されたり積極的に評価されたりもする

しかしそうでない場合の「対話」は
まさにChatGPT化されてしまった「みんな」のそれであり
そこは人間不在のものになってしまいかねない

「誰かと対話するためには、
その誰かと共同性を交わさなければならない。
しかしその共同性は「私」を「みんな」の一員にし、
非本来的にする。
この矛盾を乗り越えるにはどうしたらよいのだろうか」
というのが今回の論考の最後の問いかけになっているのだが

おそらくその際には
「対話」に付随した「人間であること」
つまり声・仕草などの身体性や
感覚・感情といった側面における
過剰な「逸脱」を避けた範囲内での要素が鍵ともなるだろうし

対話そのものの内容・表現でいえば
ChatGPT化され得ない
これも「人間であること」ゆえの創造性
あるいはポエジーなども鍵となってくるのではないか

それらは単に「空気を読む」だけの「みんな」として
「共同」化され得ないものだろうから

しかしそれらがなんらかの形で発揮されないとき
人間はすでに人間であること
つまり「自由」を失いはじめるのだといえる

▪戸谷洋志「非常灯の思考　対話とは何か」
　連載第５回「対話の共同性――なぜ人は空気を読むのか？」（2023.5.23）

「対話が始まるとき、そこには、対話に先行した共同性がある。他者と対話するとき、さしあたり――これが「さしあたり」であることは強調しておきたい――、「私」はその他者とバラバラの個人として関わるのではなく、「私たち」として関わっている。

　では、その「私たち」はどのようにして成立するのだろうか。

　たとえば、様々な社会的な属性は、そうした共同性の根拠として機能するだろう。国籍がその典型だ。しかし、日常的な対話の場面に焦点を定めるなら、それはあまりにも抽象的な共同性でもある。私たちは、同じ国籍を共有するからといって、いきなり街ですれ違った人と対話できるわけではない。そこには、もっとささやかで不確かな、その場限りの頼りない共同性が生じているはずだ。

　では、その頼りない共同性とはいったい何なのか。今回も、ハイデガーとともに考えてみたい。

　ハイデガーがこだわったのは、人間存在を日常的な生活のなかで捉えること、それによってそのありのままの姿を分析することだった。伝統的な哲学において自明とされてきた専門用語をすべて排除し、日々の何気ない姿から自ずと明らかになってくる人間のあり方を解明すること――それが、彼の考える現象学のアプローチだ。

　その際にハイデガーは、「私」が「存在する bin」を意味するドイツ語が、語源的に、「～の傍らにいる bei」という言葉と通底することに注目する。つまり存在するということは、何かの傍らにいるということなのだ。では、私たちには日常において何の傍らにいるのだろうか。それは、道具・・に他ならない。」

「道具を考えるときに重要なのは、それを使うことができるのが、「私」だけではないということである。たとえば「私」はストローによってコーヒーを飲むことができるが、「私」以外の人も、同じようにストローを使うことができる。というよりも、むしろ、「みんな」がストローを使えるからこそ、「私」もまたストローを使えるのだ。

　このようにして、ストローという道具は、「私」を「みんな」と関係させる。もっとも、ここでいう「みんな」は特定の誰かではない。それは誰でもない誰か、顔も名前もない誰かである。

（･･･）

　この意味において、道具を介した「私」と他者の関係は、「私」が実際に他者と出会うことを必要としない。別の角度から言い換えるなら、実際に他者と会っていなくても、「私」は関わりを断っているということにはならない、ということになる。道具を使う限り、そこに他者が現前していようといまいと、「私」は不可避に他者と関わっているからである。

　ハイデガーは、このように道具の使用において「私」が関係する「みんな」を、「世人 das Man」と呼んだ。世人には実体がない。なぜなら、特定の誰かではなく、誰でもない誰かだからである。「私」は世人と対面したり、コミュニケーションしたりすることはない。なぜなら世人は、「私」もまたその一員であるところのものとして、「私」が経験するものであるからである。

　しかし、だからといって世人がコミュニケーションと関係がない、ということではない。むしろ世人こそが日常的なコミュニケーションを可能にしている。」

「こうした会話が成立するのは、その会話をしている当事者が、道具の使い方を互いに分かっているから、つまりその道具を使うことができる「みんな」の一員であるからだ。ともに「みんな」に属することが、「私」と他者の会話を可能にするのである。

　こうしたハイデガーのコミュニケーションのモデルは、一般的に考えられているものとは異なっている。普通、私たちは、まず「私」と他者が別々に存在していて、その二人が出会い、自分の思っていることを話すことで、コミュニケーションが始まると考える。そして、そのように話がスタートすることによって、はじめて、それまで別の存在だった「私」と他者が、「私たち」になる。つまり、コミュニケーションが人間を「私たち」にし、そこに共同性が成立する、と考える。

　ところが、ハイデガーの発想に従うなら、この構造は逆になる。「私」と他者がコミュニケーションできるのは、双方がすでに「みんな」の一員だから、つまりもう「私たち」になっているからだ。もし、双方の間にそうした共同性が存在しないなら、何を話そうとも意思疎通ができない。それはコミュニケーションと呼べるものではなくなってしまう。

　ただし、こうしたコミュニケーションのモデルからは、豊かな対話の可能性を導き出すことができない。それはなぜだろうか。

　それは、「みんな」が世人として道具に関わる、という点にコミュニケーションの基点が置かれている限り、そのコミュニケーションもやはり道具的なものとなり、「みんな」と同じようにコミュニケーションしなければならなくなるからだ。

（･･･）

　道具との関係が希薄に思えるコミュニケーションも、同じ構造をしている。」

「「みんな」が言うことを、「みんな」と同じように言うこと――それは、「空気を読む」という行為によく似ている。」

「逸脱を犯す人は「空気が読めない人」と呼ばれる。そうである以上、世人として、「私たち」の一員としてコミュニケーションすることは、空気を読むことと同義なのである。空気とは、その場を支配する指示関係に他ならない。

　ただし、注意するべきことがある。たとえ「私たち」の一員としてコミュニケーションすることが空気を読むことだとしても、具体的に何を語るかまで決まっているわけではない。これが、ハイデガーの哲学の面白いところである。

　ハイデガーは、世人はある種の規範として機能すると考えたが、しかしその規範は、私たちが直接意識できるような対象として現れてくるわけではない。つまり、「みんな」が言うこと、「みんな」と同じように言うことが求められているにもかかわらず、何を言うべきかがあらかじめ決まっているわけではない。むしろ、その規範から逸脱する者、空気を読めない者が顕在化され、それが排除されることによって、逸脱ではない範囲が規範として緩やかに輪郭づけられるのである。つまり、どこからが逸脱で、どこからが逸脱ではないかは、あらかじめ規範によって画定されているのではなく、誰かが逸脱することで初めて意識されるのである。」

「ハイデガーは世人の規範性がもつこうした性質を、「懸隔性」と呼んだ。「みんな」の一員としてコミュニケーションすることは、こうした懸隔性に支配された会話を営むことである。常に、この場において何が逸脱と見なされるのか、どんな言動が空気を読まないと評価されるのかを意識しながら、語り合うことである。

　懸隔性は、多くの場合、暴力的な排除として立ち現れる。たとえば教室におけるいじめがその典型だ。ある日、誰かが恣意的に、「空気を読めないやつ」というレッテルを貼られ、いじめが始まる。すると、いじめられている生徒はその教室の逸脱者となり、そこから反照されるようにして、教室のなかの規範的な振る舞いが画定される。いじめられている生徒と同じ振る舞いをしないことが、空気として醸成されていく。しかし、その空気に従って行動することは、いじめに加担し、そのいじめを強化し、再生産するように機能する。

　とはいえ、懸隔性が常に暴力として作動するとは限らない。逸脱者は、必ずしも蔑まれ、馬鹿にされる対象とは限らないからだ。

　たとえば、音楽アーティストがそうである（･･･）日常において、私たちが決して口にしないような言葉を、アーティストは平気で語る。その言葉が観客を一つにするのだ。

　このとき、アーティストは明らかに逸脱者である。空気を読まず、私たちが日常において行うのとは異なる言動を、あえて行っている。しかし、だからこそ私たちは、その会場において一つの「私たち」という実感を得るのではないだろうか。アーティストが「私たち」を破る存在だからこそ、その言葉に接することで、観客は「私たち」になるのではないか。

　ライブにおいて立ちあらわれる、観客同士の異様なまでの親密感は、明らかにアーティストのコミュニケーションによって作り出されるものである。しかし、アーティストは空気を読んではいない。むしろ空気を破っている。「みんな」としてではなく、一人の個人として、自分以外の誰でもない自分として、語る。その言葉が、そこにいる人々の間に共同性を創出するのだ。

　もっとも、それを可能にするためには、アーティストは観客の心を深く理解していなければならない。つまり、観客に共感しながらも、観客がなしえないことをし、観客が従う規範を破らなければならないのだ。ここに、ただ空気を読めない人と、あえて空気を破るアーティストとの根本的な違いがある。つまりアーティストは、人々を「私たち」にするために、「私たち」を逸脱する言動をするが、それが可能なのは「私たち」を深く理解しているからなのだ。

　このことは、「型破り」という概念を考えると分かりやすい。型を理解せずに行われる行為は、たとえ結果的に型から逸脱したものであったとしても、「型なし」と評価されるに留まる。それに対して、「型破り」という積極的な評価を得るためには、型を身に着けていなければならないのである。」

「いずれにせよ、対話に先行した共同性があるとしたら、それを形作っているのは、その共同性を破る存在、「私たち」ではない逸脱者である。たとえ、そこに目に見える形で逸脱者が存在しないとしても、「私たち」は常に、「私たちではないもの」に支えられている。もしもそうした逸脱者が存在しなければ、「私」と相手の間に共同性は成立しないし、そこで何を語るべきか、語るべきではないかを、了解することもできない――少なくとも、それがハイデガーの哲学から読み取れる、対話のあり方だ。

　このような対話のモデルはどこか消極的に見えるかも知れない。実際ハイデガー自身も、世人に従ったコミュニケーションを「おしゃべり」と呼び、人間の頽落した姿の一側面として説明した。そのようにして形成される対話は、常に表面的なものに留まり、人間同士の本来的な関係性を構築することには資さない。なぜなら、対話する相手が誰であるか、自分が何者として語るのかは、本質的にどうでもよいからだ。「みんな」が言うことを、「みんな」と同じように語ることが要求されるとき、語る人間が誰であるかは問題ではなくなるのである。

　だからこそ、ハイデガーは人間が本来性を回復するために、他者との関係から自らを切断することが必要だと考えた。すなわち彼は、人間が本来の自分であるために、他者とミュニケーションすることを止め、孤立することが必要だと考えたのだ。

　彼の哲学の枠組みに従うなら、確かにそうなるだろう。しかし、それは結局のところ、対話そのものの否定なのではないか。

　誰かと対話するためには、その誰かと共同性を交わさなければならない。しかしその共同性は「私」を「みんな」の一員にし、非本来的にする。この矛盾を乗り越えるにはどうしたらよいのだろうか。」

☆mediopos-3124　　2023.6.7

Webマガジン「考える人」で
今井むつみと高野秀行による
「言葉は「間違い」の中から生まれる」
という対談が掲載されている
（2023年5月31日）

辺境ノンフィクション作家の高野氏は
世界の辺境で25以上の言語を実践的に習得してきた経験を
『語学の天才まで１億光年』として昨年上梓しているが
（mediopos2887/ 2022.10.13でとりあげている）

モーテン・H・クリスチャンセン・ニック・チェイター
『言語はこうして生まれる』の言語観が
（mediopos-3015/2023.2.18でとりあげている）
じぶんのそれと非常に近かったということに驚いたという

慶應義塾大学SFC教授の今井氏は
秋田喜美との共著で
『言語の本質』を先日上梓しているが
高野氏の言語観に注目していたということもあり
本対談は上記３冊の本を題材にし
言語習得について語り合ったものである

『言語はこうして生まれる』の言語観は
ひとは生まれながらにその「普遍文法」を知っているという
ノーム・チョムスキーの言語観への反論であり
人間は「ジェスチャーゲーム（言葉当て遊び）」によって
即興で言葉を生みだし
そのゲームが繰り返されることによって
言語の体系も生まれてきたというものである

おそらく言語習得にあたっては
「言語感覚」という生得的な潜在能力が
実際の「ジェスチャーゲーム」を通じて
顕在化するというのが実際のところで

生きた言語を学び習得するにあたっては
この対談で題されているように
「言葉は「間違い」の中から生まれる」
つまり「身体的な経験から始まって、
そこから自分で推論して輪を広げてい」き
それが「身体化され」ることで
言語は習得されていくのだろう

「オノマトペ」の話も興味深い

今井氏は2008年に
「言語の最初は、オノマトペやジェスチャーのように
世界の模倣であり、それを記号化したものなんじゃないか」
と
論文に発表して以来
それが受けいれられるようになってきたそうだが

「外国語のオノマトペ」は母語話者でないと
ほとんど分からないのだという

音を学ぶときには「音」の学習が最初で
意味を学ぶよりも先なので
音の学習の時期にインプットが足りないと
その感覚が養われにくいということのようだ

対談の最後で盛り上がっている
「アブダクション推論」の話が
個人自的にはもっとも興味をひかれた

アブダクション推論（仮説形成推論）
（結果から遡って原因を推測する論理）は
哲学者のチャールズ・パースによって用いられたもので

「論理学の真偽でいうとアブダクション推論は
「偽」で間違ってる」というが
「アブダクションをするから
人間は言語という体系を作ることができ」
「人類を進化させ、文化を作った」のではないかと
今井氏は語り

高野氏もそれを受けて
「僕は今まで自分のやってることを
「間違う力」とか呼んでましたし、
人からも呼ばれたりしてきたので」と賛同している

まさに「言葉は「間違い」の中から生まれる」

ちなみに「演繹推論は論理的には必ず真だけど」
「新しい知識を作らない」のだという

何も生みださないけれど論理的な正しさを選ぶか
間違うことをおそれず新たな創造を選ぶか

間違うことはどこか悪人正機にも似ているようだ

考える人
plain living & high thinking

- 対談 今井むつみ×高野秀行「言葉は「間違い」の中から生まれる」（2023年5月31日）
  前篇　AIは「ジェスチャーゲーム」を知らない
  後篇　オノマトペから言語が発達した？
- モーテン・H・クリスチャンセン・ニック・チェイター（塩原通緒訳）
  『言語はこうして生まれる／「即興する脳」とジェスチャーゲーム』（新潮社　2022/11
- 高野 秀行『語学の天才まで1億光年』（集英社インターナショナル　2022/9）
- 今井むつみ・秋田喜美『言語の本質-ことばはどう生まれ、進化したか』
  （中公新書 2756　中央公論新社 2023/5）

▪対談 今井むつみ×高野秀行
「言葉は「間違い」の中から生まれる」（2023年5月31日）
前篇　AIは「ジェスチャーゲーム」を知らない
後篇　オノマトペから言語が発達した？
▪モーテン・H・クリスチャンセン・ニック・チェイター（塩原通緒訳）
『言語はこうして生まれる／「即興する脳」とジェスチャーゲーム』
（新潮社　2022/11）
▪高野 秀行『語学の天才まで1億光年』（集英社インターナショナル　2022/9）
▪今井むつみ・秋田喜美『言語の本質-ことばはどう生まれ、進化したか』
（中公新書 2756　中央公論新社 2023/5）

（対談　今井むつみ×高野秀行「言葉は「間違い」の中から生まれる」〜「前編」より）

「高野／今井先生は、著者のモーテンさんをよくご存知だそうですね。

今井／友達とまでは言いませんが、すいぶん長い付き合いです。同じ分野の研究者なので、学会に行けば会うし、シンポジウムにいっしょに呼ばれて二人で講演をしたこともあります。

高野／それと、今井先生のプロフィールを見て驚いたのですが、先生は心理学者なんですね。ずっと言語学者だと思ってました。

今井／そうなんですよ。皆さんに、よく間違えられるのですが。

高野／この本の著者も心理学者ですか。

今井／彼らも心理学者で認知科学者です。だから普通の言語学者とは視点が全然違いますよね。統計的な観点から言語を見て、実験もする。すごく有名で、いい仕事をしている人たちです。

高野／僕はこの本を読んで、自分がこれまで「言語とはこういうものじゃないか」と考えてきたことに、すごく近いと思ったんです。僕は「ブリコラージュ」と言ってますけど、コミュニケーションは協同作業なのだから、正しさにこだわる必要はなく、その場にあるものを使っていかに相手に意図を伝えるかが重要で、むしろそれこそが言語にとって本質的なものなんじゃないかと感じてきたんです。自分の言語の学習方法がまさにそうで、体系的には全く覚えず、たまたま触れたものから順番に覚えていく。

今井／彼らの主張は、「言語はその場の必要を満たすために即興で生まれるジェスチャーゲームのようなものだ」ということですから、高野さんと本当に一緒ですよね。一回一回のコミュニケーションの結果として文法などの体系が生まれるのであって、先に文法があるわけではない。だから彼らは本書の中で、チョムスキー批判といいますか、「理想的な言語というのは幻想だ」ということをずっと言っていますよね。

高野／そうですね。

今井／私がこの本で「そうだ！」と膝を打ちながら読んだのは、言語は人間が作ったものだから、人間がうまく使えるように、人間が一番習得しやすいように進化したものなんだ、というところです。人間には情報処理の制約とか、習得の制約とか、推論の制約とか、記憶の制約とか、いろいろな制約がある。そういうものがあってできたものが言語なんです。私もほぼ同じことを新刊『言語の本質』で書いているので、そこは本当に共感というか、読んでて嬉しくなりました。

高野／そういう言語理解と比べると、チョムスキーの「生成文法」というのは、エンジニアリングの考え方に見えます。完成図というか設計図があって、言語はそれに沿って動いていくというものという見方です。

今井／エンジニアリングというより数学ですね。チョムスキーは数学者なので、数学的に美しいものを作りたい。

高野／そういう考え方って、学校で語学の授業を受けてると、すごく理解しやすいと思うんですよ。まず文法から説明されるから。」

「今井／私は高野さんの『語学の天才まで１億光年』も何度も膝を打ちながら読ませていただきました。私にはこんなアドベンチャーはとてもできないけど、すごく面白いと思いました。

高野／僕は言語を研究しに行ってるわけでも、習いに行ってるわけでもなくて、本当にかじってるだけです。

今井／でも、使いに行ってるんですよね。それが本当の言語の学習の目的であるべきです。

高野／それはそうですね。

今井／書いてあることに、いちいち納得できました。私は心理学者として、言語のあるべき姿の記述ではなく、言語が子ども個人の中でどのように習得されるか、歴史的にどのように進化・成長してきたのかに興味があります。言語の習得に限らず、「学び」全般についても研究しています。人はどうやって学んで達人になっていくのかとか、どういう知識がすぐ使える知識になるかとか。それを「生きた知識」と私は言ってるんですけど、高野さんがされているのはまさにそれなんです。

高野／少ないリソースで、いかにやりくりするかというのをやってきただけですけどね。

今井／本の中でも「それに、先生や教科書が教えてくれた文法事項はなかなか覚えないが、自分で発見したことは絶対忘れない」って、これって本当に「黄金の言葉」ですよ。

高野／黄金の（笑）。

今井／私はまさにこれを、全国の先生たちとか教育委員会の人に講演で言ってるんです。

高野／でも、言われても困るんじゃないですか。じゃあどうすればいいんだって。

今井／それは自分で考える。高野さんだって自分で考えてるから、生きた知識になるんです。

高野／そういえば僕もよく「語学習得のコツって何ですか」って聞かれるんです。「自分で考えろ」というのが答えなんですけども、そうするとみんなガッカリするし、そこで終わってしまう。

今井／学校の先生って「答えを教えてほしい」というマインドがすごく強いんです。でも、そういう人に教わると、子どももそういうふうに育つじゃないですか。先に答えだけ教えて、みたいな考え方だと、聞いて５分後には忘れてますよね。」

「今井／私は今の時代に一番大事な言葉として「記号接地」というのがあると思っています。もともとはAIの問題として考えられたもので、記号を記号で表現するだけでは、言葉の意味を理解することはできないのではないか。理解するためには身体的な経験が必要なのではないか、ということです。モーテンたちは本書の最後の方でAIについて論じていて、結局AIというのはジェスチャーゲームをしていない、する気もないし、そもそもプレーのし方を知らないということを書いています。記号接地という言葉は使ってないんだけど、これはコンセプトとしては記号接地のことを言っているんですよね。

高野／記号接地というのは、リアルに感じられているということなんですか。

今井／私の定義では、身体の一部として感じられるという感じです。必ずしも全部について身体的な経験がなくてもいいんですけど、身体的な経験から始まって、そこから自分で推論して輪を広げていく。その輪というかチェーンによって作られたものは身体化されるんじゃないかと。高野さんの書かれていることは、すごく記号接地しているなと思った。

高野／そういう意味では、記号接地したことしか書いてないですから（笑）。いわゆる一般論とかそういう話が苦手なんです。考えれば考えるほど、いろんな要素が入ってきて、分からなくなっていく。そういう抽象的な話を「空中戦」と言う人もいますから、やはり接地してないイメージなんですね。

今井／ええ。とはいえ、私たちは全てを経験できるわけではないので、全てを接地できるわけではないんです。でも、どこかは接地していないといけない。ほかの人が発見したものや、書かれたものを読んで覚えただけだと、決して接地しないですね。

高野／言葉って、決まったフレーズとか文章だけじゃなくて、どういう文脈で話されているのかが、決定的に重要じゃないですか。

今井／そうですよね。

高野／逆に言うと、意味なんか分からなくても、こういう場面だったらこう言えばいいっていうものがたくさんあって、そういうものから成り立っている。

今井／そうですね。子どもも最初そういうふうにして言葉を覚えます。だからけっこうな頻度で間違えるんですが、高野さんが書かれているように、間違ったら修正していけばいい。そのほうがずっといいと思うのですが、やっぱり多くの大人の学習者、特に日本人は正解を求めるところがあります。」

（対談　今井むつみ×高野秀行「言葉は「間違い」の中から生まれる」〜「後編」より）

高野／今井先生も最近『言語の本質』（秋田喜美氏との共著）という本を出されましたよね。

今井／はい。この本では、どうやって言語の多様性が生まれ得るんだろうかということを真剣に考えてます。『言語はこうして生まれる』が出るとは知らずに書いたものなんですが、根っこが同じだから、言いたいことはすごく似ていると思いました。

高野／読ませていただきましたが、オノマトペですよね。

今井／そうですね。一つはオノマトペで、もう一つは人間がどうやって推論するのかということ。だからオノマトペと推論です。

高野／オノマトペは音象徴とも言いますよね。

今井／はい。

高野／音象徴という言葉は、最近特に目にするようになったと思うんです。僕は言語学のことはいくらも知らないんですけど、ソシュールが言っていた「記号と意味の恣意性」というのがあります。記号と意味は、直接には関係がないという。日本語では「行く」だけど、英語では「go」で、全然関係がない。そういうのだと思ってたんですけども、いろんな言語をやってるうちに少しずつ、それだけじゃなくて、音自体が似てるものっていろいろあるじゃないかっていうことに気づいてきた。例えば「切る」という言葉だと、大体「ｋ」か「t」の音が入ってるんですよね。日本語だと「切る」でしょ？　英語だと「カット」でしょ？　タイ語だと「タット」なんですよ。で、リンガラ語だと「カタ」なんですよ。

今井／へぇー。

高野／大抵「k」か「t」が入ってるんです。切る音というかね。

今井／そうですね。「k」とか「t」って空気を阻害されるので、そのイメージがあるんですよね。私はオノマトペから語彙が発達したというのは、そんなおふざけじゃなくて真剣に考えてもいいんじゃないかなって思います。

高野／オノマトペから言語ができてくるというのは、かなり画期的な見方なのでしょうか？

今井／立場によりますが、今はわりとそういう考えもメジャーになりつつありますね。最初は「何バカなこと言ってるんだ」という感じかと思ったんですけど。私がなんでオノマトペに興味を持ったかというと、子どもの言語発達を調査するために保育園に行くと、子どもも、保育士さんもよくオノマトペを使ってるからなんです。だから、オノマトペには何か意味があるに違いないと思って、それを実験で示すことを始めました。

高野／なるほど。

今井／そうすると、動詞の学習をするときに、オノマトペを使った時とそうじゃない時で、まったく違うという結果が出たんです。ある動作について、オノマトペじゃない動詞で教えると、半分しか正解できない。でも、オノマトペを使った動詞で教えると、80％ぐらいが正しいほうを選べる。しかも日本の子どもだけではなくて、日本語を全然知らない母語が英語の子どもでも、同じぐらい正解できるというデータが出たんです。

高野／面白いですね。

今井／最初に私が論文を発表したのが2008年だったんですけど、そこからけっこうワーッと火がついたように増えて。言語の最初は、オノマトペやジェスチャーのように世界の模倣であり、それを記号化したものなんじゃないかという考えは、わりと自然だと思います。ただ研究者の中でも、「オノマトペって、世界中、同じでしょう？」と思ってる人が多いんですよね。

高野／ああ、そうなんですか。

今井／実は外国語のオノマトペってほとんど分からないんです。オノマトペのように非常に身体的なものでさえも、母語じゃないと分からないというのは、どういうメカニズムで生まれるのかなということは、個人的に興味があって、その問題を深掘りするために実験しています。

高野／たしかにオノマトペってすごく身体的なものですよね。僕の友だちに、アフリカのスーダン出身のモハメド・オマル・アブディンという人がいます。全盲で『わが盲想』という本も書いています。

今井／ああ、あの本！　すっごい面白いし、すっごい正しいと思いました。あの言語学習こそ、記号接地した、生きた知識を作る学習だと思って。

高野／はい。すごい仲よくて。彼は18歳のとき日本に来て、そこから日本語を覚えたんですけど、話すのも文章を書くのも、普通の日本人よりもとにかくうまい。日本語の感覚、語感まで完璧に捉えてる。それなのに、彼はオノマトペが苦手だって言うんですよ。

今井／分かります。自説ですが、「オノマトペ臨界期説」というのを考えています。

高野／オノマトペ臨界期説？

今井／小さいときに、親御さんの仕事の関係で海外で育つ人がいるじゃないですか。そういう人も、両親が家で日本語を話していて、日本語学校とか行っていると、日本語にそんなに問題ない人が多いんだけど、それでもオノマトペだけは苦手という人がけっこういます。

高野／ああ、やっぱりそうなんですね。

今井／うん。オノマトペって一番記号接地することばなんです。音の学習って一番早くて、意味の学習より先なんです。音の学習をして、音と意味をつなげる段階でオノマトペを覚えていくので、その時期にインプットが足りないと、感覚が養われないんじゃないかな。」

「今井／基本オノマトペになりやすいのは、形容詞か副詞なんですよね。名詞はそれほどないですね。

高野／動詞もありますよね。

今井／ありますね。要するに密度の関係なんじゃないかなと思うんです。モーテンの本にも書いてありましたが、名詞って、たくさんの言葉が必要なんです。いろいろなモノを区別して、差異化したいから。そうするとオノマトペだと不都合なんです。

高野／ああ、分かりづらくなるってことですね。

今井／子どもも最初は、「ニャンニャン」とか「ワンワン」とか言うんだけど、例えばネコ科の動物をトラでもライオンでも、みんな「ニャンニャン」と言ってたら、もう区別がつかなくなっちゃいますよね。だからある概念分野で名詞の密度が濃くなると、音象徴は不利になるんです。でも、形容詞とか動詞とかっていうのは、そんなに新しい言葉がどんどん作られるわけでもなくて、わりと密度が一定に保たれているんですよね。

高野／なるほど。そもそも言葉の数も少ないし。ちなみに日本語以外のオノマトペはどんな感じでしょうか。

今井／英語を話す人はいまいちオノマトペについて感覚が薄いのですが、それは英語の中では、漫画の効果音みたいなものしかオノマトペっていう認識がないからなんです。でも実は、英語にもすごく音象徴はあって、それが普通の言葉の中に入りこんでいます。たとえば英語には「歩く」に相当する単語が140あると言われていて、「stroll（ぶらぶら歩く）」「swagger（ずんずん歩く）」「toddle（よちよち歩く）」など、動作の様態がそのまま動詞になっている。これらの動詞を見ればわかるように、音と意味につながりが感じられるものが多いんです。」

「高野／僕は今井先生のこの本で、アブダクション推論にも「おお」と思ったんです。僕はアブダクション推論が大好きなんですね（笑）。

今井／分かります（笑）。推論のなかで、演繹推論と帰納推論は、みなさんご存知だと思うのですが、哲学者のパースが唱えたのが「仮説形成推論（アブダクション推論）」です。観察データを集めて全体に一般化するのが帰納推論だとすると、観察データを説明するための仮説を形成するのがアブダクション推論です。結果をもとに原因を推論するというか。

高野／アブダクション推論というのは論理的には間違いなんですよね。

今井／はい。でも、そもそも「論理」という言葉はけっこうトリッキーで、私たちが日常で使ってる論理も、フォーマルな演繹推論のことではないじゃないですか。論理学の真偽でいうとアブダクション推論は「偽」で間違ってるんだけど、人はどちらかというと蓋然性というか、「普通に考えたらそうだよね？」というふうに考えますよね。

高野／ええ。そうですね。

今井／例えば誰かと待ち合わせしていて、その人が来なかったとする。普段から忙しいから仕事が押しちゃって来られなかったのかなと思うわけですが、それは論理的には正しくないわけです。来なかった理由は、仕事が終わらなかったからだけとは限らなくて、ほかの理由もいくらでもあるわけなので。でも、「ああ、かわいそうに仕事終わんなかったのかな」と思ったりするじゃないですか。そういうのも全てアブダクション推論ですよね。

高野／チンパンジーはそれができないんですよね。

今井／そうです。動物はアブダクション推論しないんです。

高野／例えば、三角とリンゴを覚えさせて、三角を見せると、リンゴを持ってくることはできる。でもリンゴを見せても三角には行かない。逆方向の対応づけができない。

今井／そうです。前提と結果をひっくり返してしまう推論を対称性推論と言いますが、これはアブダクション推論と深い関係があります。それを動物はやらないんです。

高野／人間は当たり前にやってるし、やらずにはいられない。

今井／そうです。常に因果を考えてしまう。でもそれは正しいとは限らないんです。

高野／僕がやってることも、すごい手がかりの少ないアブダクション推論を連発してるわけです。もしかしたらムベンベがいるかもしれないとか。僕はそれがすごい好きなんですよね。でも、論理的に正しくないから、だいたいやることが間違ってる（笑）。

今井／でも私は、人類を進化させ、文化を作ったのは、論理的に合っている演繹推論ではなくて、間違っているアブダクション推論だと思うんです。それが人間のデフォルトの思考だから、こんなに進化したんだと思う。

高野／いやぁ、本当に素晴らしいことをおっしゃいますよ。僕は今まで自分のやってることを「間違う力」とか呼んでましたし、人からも呼ばれたりしてきたので。

今井／演繹推論は論理的には必ず真だけど、進まないんです。新しい知識を作らないんですね。新しい知識を作るのはアブダクションなんです。

高野／そうですよね。

今井／はい。だから私のセオリーでは、アブダクションをするから人間は言語という体系を作ることができた。」

○今井むつみ
いまい・むつみ　1989年慶應義塾大学大学院博士課程単位取得退学。94 年ノースウェスタン大学心理学部Ph.D.取得。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。著書に『ことばと思考』（岩波新書）、『学びとは何か』（岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『英語独習法』（岩波新書）など。共著『言葉をおぼえるしくみ』（ちくま学芸文庫）、『算数文章題が解けない子どもたち』（岩波書店）、『言語の本質』（中公新書）などがある。

○高野秀行
1966年東京都生まれ。早稲田大学探検部在籍時に執筆した『幻獣ムベンベを追え』でデビュー。辺境探検をテーマにしたノンフィクションを中心に『西南シルクロードは密林に消える』『ミャンマーの柳生一族』『アヘン王国潜入記』『謎のアジア納豆　そして帰ってきた〈日本納豆〉』『幻のアフリカ納豆を追え！　そして現れた〈サピエンス納豆〉』など著書多数。『謎の独立国家ソマリランド』で第35回講談社ノンフィクション賞、第3回梅棹忠夫・山と探検文学賞受賞。

☆mediopos-3125　　2023.6.8

いまやアルゴリズムによるＡＩが
人間にとってかわるかのような議論がある

ひょっとしたら
この宇宙が生まれたのは
０と１からなのかもしれないし
ＤＮＡもデジタルコードで記述されはするが
この世界ももちろん私たち生物も
アナログ的な存在であることはいうまでもない

どんなにＡＩが
人間を超えた処理能力を発揮し
デジタル・テクノロジーが
私たちの生活を便利にし
ときに脅かすようなことがあったとしても
私たちはデジタルな生を送ってはいない
あるいは送ることはできない

ＡＩがどんなに有能な働きをするとしても
それにはまず最初に
それになにをしてほしいかを指示する必要がある

たとえばＡＩが遊びを覚えるようになったとしても
まずは「遊ぶ」ということを教えなければならない

過去の膨大な作品情報を背景に
文学作品や詩作さえ可能になったとしても
まずは文学や詩を作るということを
教えなければならない

なにもないところから
新たなものをつくりだすような意味での創造性は
現状のＡＩというフレームでは可能とはならないだろう

さて本書『アナロジア』は
「ＡＩの次に来るもの」という副題があるように

アナログからデジタルへ向かってきている世界が
またアナログ世界へと向かうだろうことが示唆されている

著者は物理学者のフリーマン・ダイソンを父にもつ
科学史家ジョージ・ダイソン
少し前になるが
『チューリングの大聖堂』（邦訳2013年）という
コンピュータの創造とデジタル世界の到来についての著書がある

さて本書だが
自然と人間と機械の関係において
これまで三つの時代があったという

第一の時代は工業化以前の時代
第二の時代は工業の時代
第三の時代はデジタル論理の時代である

そしてこれから到来するであろう第四の時代には
アルゴリズムの時代は終わり
「アナログ」の時代になることが示唆されている

ここで重要な視点は
デジタルとアナログの違いである

「アナログ・コンピューティングと
デジタル・コンピューティングはどちらも無限の力を持つが、
それぞれがどれだけ進化しても発揮する力は異なる」

デジタルは「整数の一、二、三‥‥‥を
際限なく数えてできる整数の無限集合」であり

アナログは「直線上の点によって表される
実数の無限集合」であり
「完全な連続体」である

自然界では「神経系（ニューラル・ネットワーク）と呼ばれる
アナログ方式のコンピューターが進化し、
世界から収集した情報を統合し」
学習し「自分自身の行動を制御することを学び」
「環境を制御することを学ぶ」

現在のデジタルコンピューターは
「際限なく数え」る方式なため
増え続ける膨大なデータを常にアルゴリズムによって
情報処理し続けなければならないが

アナログ方式のコンピューターであれば
生命のような仕方で自律性と知能を発現させることができる

いってみれば
計算的思考のみによる情報処理方式と
直観的思考をも使える情報処理方式の違いともいえるだろうか

おそらくこれからは
デジタル的なツールも活用しながら
デジタルでは不可能な部分の可能性を生かしたアナログ知性を
いかに育てていくかが課題となっていくだろう

▪ジョージ・ダイソン（服部桂監訳・橋本大也訳）
『アナロジア／AIの次に来るもの』（早川書房 2023/5）

▪ジョージ・ダイソン（服部桂監訳・橋本大也訳)
『アナロジア／AIの次に来るもの』（早川書房 2023/5）

（「第０章　ライプニッツ群島ーーーーアナログからデジタルへ、そしてまたアナログへ」より）

「自然と人間とマシンの絡み合う運命には、これまで四つの時代区分がある、第一の時代は、工業化以前の時代で、テクノロジーは人間が自分の手で作り出せる道具や構造物に限られていた、

第二の時代は工業の時代だ。機械が導入された、単純な工作機械かた始まり、他の機械を再生産できる機械が登場した。自然は機械の支配下に置かれ始めた、

第三のデジタル論理の時代はパンチカードと紙テープに始まり、情報が自らを複製するようになった。それまで生物学に限られていた自己複製や自己増殖は、マシンが担うようになった。自然が支配権を手放したかのように思われた。この第三の時代の後半、ネットワーク機器が増殖し、多細胞的な複雑な情報が溢れかえった時、それまでとは逆の展開が起きた。

第四の時代には、緩やかな進みだったのでほぼ誰も気がつかなかったが、マシンは自然の側に、自然はマシンの側に歩み寄り始めた。人類はまだその関係の輪の中にいたが、もはや主導権を握ってはいなかった。主体性の喪失に直面した人々は、「アルゴリズム」やそれをコントロールしている人々を非難し始めたが、もはや明確な支配者のアルゴリズムなど存在しないことに気づいていない。アルゴリズムの時代は終わったのだ。未来は別の何かが握っている。

人工知能をプログラムして思い通りに動かすことはできると信じることは、神と話すことができる人がいるとか、ある人は生まれつきの奴隷だと信じるぐらい、根拠のないものであることがはっきりするだろう。第四の時代はわれわれを、もはや手に負えない。あるいは完全には理解できないテクノロジーと人間が共存していた第一の時代、スピリチュアルだらけの原風景へと引き戻そうとしている。そこは人類の心が形成された場所だ。われわれは糧として、どこを向いても心や知能のあるものに囲まれて育ってきた。テクノロジーの黎明期から、われわれは道具とそこそこの関係を続けてきた。クラウドで人工知能が提供されるというのは何も新しい話ではない。第四の時代にふさわしい生き方をするためには、第一の時代を振り返ることが役立つ。」

「ライプニッツのアイデアは二〇世紀のデジタル・コンピューターと、一八世紀のベーリング・チリコフ探検隊によって、二度にわたって北米に到達した。ピョートル大帝の命令でアメリカ西部の海岸に到達した航海士たちを発見したのは、約一万五〇〇〇年前の最後のテクノロジー以来ずっとうまくやってきた人々だった。
そこはタブラ・ラサではなかったのだ。」

（「第９章　連続体仮説」より）

「一九世紀の南北戦争直後に鉄道が平原を無慈悲に横断した。同じように、二〇世紀には第二次世界大戦後にデジタル・コンピューターが北米を席巻した。コンピューターについて懸念する声はポツリポツリと静かに上がっていた。ジュリアン・ビゲローとともに近代サイバネティクスの創始者ノーバート・ウィーナーは、一九四三年の予言的な『行動、目的、目的論』から亡くなる一九六四年までの間に、「未来の世界は、われわれの知性の限界をめぐる激しい攻防戦になる。ロボット奴隷を侍らせて寝そべっていられる安楽ハンモックの世界ではなないだろう」という予言を残した。ロボットの番人であろうとする人間が、逆にロボットに監視されることになる。

ウィーナーの警告は無視された。その第一の理由は、デジタル・コンピューターの開発が水爆の開発と同時に行われたからである。人々は水爆という短期的な視点での危険に目を奪われて、人間の主体性をマシンのコントロールに委ねるという長期的な視点の危機が見えなかった。第二の理由としては、人間がマシンに指示を与えている限り、人間の自律性が危険に晒されるなどとは思われなかったからであった。

デジタル・コンピューターがアルゴリズム、つまり論理的な段階的手続きに依存しているからといって、マシンの知能が論理的な制御のもとに保たれる保証はない。マシンの知能の根底にあるアルゴリズムを見出そうとすることは、クジラ同士のコミュニケーションの根底にある言語を見出そうとするのと同じくらい無駄なことかもしれない。アルゴリズムの領域をいくら探しても、マシンの真の自律性と知能のしるしを見つけることはできまい。

自然界では、神経系（ニューラル・ネットワーク）と呼ばれるアナログ方式のコンピューターが進化し、世界から収集した情報を統合している。神経系は学習する。自分自身の行動を制御することを学び、自分自身や他の種類の生物の行動を含めて、環境を制御することを学ぶのだ。マシン性能の三世代以上前にスタン・ウラムは「数学的論理が人間の思考法と同じだと、どうして強く確信できような？」と問いかけていた。」

「ライプニッツの無限小の研究に起源を持つ連続体仮説は、アナログ・コンピューティングとデジタル・コンピューティングはどちらも無限の力を持つが、それぞれがどれだけ進化しても発揮する力は異なることを示唆している。一八七八年に超限数のパイオニアのゲオルク・カントールが初めて立て連続体仮説は、無限の数存在する無限のすべて二種類に分ける。ひとつは、整数の一、二、三・・・・・・を際限なく数えてできる整数の無限集合だ。もう一方は、直線上の点によって表される実数の無限集合だ。直線上の点の数はその線が有限の長さであっても無限個であるばかりでなく。どんなに近い二点の間にも無限個の点が存在する。

（・・・）

連続体仮説によれば、砂粒の数のような数えられる無限はすべて整数と一対一で対応させることができる。連続線上の点の数のような数えられない無限は完全な連続体である。このふたつの無限の間に中間の無限は存在しない。無限はカンファレンスの最後に無料で配られるTシャツのようなもので、ＸＬサイズとＸＳサイズしかない。もし連続体仮説が正しいとすると、無限にはふたつのサイズ、すなわちふたつの大きさしかなく、中間のサイズの無限は存在しないことになる。連続体仮説の核心は、連続で数えられない無限と、離散値で数えられる無限の間に中間がなく、本質的な違いがあるという予想だ。」

「連続体仮説は、生物と非生物の計算方法の違いを説明できる。コンピューターは、カントールの無限のように、二種類に分けることができる。デジタル・コンピューターは有限であるが無限の離散化状態をとるマシンで、その可能な状態は整数に一対一で対応させることができる。アナログ・コンピューターは、整数に直接一対一で対応する整数状態を持たず、連続体の部分集合に属し、その部分集合はカントールによれば、連続体全体の大きさを持つとされる。

デジタル・コンピューティングでは、エラーや曖昧さは許されず、正確な定義と各段階でのエラー訂正が必要になる。アナログ方式の計算は、エラーや曖昧さを許容するだけでなく、それを使ってうまく動く。デジタル・コンピューターは、技術的には、硬直化してノイズに対する耐性を失ってしまったアナログ・コンピューターだ。アナログ・コンピューターはノイズを受け入れるばかりか、例えば実際の発達途上の脳の視覚系や聴覚系などの神経ネットワークは、機能するために一定レベルの背景ノイズを必要としさえする。」

「テクノロジーの第二と第三の時代においては、連続体の力は自然に委ねられ、一方、数えられる無限の力はマシンが行使した。中間のサイズの無限が存在しないため、自己再生技術や自己複製コードが埋めるべき空白を残した。デジタル宇宙のビット数は数えられるが、急速に増えているので、どの部分集合をサンプリングしても、常にビットの数が増えている。まるで、浜辺で線上の点を数えていたのに、砂粒の数が二倍になっているので、砂粒を数えている友人に完全に追い抜かれることがなくなったようなものだ。もし、中間のサイズの無限があるとしたらそんなふうに見えるだろう。

デジタル宇宙は現在、一秒間の約三〇兆個のトランジスターで拡張されており、数えることはできるが数えきれないコード列で満たされている。このコードの増殖は、三つの基本原則によって推進されている。ひとつ目は、チューリングが実証したデジタル・コンピューターの普遍性だ。ライプニッツの「すべての機械に共通する普遍的言語」というビジョンが現実になった。ふたつ目はフォン・ノイマンによる自己増殖するオートマトン理論で、そのような万能のマシンが自己増殖できることを証明した。三つ目はシャノンの三分リング（標本化）定理で、離散化状態のマシンがあらゆる連続関数を任意の解像度で処理できることを証明し、デジタル・コンピューターが世界を支配する道筋を開いた。

テクノロジーの第四の時代には、連続体の力が機械のものになる。アナログ部品を使ってデジタル・コンピューターが作られたときと同じように、次の革命はアナログ・システムの台頭であり、デジタルプログラミングの支配が終わりを告げる。プログラム可能な機械によって自然をコントロールする方法を探す人間に対して、自然が答える答えは、プログラム不可能な性質を持つシステムを構築することである。」

（「監訳者解説」より）

「デジタルとアナログの計算は、本当は何が違うのだろうか？　これは概念的に言えば、一次元的で数を数えることを基本にした算術的な論理のデジタル式と、視覚的で二次元的な類似や比例を使う幾何学的なアナログ式の違いで、一方は整数という概念の数を数えることの限界があり、一方は幾何学的な数を使わない方法として、計算としては意識されてこなかった。

われわれが現在使っているデジタル式のコンピューターは、プログラム（アルゴリズム）を書けば、どんな事でもできる魔法の機械のように思える。たしかに、自然や社会の様々な事象を数値化しデータとして扱い、その原理を定式化して高速に処理すれば何でもできる。しかし、アルゴリズム化できないもの、つまりプログラムとして書けないものはどうするのか？　そもそも、そんなものは存在するのか？

古代から知られている有名なピタゴラスの定理は誰もが知っているだろう。直覚三角形の斜辺の長さの二乗は、直角に交わる他の二辺の長さをそれぞれ二乗して足したものに等しいというもので、この不思議な現象が正しいことを幾何学的に証明する方法はいくつも知られている。そしてコンピューターでこの数式をコードに書けば、すぐさま未知の辺の長さを計算して算出することができる。

しかしデジタル方式のコンピューターにはこの定理を発見することや、証明することはできるのか？　まずコンピューターはそうした問題意識自体を持たないだろう（人間の思考過程を真似て、問題意識というもの自体をプログラミングすることが不可能とは言い切れない。生物の遺伝や進化を模索し、定式化したアルゴリズム自体を自ら再帰的に書き換える手法を使って、プログラム自体をランダムに変化させて、元々それが意図していた処理を超えた最適化や発見を促す遺伝的アルゴリズムのような手法がないわけではなく、現象のデータを大量に読ませてディープラーニングを繰り返して、ケプラーの法則や熱力学の保存則を導いたという事例もあると聞くが、それは真の発見というより、人間の発想を追認しただけだ。コンピューター自体は少なくとも、新しい発見をしたいという意思は持たないだろう。心や意識を持つ完全なＡＩが実現できると主張する人もいるが、まだ結論は出ていない）。

（・・・）

人間の生活は、個別の部分ではコンピューターや他の道具に劣っているが。われわれの生活のほとんどは計算しなくてもできることばかりだ。〔・・・）

ところが万能に思えるコンピューターは、小さな虫が食料を探し敵から身を隠し、子孫を残していくという単純と思えることを、ロボットなどを使って実行しようとしても、とてつもないプログラミング量やムダなエネルギーを使わないと真似できず、現在は両者のギャップである「無気味の谷」は超えられていない。」

「脳や神経系はデジタル素子でできているのではなく、プログラミングをしているわけでもなく、ニューロンがただ複雑に絡み合って、外界からの刺激でお互いのコミュニケーションのパターンを変化させて、不測の状況に対しても適合しようとしているだけだ。ところが不正確で遅いという欠点はあっても、これだけ万能で消費エネルギーも少ない合理的なシステムは人工物の中にはいまだ存在しない。」

「生物も最小単位の情報がＤＮＡというデジタル的なコードで記述されるが（遺伝子型）、それが大量に組み合わされて細胞や器官になった個体同士の関係はアナログ的で非決定的だ（表現型）。つまりこの世のすべてのものは、ミクロなレベルでは言語的・デジタルで。マクロなレベルでは非言語的・アナログな存在なのだ。
１と０の離散的な論理がデジタルで、その他すべてが単にアナログだと考え区別するだけでは。こうした問題の本質を理解することはできず、もっと大きな構図の中に両者を捉え直す必要があるだろう。」

○ジョージ・ダイソン　George Dyson
1953年生まれ。アメリカの科学史家。16歳で家出し、カナダのブリティッシュ・コロンビア州沿岸の森林に移り住む。地上30メートルのツリーハウスで暮らしながら、アラスカ先住民であるアリュート族のカヤック「バイダルカ」の復元に情熱を注ぐ。のち、科学史家に転身。著書に『チューリングの大聖堂』（ハヤカワ・ノンフィクション文庫、第49回日本翻訳出版文化賞受賞）、『バイダルカ』、Darwin among the Machines、Project Orionなど。父は世界的な物理学者のフリーマン・ダイソン、姉は投資家でIT業界のオピニオンリーダーであるエスター・ダイソン。